研　究　紀　要

第　10　号

青森県における縄文時代前期の土器埋設遺構	坂本　真弓	1～14
餅ノ沢遺跡の土器について	野村　信生	15～26
三内丸山遺跡の終焉　― 縄文時代後期の遺物・遺構 ―	成田　滋彦	27～34
青森市朝日山（2）遺跡の土坑墓について	中嶋　友文	35～44
宇鉄遺跡の石銛装着　― 津軽海峡南岸の恵山文化期の例 ―	福田　友之	45～52
青森県鉄関連遺構一覧表　― 中弘・南黒・西北五編 ―	設楽　政健	53～60

２００５．３

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県における縄文時代前期の土器埋設遺構

坂　本　真　弓

1　はじめに

縄文時代の遺構には地面を掘り込み、土器を埋設した遺構がある。住居跡内であれば「埋甕」、屋外であれば、「屋外埋甕」、「埋設土器」、「土器埋設遺構」など呼称されている。

青森県では1955年に蟹沢遺跡（八戸市）の発掘調査で前期の土器から幼児骨が出土した例がある(註1)。その後、類例の検出や研究に目立った動きがないままであった。この遺構は縄文時代中期以降の検出例が多数を占めていたが、近年、前期の検出例も増加している。このため、青森県における縄文時代前期の土器埋設遺構を集成し、検討を加えることとした。

2　土器埋設遺構の定義

屋外に埋設された土器の中から、胎児～幼児骨が検出される例が多数あることから、一般に土器埋設遺構は埋葬施設として捉えられている。ただし、屋内については「埋甕（縄文中期以降）」などの研究成果があり、一概には言えないのが現状である。縄文時代の埋葬事例を研究している山田康弘氏によれば、「住居跡内の土器棺葬（土器埋設遺構）はいまだ確実視される例は存在しない」(註2)とされているので、ここでは屋内の土器埋設遺構については除外し、屋外検出の土器埋設遺構＝埋葬施設のみを扱うこととした。

3　遺跡の分布（図１）

青森県内で縄文時代前期の土器埋設遺構は、15遺跡307例が発見されている。これらは円筒下

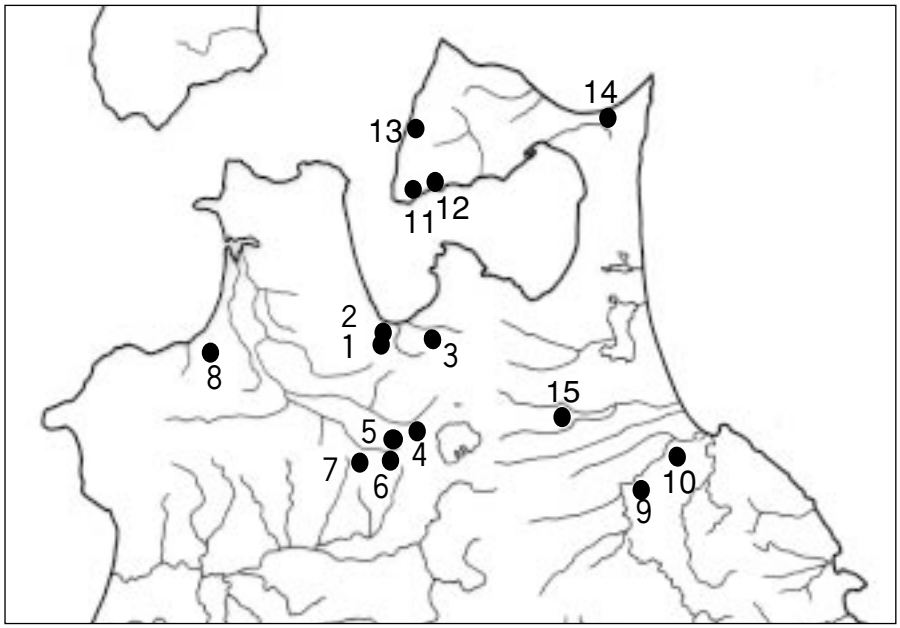


図１　遺跡位置

番号	遺跡名
1	岩渡小谷（4）
2	三内丸山
3	稲山
4	板留（2）
5	大平
6	大面
7	石川長者森
8	鳴沢
9	畑内
10	蟹沢
11	瀬野
12	稲平
13	八幡堂
14	石持納屋
15	中崎沢

層式（以下、単に下層式とする）土器とみられ、津軽地域に多く、次いで下北地域、三八・上北地域と続いている。本県隣接地域では、岩手県北部の大日向Ⅱ遺跡の41例、秋田県北部の池内遺跡の９例、北海道南部の新道２遺跡の８例など、大部分が下層式土器の埋設例である。この地域は円筒土器文化圏内にあるが、この文化圏外の岩手県南部の峠山牧場Ⅰ遺跡や秋田県南部の上ノ山Ⅱ遺跡などでは、該期の大木式土器が埋設された例がある。

本県から検出される土器埋設遺構の特徴は、１基で検出される例は少なく、住居跡や遺物捨て場などの集落に近接して立地する傾向がある。また、集中して構築される場合とまばらに構築される場合に二極化するのが特徴である。土器埋設遺構の集中する遺跡としては、陸奥湾沿岸の岩渡小谷（４）・三内丸山・稲山遺跡、岩手県に隣接する新井田川流域の畑内遺跡が挙げられる。この流域には前述した大日向Ⅱ遺跡も立地しており、土器埋設遺構が集中する地域としてこの二地域に大きく分かれている。

４　土器埋設遺構の分類（図２）

分類にあたって、以下のように報告書の記載内容を統一した[註３]。また、埋設部位については、図２－１に示したとおり、６つに分類した。１と２は胴部の残存部の違いで分け、４・５についても同様で、検出状況の断面図や写真、文章記載・実測図から判断している。実測図に関しては、個体復元できなかったものなどで掲載されていないものもあり、あくまでも検出状態を最優先にして分類した。複数個の土器が埋設されているものについては分けて記載している。

図２－２の埋設形態については、大きく「正立」・「倒立」・「入れ子」・「合口」に分けられる。正立・倒立形態のものが単独の埋設形態であるのに対し、入れ子・合口は複数個の土器を使用するのが特徴である。「入れ子」は、正立の土器と正立の土器を重ね合わせたもの、倒立の土器と倒立の土器を重ね合わせたものに二分され、便宜上、前者を「正正入れ子」、後者を「倒倒入れ子」と呼称する。「合口」は下部の土器が正立で、上部の土器が倒立して埋設された形態で、土器の口縁同士を組み合わせており、上部の土器の大きさで二つに分類した。下部の土器が上部の土器より小さいものを「合口１」、上部の土器が下部の土器より大きく、完全に覆い被さるものを「合口２」とした。

正立・倒立・入れ子・合口の埋設形態のなかで、地面に対し傾いて検出されたものをとくに「斜位」の埋設形態として分類した。報告書に記載されたもので、明らかに斜めに傾いているものは「斜位」としたが、これについては、遺構の立地、土砂の流入などによって変化した可能性もあり、あくまでも、「正立・倒立・入れ子・合口」とした分類の一要素として捉えることとする。

図２－３は土器埋設遺構以外に出土した遺物の出土状況を三つに分類したものである。土器埋設遺構の下部に設置されるもの（Ａ）、埋設した土器の上部に設置されるもの（Ｂ）、土器内から出土したもの（Ｃ）に分けられる。土器埋設遺構に付属する施設としての出土状況（Ａ・Ｂ）、土器内に副葬品として埋納されたと思われる出土状況（Ｃ）と想定される。

５　分類結果（図３～５）

縄文時代前期の傾向を図３－１～３の円グラフで示した。

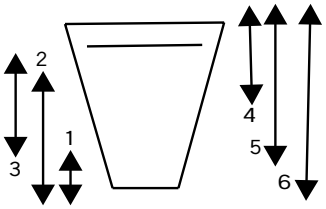


図 2 - 1　土器の埋設部位

番号	残　存　部　位
1	胴部下半～底部
2	胴部上半～底部
3	胴部のみ
4	口縁部～胴部上半
5	完形に近く、底部のないもの
6	埋設時、完形に近い形状のもの

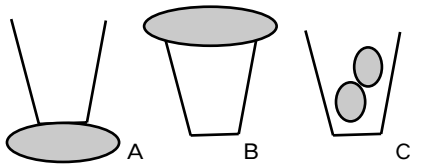
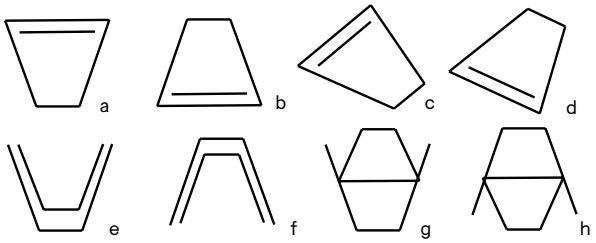


図 2 - 3　礫を用いた付属施設（A・B）と土器内出土遺物（C）の違い



	埋 設 形 態		埋 設 形 態
a	正立	e	正正入れ子
b	倒立	f	倒倒入れ子
c	正立斜位	g	合口 1
d	倒立斜位	h	合口 2

図 2 - 2　埋設形態の種類

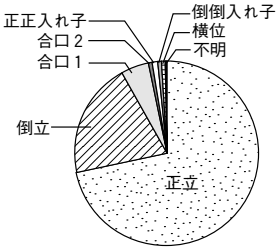


図 3 - 1　埋設形態の割合

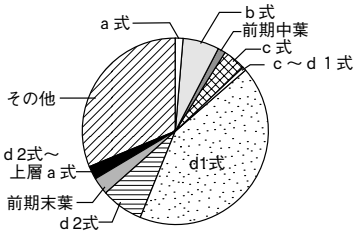


図 3 - 2　形式別割合

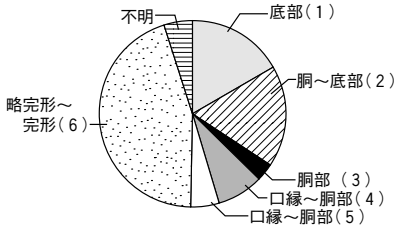


図 3 - 3　残存比率

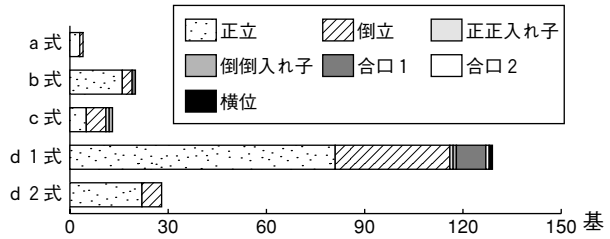
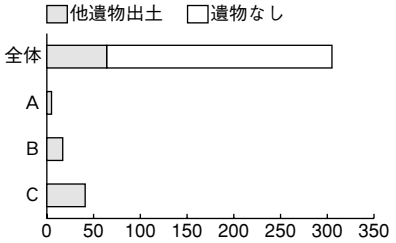


図 4　土器形式別個体数と埋設形態数



土器付属施設数

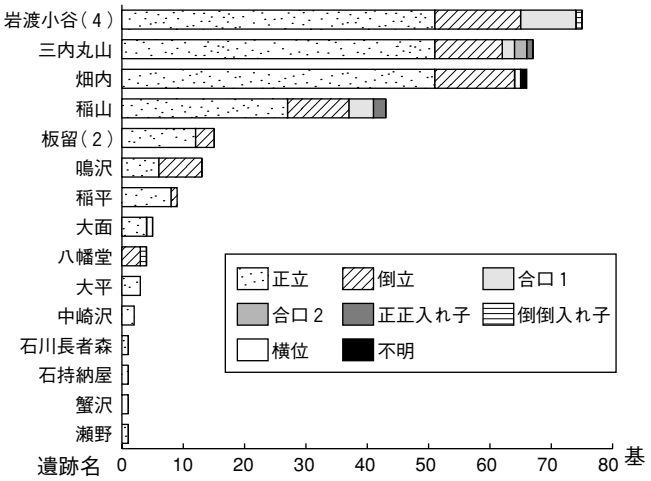
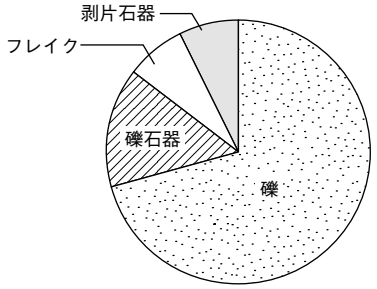


図 5　各遺跡の埋設形態数



土器内出土遺物（c）の内訳

埋設形態－307例中、正立は220例で、このうち斜位のものは20例で併せて71％を占め、埋設形態の主体となっている。倒立は62例で、このうち斜位のものは９例で併せて21％と１／５を占める。複数個体を組み合わせた入れ子５例と合口17例は全体の７％である。

土器型式別－307例中、土器型式の明らかなものは183例で、全体の約60％である。この中で最も多い型式は前期末葉の下層ｄ１式の124例で、全体の42％、ついで下層ｄ２式の24例、下層ｂ式の19例、下層ｃ式の12例、下層ａ式の４例がある。

埋設部位－324例中、埋設部位の明らかなものは304例で、最も多いのは口縁部～底部の完形土器（６）148例で全体の45％、次いで胴～底部（２）50例、底部（１）52例などで、底部を含む埋設部位が全体の36％を占め、底部を含まない胴部（３）６例、口縁～胴部（４）28例、口縁～胴部（５）20例などが全体で16％を占めている。

土器埋設遺構に伴って出土した遺物は305例中、69例で、全体の１／５に満たない。土器埋設遺構の下部に設置されるもの（Ａ）５例、埋設した土器の上部に設置されるもの（Ｂ）15例、土器内から出土したもの（Ｃ）58例である。土器下部には自然礫や台石・石皿を設置した例（108・112・117～119・157）が見られ、蓋石にも同様の礫を使用している。蓋石は土器上部をほぼ完全に覆うものもあり、Ｃの土器内出土遺物とは区別される。土器内の遺物には、角礫・剥片・小石など各種の石材が用いられている。石器は数が少ないものの、石鏃・石匙・シクレイパー・敲磨器・磨石などが出土している。

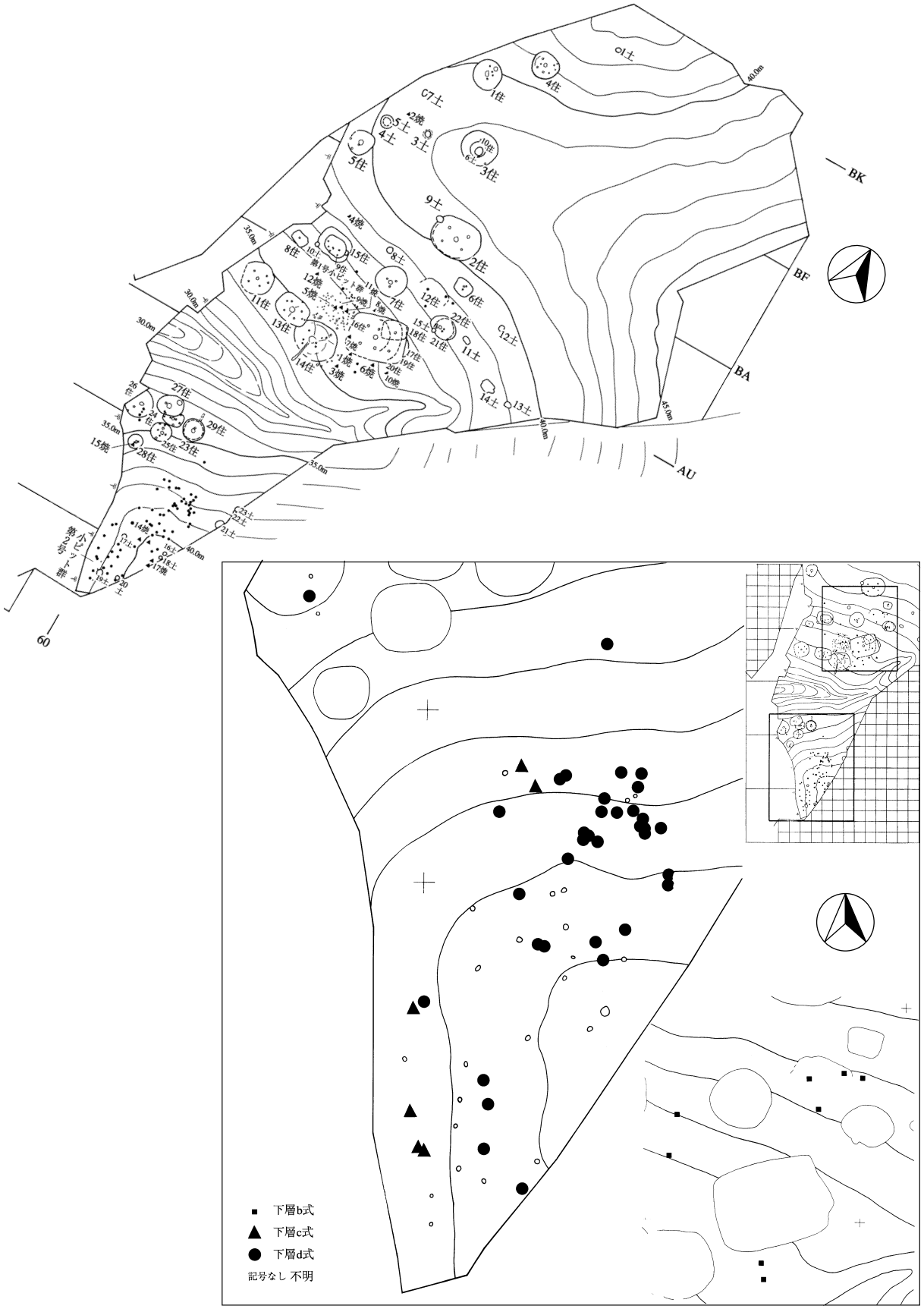
図４で示したグラフは土器型式別の個体数と埋設形態の内訳である。

土器型式別に見ると、前述のとおり下層ｄ１式期には急激に増加し、ｄ２式期も数量は少ないものの、ｄ式期以前に比べれば検出例が多い傾向にある。各型式を概観しても、正立土器の割合が高く、倒立土器がこれについでいる。ｃ式期はこの傾向とは異なり、正立・倒立の割合がわずかながら逆転している。複数土器を使用する入れ子・合口の埋設形態は、下層ｂ・ｃ式期に現れ、ｂ式期には三内丸山遺跡で合口２の形態が出現している。また、ｃ式期には稲山・八幡堂遺跡で正正入れ子・倒倒入れ子の形態が出現している。これらは入れ子・合口形態の初現と見られ、ｄ１式期に増加し、とくに合口１の形態が多く埋設されている。

図５のグラフには遺跡別の埋設形態の検出数を示した。全体の傾向と併せて見ると、正立の土器が多数を占め、これに倒立の土器が続き、その比率はおよそ４：１～５：１に収まる傾向にある。ただし、八幡堂遺跡ではすべて倒立状態の土器が検出され、鳴沢遺跡では正立と倒立が１：１の割合で検出されている。土器埋設遺構が集中する陸奥湾沿岸の３遺跡（岩渡小谷（４）・三内丸山・稲山）と岩手県に隣接する畑内遺跡の傾向を比較すると、正立・倒立の比率には大きな違いが見られないが、入れ子や合口など複数個体を組み合わせて埋葬するものは少なく、前述のようにｄ１式期に増加することを併せると、陸奥湾沿岸の三遺跡周辺でとくに集中して行われた埋設形態とも考えられる。

６　土器埋設遺構の集中する遺跡（図６～９）

前期における土器埋設遺構の属性については前述のとおりであるが、次に、土器埋設遺構が集落内でどのような場所にあるのかを検討したい。検討資料として、集落との関係が明らかで、土



型式別分布

図6　岩渡小谷(4)遺跡遺構配置図（文献2から転載）

器埋設遺構も多い岩渡小谷（４）・三内丸山・稲山・畑内の諸遺跡を取り上げる。

岩渡小谷（４）遺跡（青森市）（図６）

調査区は丘陵を開析する小谷とこれに面した斜面に立地する。前期の集落跡が主体で、前期の竪穴住居跡31軒（帰属時期の分かるもの－下層ｂ式相当５軒・ｃ式相当５軒・ｄ式相当11軒）、土坑10基、土器埋設遺構75基、焼土遺構、小谷を利用した木組遺構などが検出されている。このうち竪穴住居跡は、「下層ｂ・ｃ式期には小谷を挟んだ南北斜面の下側に立地しているが、下層ｄ式相当期になると、北側斜面のみに立地する。土器埋設遺構は南側斜面の頂部から傾斜地にかけて集中し、北側斜面の住居跡周辺にもその分布が認められる。前期中葉～後葉の下層ｂ式相当期には竪穴住居跡の周辺に位置しており、住居跡と土器埋設遺構は近接した関係を持っている。（中略）前期後葉の下層ｃ式相当には土坑墓と考えられる土坑の分布と重複する可能性がある。（中略）前期後～末葉の下層ｄ式相当期には、土器埋設遺構の範囲は土器捨て場と一部範囲が重なる」(註４)と記載されている。

土器埋設遺構は埋設形態による相違はあまり見られなかった。非常に密集しているが、下層ｄ1式期には竪穴住居跡の凹地に埋設されている。

三内丸山遺跡（青森市）（図７）

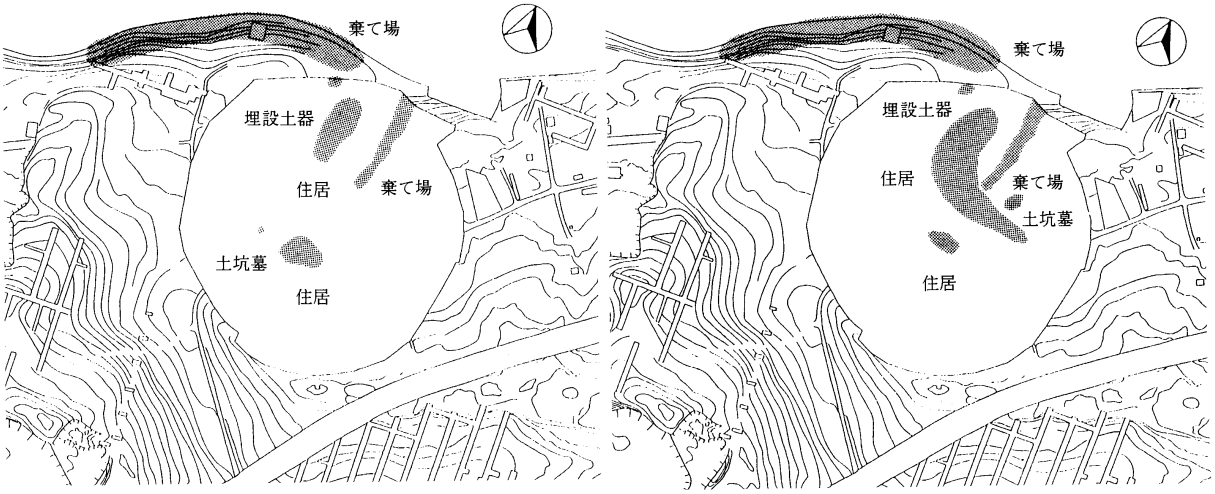
前期は２期に区分され、第Ⅰ期　前期中頃、第Ⅱ期　前期末頃としている(註５)。報告書作成中であるため、竪穴住居跡・土器埋設遺構以外の遺構数は不明である。前期の竪穴住居跡は約71軒（第Ⅰ期約20軒、第Ⅱ期約38軒(註６)）である。土器埋設遺構は67基（帰属時期の分かるもの－下層ｂ式２基・ｃ式２基・ｄ１式16基・ｄ２式６基）で、遺構配置は不明であるが、調査区内の遺構集中範囲やグリッド配置から、集落内におけるおおよその関係がつかめそうである。第Ⅰ期は「子どもの墓は住居の北側から台地の縁にかけて分布する。この段階で住居跡と墓域が区別されているようである」。第Ⅱ期は「子どもの墓は住居跡の北側から台地の縁にかけて分布する」(註５)としている。

土器埋設遺構の配置図は、報告書に基づいて作成した。単独で離れた場所から検出される土器埋設遺構もあるが、多くがⅥＡ～ⅥＰ－80～90の範囲に集中していることが分かる。下層ｂ・ｃ式期には、検出された数量が少ないものの同じ範囲に埋設される。下層ｂ式段階の合口の埋設形態が確認された。下層ｄ１式期には、数量が増加するため、密集の度合いも大きくなる。図から、当遺跡の下層ｄ１式期の土器埋設遺構は、同じ埋設形態や複数の土器を使用する埋設方法、副葬品の類似など、共通するものが密集して構築されるのが特徴であると思われる。ⅥＪ～ⅥＮ－85～87グリッドでは倒立土器が９基集中して埋設されていた。また、図示していないが、表41・42の「合口」や表10・11の「合口」・「入れ子」など隣接して検出されたものやＲフレイクを副葬品に持つもの（表14・16）などが挙げられる。

下層ｄ２式期には同じ土器埋設遺構の範囲に２～数基単位で１ヶ所に密集している。ⅥＨ～ⅥＪ－81・82グリッド、ⅥＣ～ⅥＥ－90グリッドなどがこれに当たる。

稲山遺跡（青森市）（図８）

調査区は丘陵斜面が南東側に緩やかに突き出した台地状地形で、丘陵頂部及び斜面に立地する。前期の遺構は竪穴住居跡27軒（帰属時期のわかるもの－下層ｂ式３軒・ｄ式23軒）、土坑209基、



第Ⅰ期　縄文時代前期中頃

第Ⅱ期　縄文時代前期末頃

（文献４P105図を縮小して転載）

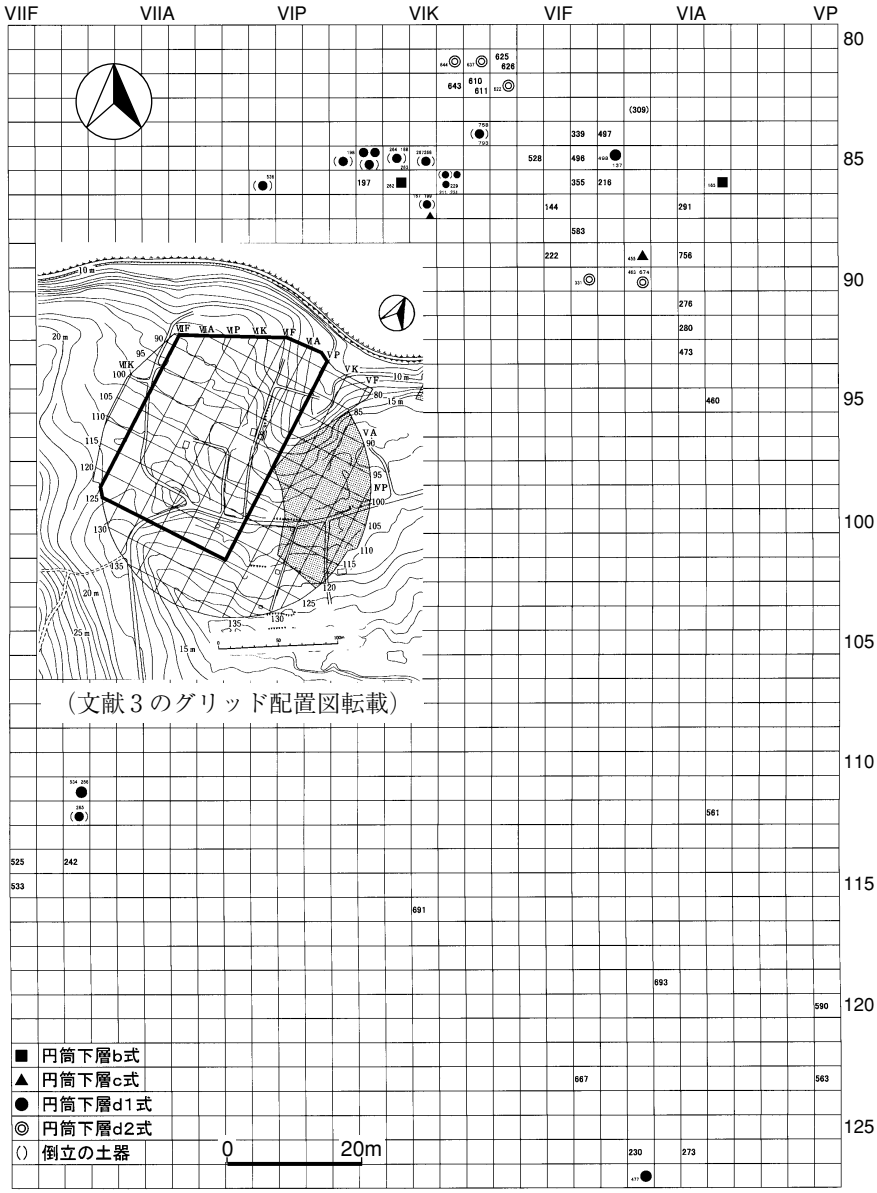


図７　三内丸山遺跡の前期土器埋設遺構配置図（文献５を基に作成）

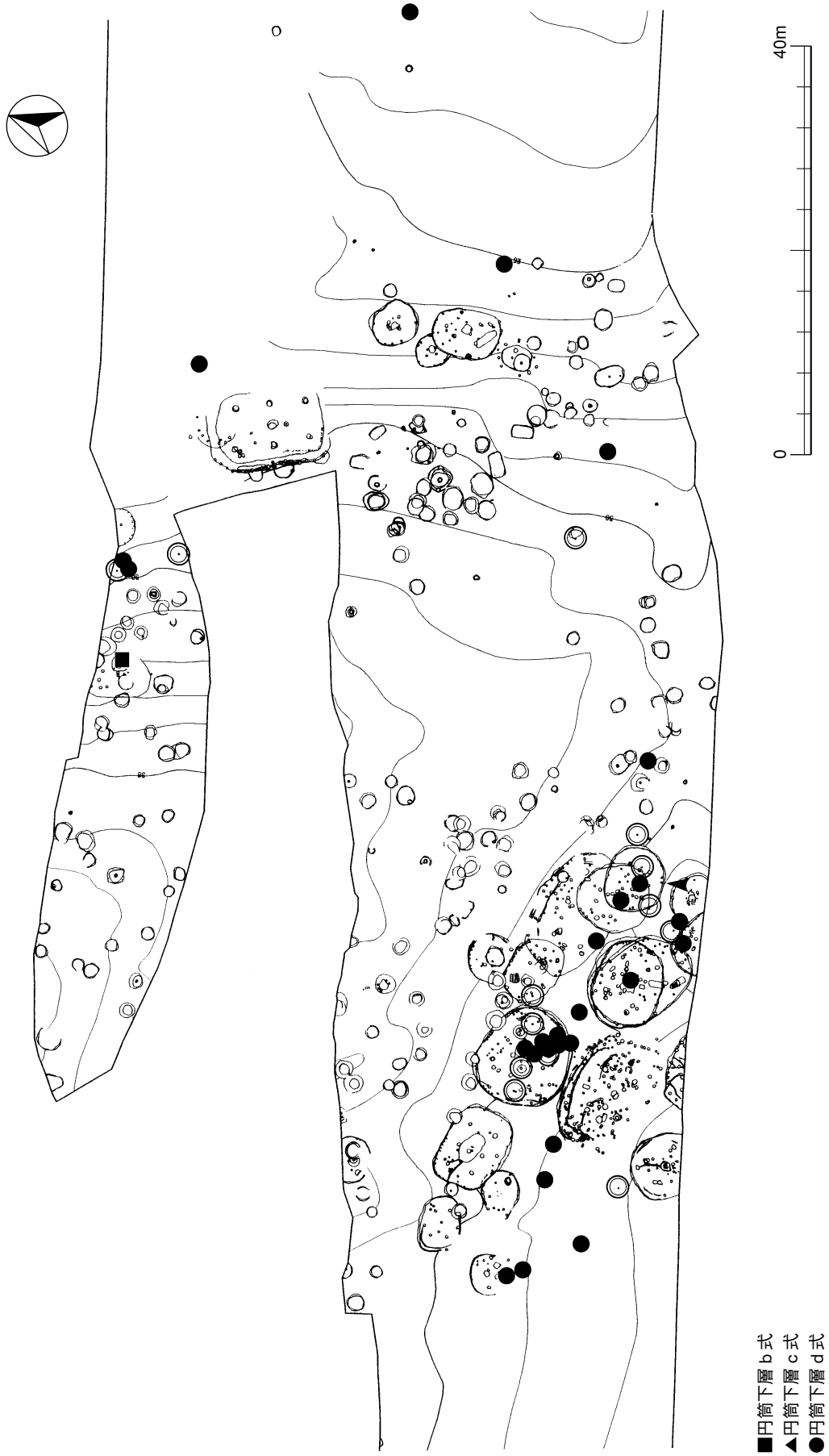


図８　稲山遺跡遺構配置図（文献７を基に作成）

土器埋設遺構43基（帰属時期の分かるもの－下層ｂ式１基・前期末葉（下層ｄ式主体）31基）などが検出されている。斜面の高位に土坑、中位に竪穴住居跡、下位に土器埋設遺構が設けられている。遺物包含層も形成され、下層ｂ式・ｄ１式期には北東側と南西側斜面に捨てられている。下層ｂ式期の遺物包含層が「特定の凹地を意識しているような印象を受ける」のに対して、下層ｄ式期には「おおむね自然地形を利用した廃棄の場と考えられる。（中略）３類土器（以下、下層ｂ式土器とする）で考えられるような特定の凹地への意識というものではなく、むしろ自然地形に対するものと同様な意識があったのではないかと思われる。」(註7)としている。

以上のように、下層ｄ１式の土器埋設遺構は、重複する竪穴住居跡の堆積土中に埋設されていることから、遺物包含層形成時に構築されたと考えられる。当遺跡では、竪穴住居跡の凹地に埋設される土器が14基と全体の１／３を占め、積極的に凹地に埋設した傾向が見られる。またこれに加えて、三内丸山遺跡同様、共通する要素を持つ土器埋設遺構が近接しており、複数の土器を使用するもの（表69・84）、蓋石のあるもの（表68・70）、土器内部から礫が出土したもの（表69・73・84）などの例がある。

また、下層ｂ式の土器埋設遺構は１基で、遺物包含層に隣接した場所に立地している。

畑内遺跡（南郷村）（図９）

新井田川の低位段丘に立地し、竪穴住居跡は前期の下層ａ～ｂ式期46軒、下層ｃ式期13軒、前～中期の下層ｄ～上層ａ式期29軒の帰属が想定されている。土坑573基（うちフラスコ状土坑384基で、帰属時期の不明なものが多い）、土器埋設遺構66基（帰属時期の分かるもの－下層ａ式３基・ｂ式６基・ｃ式４基・ｄ１式35基・ｄ２式３基）が検出されている。各時期の遺構配置は図示したとおりである。土器埋設遺構については、「土器埋設遺構の立地は遺跡東側の台地上と、西側の下層ａ～ｂ式の竪穴住居跡が構築される近辺に大きく分けられる。（中略）遺跡東側の平坦面は、下層ｃ～ｄ式期に埋葬と遺物を捨てる場であったことが窺える。（中略）西側に形成された下層ａ～ｂ式の集落に伴う遺構であると考えられる」(註8)とされている。畑内遺跡では、大面遺跡と並んで下層ａ式の土器埋設遺構が検出されている。下層ｂ式期の土器埋設遺構は住居跡周辺（ＡＵ～ＡＺ－40～45グリッド）、Ａ捨て場範囲内などで検出されている。下層ｃ式期の土器埋設遺構もＡ捨て場内で検出されている。下層ｄ１・ｄ２式期はＡ捨て場内に密集し、周辺にも埋設されるようになる。畑内遺跡では、土器のみを正立させる単純な埋設方法が多いが、いくつかの共通する要素が見られ、近接して立地している。礫の入った土器（表254・255）、正立斜位の土器（表234・235）、倒立の土器（表232・233、263・273）などがある。

7　まとめ

土器埋設遺構の分類から土器埋設遺構の特徴をまとめ、次のような点が明らかになった。

・縄文時代前期の円筒土器文化圏においては、畑内・大面遺跡など岩手・秋田両県に近い地域に初現が見られる。

・埋設される土器は完形もしくは完形に近い土器が多く、完形でない場合は、胴～底部の部位など、底部のある土器を使用する傾向がある。胴部や底部には、穿孔された痕跡が見られない(註9)。少なくとも縄文時代中期以降に穿孔されたものと思われる。

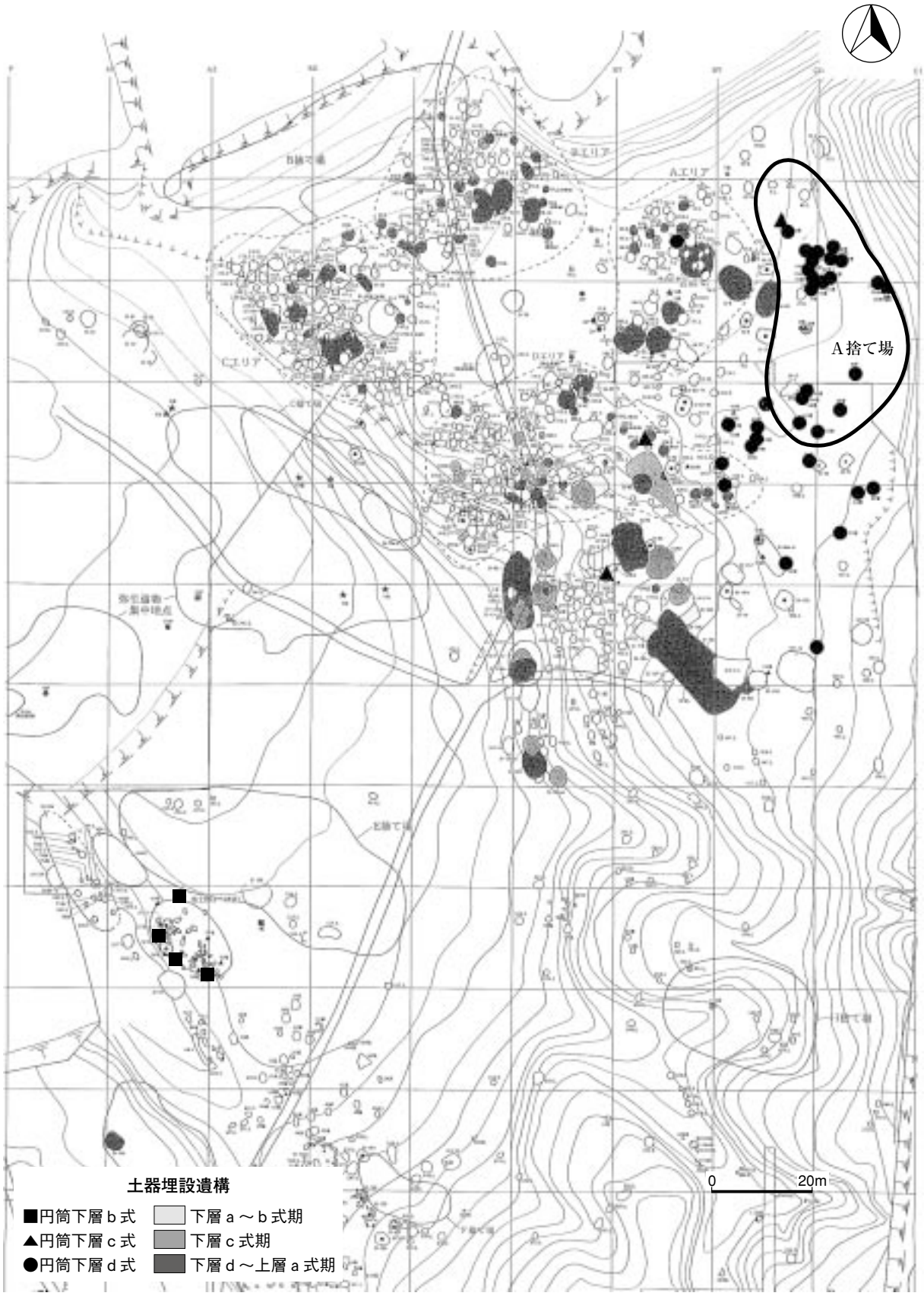


図９　畑内遺跡遺構配置図

・埋設形態は正立土器が約70％、倒立土器が約20％で、遺跡・土器型式・地域別で大きな差はない。複数の土器を使用する「入れ子」・「合口」の初現はそれぞれ下層ｃ式・ｂ式で、下層ｄ式期には検出数も増加する。
・埋設する土器以外に使用するものとして、土器の下に置く石・蓋石、土器内に埋納するものとして礫・フレイク・礫石器・剥片石器などの石器がある。
・検討した遺跡と集落跡内における土器埋設遺構の立地を分類し、
　Ⅰ　住居跡近辺に埋設されるもの。下層ａ～ｂ式期（岩渡小谷（４）・畑内）(註10)
　Ⅱ　遺物捨て場など、住居跡と離れて埋設されるもの。下層ａ～ｂ式期（三内丸山・稲山・畑内）、下層ｃ～ｄ式期（岩渡小谷（４）・三内丸山・畑内・稲山）
　Ⅲ　点在するもの　各時期にある。
・下層ａ～ｂ式期については、各遺跡で検出数も限られており確証はないが、ⅠとⅡが併存する可能性も考えられる。下層ｃ～ｄ式期になると、大部分がⅡへと移行し、遺物捨て場などが墓域として居住エリアと分離された空間を形成していたものと思われる。
・下層ｄ式期には、竪穴住居跡の堆積土中に埋設される土器が、この時期の２遺跡17例あり、凹地などが埋設する場所として選択される可能性が高い。この時期には「倒立・合口・入れ子」などの埋設形態、蓋石の有無、土器内出土遺物の類似など、共通の特徴を持った土器埋設遺構が二～数基近接して検出される例も見られる。遺跡の検討時にはふれなかったが、板留（２）遺跡でも同様の傾向がみられる。このことから、墓域エリアという大きな区域内にも幾つかの小グループに分かれて埋葬された可能性が指摘できる。
・縄文時代前期の北海道コタン温泉遺跡では、幼児骨を土器埋設遺構内及び土坑に埋葬する同時期の２例が検出され、幼児骨の埋葬例に少なくとも２つの例があったことを示している。これらの例は下層ｄ式期と考えられ、土坑を含めた土器埋設遺構の検討も必要であると思われる。

8　おわりに

今回は検討できなかったが、一つの課題として、土器埋設遺構の土器容量の違いの問題がある。検出状況の違いはあっても、明らかに容量に大きな違いのある例が見られた。この違いは、山田康弘氏の「胎児・新生児・幼児」の区分にあたるのかもしれない(註２)。岩渡小谷（４）遺跡での調査を契機に土器埋設遺構について検討したが、筆者自身も含めて、報告書内に土器埋設遺構の情報をきちんと呈示することが必要であると痛感した(註11)。今回のこのような機会を得たことに深く感謝するとともに、末筆ながら、次の方々にお世話になった。記して感謝申し上げる次第である。鈴木康二・田中珠美・永嶋　豊・茅野嘉雄（敬称略）。

（註１）文献19．22・23ｐ
（註２）文献29．10ｐ・２～３ｐ、ただし、前期に住居内の土壙墓から幼児期の単独埋葬例がみられる。
（註３）型式は下層ａ・ｂ・ｃ・ｄ１・ｄ２式を用いた。ｂ１・ｂ２式は個体数が少ないため、ｂ式に統一して使用している。ｄ２式または上層ａ式の範疇に入る土器はｄ２～上ａとした。時期のみ記載されたものは、それぞれの型式に当てはめてカッコ書きで記載した。同じ型式でも報告書によって、時期の異なるものもあるが、そのまま掲載してある。
（註４）文献２　343・345ｐ
（註５）文献６　第Ⅲ章第２節　ムラのうつりかわり

（註６）報告書記載の時期を当てはめた。第Ⅰ期・第Ⅱ期に帰属しない住居跡が約13軒である。
（註７）文献７　116ｐ
（註８）文献34　205p
（註９）集成時に報告書で確認できたものはなかった。岩渡小谷（４）・三内丸山遺跡の土器埋設遺構は実見したが痕跡はみられなかった。また、茅野嘉雄氏によると、畑内遺跡も同様であるらしい。
（註10）稲山遺跡の下層ｄ式期の住居跡は遺物包含層の下部に形成されているが、各住居跡の使用時期と遺物包含層形成期が異なるのか時期が重複するのか、詳細な検討も必要かと思われる。
（註11）文献28参照。このほか、遺物の取上げ・接合時から、他の遺物よりも慎重に取り扱い、口縁・底部・内容物の詳細な事実記載をお願いしたい。

（引用・参考文献）

1　畠山　昇・坂本真弓　2003　『岩渡小谷（３）・（４）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第352集
2　坂本真弓・工藤　司・畠山　昇　2004　『岩渡小谷（４）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第371集
3　青森県埋蔵文化財調査センター　1994　『三内丸山（２）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集
4　青森県教育庁文化課　1996　『三内丸山遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
5　青森県教育庁文化財保護課　2004　『三内丸山遺跡25―旧野球場建設予定地発掘調査報告書５　埋設土器編―』青森県埋蔵文化財調査報告書第383集
6　青森県史編纂考古部会　2002　『青森県史別編三内丸山遺跡』青森県
7　小野貴之・児玉大成　2004　『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ（分析・総括編）』青森市埋蔵文化財調査報告書第72集
8　青森市教育委員会　2004　『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』青森市埋蔵文化財調査報告書第71集
9　青森市教育委員会　2003　『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青森市埋蔵文化財調査報告書第66集
10　青森市教育委員会　2002　『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第62集
11　青森県埋蔵文化財調査センター　1997　『畑内遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第211集
12　青森県埋蔵文化財調査センター　1999　『畑内遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
13　青森県埋蔵文化財調査センター　2001　『畑内遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第308集
14　青森県埋蔵文化財調査センター　2002　『畑内遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第326集
15　青森県教育委員会　1980　『板留（２）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第59集
16　青森県教育委員会　1992　『鳴沢遺跡・鶴喰（９）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第142集
17　青森県教育委員会　1980　『大平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集
18　青森県教育委員会　1980　『大面遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第55集
19　江坂輝彌　1958　「青森県三戸郡大館村蟹沢遺跡調査報告」『石器時代』第５号
20　西野　元　1998　『瀬野遺跡』脇野沢村
21　橘　善光　1997　『八幡堂遺跡発掘調査報告書（２）』佐井村教育委員会
22　西野　元　1998　『青森県脇野沢村稲平遺跡』脇野沢村
23　石川長者森遺跡発掘調査委員会・発掘調査団　1987　『石川長者森遺跡発掘調査報告書』（学校法人）東奥義塾
24　十和田市教育委員会　1992　『中崎沢遺跡発掘調査報告書』十和田市教育委員会
25　東通村教育委員会　1985　『石持納屋遺跡発掘調査報告書』東通村教育委員会
26　青森県教育委員会　2003　「特別史跡　三内丸山遺跡　縄文シンポジウム2003　三内丸山遺跡と円筒土器文化」青森県教育委員会
27　南北海道考古学情報交換会　1996　『第17回　南北海道考古学情報交換会　円筒土器下層式図録集Ⅱ　遺構編』南北海道考古学情報交換会
28　川添和暁　2002　「三本松遺跡出土の土器埋設遺構について」『研究紀要』第３号　（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
29　山田康弘　1997　「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』第４号　日本考古学協会
30　山田康弘　2004　「三内丸山遺跡における墓域の基礎的検討」『特別史跡三内丸山遺跡年報－７－』青森県教育委員会
31　宮尾　亨・中村　大　2000　「埋葬方法の類型とその配置からみた縄文社会」『史跡三内丸山遺跡年報－３－』青森県教育委員会
32　長沢宏昌　1994　「甲府盆地周辺にみられる縄文時代中期の土壙墓と土器棺再葬墓―井戸尻Ⅲ式～曽利Ⅰ式期の場合―」『研究紀要10』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
33　茅野嘉雄　2002　「畑内遺跡のフラスコ状土坑について」『海と考古学とロマン』市川金丸先生の古稀を祝う会
34　小山浩平・佐藤智生・伊藤陽肇・福井流星　2003　『畑内遺跡Ⅸ』青森県埋蔵文化財調査報告書第345集
35　八雲町教育委員会　1992　『コタン温泉遺跡』八雲町教育委員会

縄文時代前期の土器埋設遺構

番号	遺跡名	埋設No.	形態	斜位	土器内・外	部位	時期	文献
1	三内丸山	137	正立	—	—	—	前～中期	5
2	三内丸山	144	正立	—	—	1	前～中期	5
3	三内丸山	165	合口２	—	—	5･2	前期中葉～後葉(円筒下層b)	5
4	三内丸山	167	正立	—	—	4	前期後葉(円筒下層c)	5
5	三内丸山	188	倒立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
6	三内丸山	191	倒立	—	—	4	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
7	三内丸山	194	倒立	—	—	5	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
8	三内丸山	197	正立	—	—	1	前～中期	5
9	三内丸山	198	倒立	—	軽石1点	5	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
10	三内丸山	199	合口１	—	—	2･6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
11	三内丸山	211	正正入れ子	—	—	6･6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
12	三内丸山	216	正立	—	—	—	前期	5
13	三内丸山	222	正立	—	—	—	前期	5
14	三内丸山	229	倒立	—	Ｒフレイク1点	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
15	三内丸山	230	正立	—	礫1点	2	前～中期	5
16	三内丸山	231	正立	—	Ｒフレイク1点	1	円筒下層	5
17	三内丸山	235	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
18	三内丸山	242	正立	—	剥片1点	—	前～中期	5
19	三内丸山	262	正立	—	—	6	前期中葉～後葉(円筒下層b)	5
20	三内丸山	263	正立	—	—	2	円筒下層	5
21	三内丸山	264	正立	—	—	3	円筒下層	5
22	三内丸山	265	倒立	—	—	—	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
23	三内丸山	266	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
24	三内丸山	267	倒立	—	—	1	円筒下層	5
25	三内丸山	268	倒立	—	—	5	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
26	三内丸山	269	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
27	三内丸山	273	正立	—	—	—	前～中期	5
28	三内丸山	276	正立	—	—	—	前期	5
29	三内丸山	280	正立	—	—	2	円筒下層	5
30	三内丸山	291	正立	—	—	—	前～中期	5
31	三内丸山	309	倒立	斜位	—	—	前～中期	5
32	三内丸山	331	正立	—	礫2点	6	下層d2～上a	5
33	三内丸山	339	正立	—	—	1	前～中期	5
34	三内丸山	355	正立	—	—	1	前～中期	5
35	三内丸山	455	正立	斜位	—	6	前期後葉～末葉(c～d1)	5
36	三内丸山	460	正立	—	—	1	前～中期	5
37	三内丸山	463	正立	—	—	1	前～中期	5
38	三内丸山	473	正立	—	—	1	前～中期	5
39	三内丸山	477	正立	—	礫2点	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
40	三内丸山	496	正立	—	—	1	円筒下層	5
41	三内丸山	497	合口２	—	—	?･2	円筒下層	5
42	三内丸山	498	合口１	—	—	6･6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
43	三内丸山	525	正立	—	—	—	前～中期	5
44	三内丸山	528	正立	—	—	—	前～中期	5
45	三内丸山	533	正立	—	—	1	前～中期	5
46	三内丸山	534	正立	—	—	1	前～中期	5
47	三内丸山	536	倒立	—	—	5	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
48	三内丸山	555	正立	—	—	1	円筒下層	5
49	三内丸山	561	正立	—	—	1	円筒下層	5
50	三内丸山	567	正立	—	—	—	前～中期	5
51	三内丸山	583	正立	—	—	1	前～中期	5
52	三内丸山	590	正立	—	—	1	前～中期	5
53	三内丸山	610	正立	—	—	2	円筒下層	5
54	三内丸山	611	正立	—	—	2	円筒下層	5
55	三内丸山	622	正立	—	石皿(蓋石)･敲磨器1点	6	下層d2～上a	5
56	三内丸山	625	正立	—	—	1	円筒下層	5
57	三内丸山	626	正立	—	礫1点	4	円筒下層d2	5
58	三内丸山	637	正立	—	—	1	下層d2～上a	5
59	三内丸山	643	正立	—	—	1	前～中期	5
60	三内丸山	644	正立	—	—	1	下層d2～上a	5
61	三内丸山	667	正立	—	—	1	前～中期	5
62	三内丸山	674	正立	斜位	—	2	下層d2～上a	5
63	三内丸山	691	正立	—	—	6	下層d2～上a	5
64	三内丸山	693	正立	—	—	1	前～中期	5
65	三内丸山	756	正立	—	—	1	円筒下層	5
66	三内丸山	758	倒立	—	—	—	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	5
67	三内丸山	793	正立	—	—	2	円筒下層	5
68	稲山	1	正立	—	礫(蓋石)	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
69	稲山	2	合口１	—	礫	6･6	前期末葉(円筒下層d1)	10
70	稲山	3	倒立	斜位	礫(蓋石)	5	前期末葉(円筒下層d1)	10
71	稲山	4	正立	—	礫	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
72	稲山	5	正立	—	—	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
73	稲山	6	正立	斜位	礫	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
74	稲山	8	正立	—	—	2	前期後半	10
75	稲山	10	正立	—	—	2	前期後半	10
76	稲山	11	正立	—	—	6	前期末葉	10
77	稲山	12	正立	—	—	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
78	稲山	15	正立	—	礫	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
79	稲山	16	正立	斜位	礫	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
80	稲山	18	正正入れ子	—	礫	4･6	前期末葉(円筒下層d1)	10
81	稲山	19	正立	—	—	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
82	稲山	20	正立	—	—	2	前期後半	10
83	稲山	21	正立	—	—	2	前期後半	10
84	稲山	22	合口１	—	敲磨器1点	4･6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	10
85	稲山	26	正立	—	—	6	前期末葉	9
86	稲山	27	正立	—	別個体土器	6	前期末葉(円筒下層d1)	9
87	稲山	28	倒立	—	礫(蓋石)	6	前期末葉(円筒下層d1)	9
88	稲山	30	倒立	—	敲磨器1点	6	前期末葉(円筒下層d1)	9
89	稲山	32	倒立	—	石匙・敲磨器類各1点	1	前期後半	9
90	稲山	35	正立	—	—	2	前期後半	10
91	稲山	36	正立	—	礫	6	前期末葉(円筒下層d1)	9
92	稲山	38	正立	—	角礫多量	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
93	稲山	39	正立	—	—	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
94	稲山	40	正立	—	—	2	前期後半	10
95	稲山	41	正立	—	礫	6	前期末葉(円筒下層d1)	10
96	稲山	42	正正入れ子	—	—	6･6	前期末葉(円筒下層d1)	10
97	稲山	43	正立	—	—	4	前期末葉(円筒下層d1)	10
98	稲山	44	正立	斜位	—	2	前期後半	9
99	稲山	45	倒立	—	—	4	前期末葉(円筒下層d1)	9
100	稲山	47	正立	—	—	6	前期末葉(円筒下層d1)	9
101	稲山	50	倒立	—	礫	4	前期末葉(円筒下層d1)	9
102	稲山	57	正立	—	—	6	前期末葉(円筒下層d1)	8
103	稲山	58	倒立	—	—	4	前期後半	9
104	稲山	70	正立	—	—	6	前期末葉(円筒下層d1)	8
105	稲山	71	合口１	—	—	6･6	前期末葉(円筒下層d1)	8
106	稲山	72	合口１	—	礫	2･3	前期後半	8
107	稲山	75	倒立	—	—	4	前期末葉(円筒下層d1)	8
108	稲山	76	倒立	斜位	礫(土器下)	6	前期末葉	8
109	稲山	77	倒立	—	—	6	前期中葉～後葉(円筒下層b)	8
110	稲山	78	正立	—	敲磨器1点	2	前期後半	8
111	鳴沢	1	正立	—	礫(蓋石)	6	前期末葉(円筒下層d2)	16
112	鳴沢	2	倒立	—	石皿(土器下)	6	前期末葉(円筒下層d2)	16
113	鳴沢	3	倒立	—	敲磨器２点	5	前期末葉(円筒下層d2)	16
114	鳴沢	4	正立	—	—	6	前期末葉(円筒下層d2)	16
115	鳴沢	5	倒立	斜位	—	1	前期	16
116	鳴沢	6	正立	—	—	1	前期	16
117	鳴沢	7	倒立	—	礫(土器下)、礫	4	前期末葉(円筒下層d2)	16
118	鳴沢	8	倒立	—	礫(土器下)、石鏃1	5	前期末葉(円筒下層d2)	16
119	鳴沢	9	倒立	—	礫(蓋石・下部)	2	前期	16
120	鳴沢	10	正立	—	—	1	前期	16
121	鳴沢	11	正立	—	礫(蓋石)、礫２点	5	前期末葉(円筒下層d2)	16
122	鳴沢	12	正立	—	—	1	前期末葉	16
123	鳴沢	13	倒立	—	—	4	前期末葉(円筒下層d2)	16
124	板留（２）	1	正立	—	—	6	円筒下層d1	15
125	板留（２）	2	正立	—	—	1	円筒下層d1	15
126	板留（２）	3	正立	—	礫3点	6	円筒下層d1	15
127	板留（２）	4	正立	—	礫(蓋石)	6	円筒下層d1	15
128	板留（２）	5	正立	—	—	1	円筒下層d1	15
129	板留（２）	6	正立	—	—	1	円筒下層d1	15
130	板留（２）	7	正立	—	礫1点	6	円筒下層d1	15
131	板留（２）	10	正立	—	浮石2点	6	円筒下層d1	15
132	板留（２）	12	倒立	—	—	6	円筒下層d1	15
133	板留（２）	13	正立	—	浮石	6	円筒下層d1	15
134	板留（２）	14	正立	—	—	6	円筒下層d1	15
135	板留（２）	15	倒立	—	—	4	円筒下層d1	15
136	板留（２）	16	正立	—	小石	6	円筒下層d1	15
137	板留（２）	17	倒立	—	—	6	円筒下層d1	15
138	板留（２）	18	正立	—	—	2	円筒下層d1	15
139	岩渡小谷(4)	1	正立	—	—	3	前期中葉～後葉(円筒下層b)	1
140	岩渡小谷(4)	2	正立	—	—	6	前期中葉～後葉(円筒下層b)	1
141	岩渡小谷(4)	3	正立	—	—	6	前期中葉～後葉(円筒下層b)	1
142	岩渡小谷(4)	4	正立	—	—	6	前期中葉～後葉(円筒下層b)	1
143	岩渡小谷(4)	5	正立	—	—	1	前期中葉～後葉(円筒下層b)	1
144	岩渡小谷(4)	6	正立	—	礫2点	1	前期中葉～後葉(円筒下層b)	1
145	岩渡小谷(4)	7	正立	—	—	5	前期中葉～後葉(円筒下層b)	1
146	岩渡小谷(4)	8	正立	斜位	—	5	前期中葉～後葉(円筒下層b)	1
147	岩渡小谷(4)	9	倒立	—	—	3	前期後半	1
148	岩渡小谷(4)	10	倒立	斜位	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
149	岩渡小谷(4)	11	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
150	岩渡小谷(4)	12	正立	—	—	1	前期後半	1
151	岩渡小谷(4)	13	倒立	—	—	5	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
152	岩渡小谷(4)	14	正立	斜位	—	2	前期後半	1
153	岩渡小谷(4)	15	正立	—	—	2	前期後半	1
154	岩渡小谷(4)	16	正立	—	—	2	前期後半	1

番号	遺跡名	埋設No.	形態	斜位	土器内・外	部位	時　期	文献
155	岩渡小谷(4)	17	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
156	岩渡小谷(4)	18	合口1	斜位	—	6･6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
157	岩渡小谷(4)	19	正立	—	磨石1点・礫(土器下)	1	前期後半	1
158	岩渡小谷(4)	21	正立	斜位	敲磨器･縦型石匙･スクレーパー1点	2	前期後半	1
159	岩渡小谷(4)	22	倒倒入れ子	—	—	4･5	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
160	岩渡小谷(4)	23	正立	—	—	2	前期後半	1
161	岩渡小谷(4)	24	正立	—	—	1	前期後半	1
162	岩渡小谷(4)	25	倒立	—	—	5	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
163	岩渡小谷(4)	26	倒立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
164	岩渡小谷(4)	27	合口1	—	—	1･1	前期後半	1
165	岩渡小谷(4)	29	正立	—	—	1	前期後半	1
166	岩渡小谷(4)	30	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
167	岩渡小谷(4)	31	正立	—	—	2	前期後半	1
168	岩渡小谷(4)	32	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
169	岩渡小谷(4)	35	正立	—	—	2	前期後半	1
170	岩渡小谷(4)	36	正立	—	—	4	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
171	岩渡小谷(4)	37	正立	斜位	—	2	前期後半	1
172	岩渡小谷(4)	38	倒立	斜位	—	4	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
173	岩渡小谷(4)	39	倒立	—	—	4	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
174	岩渡小谷(4)	41	合口1	—	—	6･6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
175	岩渡小谷(4)	43	倒立	斜位	—	4	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
176	岩渡小谷(4)	44	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
177	岩渡小谷(4)	45	倒立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
178	岩渡小谷(4)	46	正立	斜位	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
179	岩渡小谷(4)	48	正立	—	—	1	前期後半	1
180	岩渡小谷(4)	51	正立	—	—	6	前期後葉(円筒下層c)	1
181	岩渡小谷(4)	52	正立	—	—	1	前期後半	1
182	岩渡小谷(4)	53	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
183	岩渡小谷(4)	54	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
184	岩渡小谷(4)	55	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
185	岩渡小谷(4)	56	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
186	岩渡小谷(4)	57	倒立	斜位	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
187	岩渡小谷(4)	58	合口1	—	—	1･6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
188	岩渡小谷(4)	59	倒立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
189	岩渡小谷(4)	60	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
190	岩渡小谷(4)	61	正立	—	—	2	前期後半	1
191	岩渡小谷(4)	62	合口1	—	石匙1点・礫(蓋石)	6･6	前期後葉	1
192	岩渡小谷(4)	63	倒立	—	—	4	前期後葉	1
193	岩渡小谷(4)	64	合口1	—	礫(蓋石)	1･2	前期後半	1
194	岩渡小谷(4)	65	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
195	岩渡小谷(4)	66	正立	—	—	2	前期後半	1
196	岩渡小谷(4)	67	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
197	岩渡小谷(4)	68	正立	斜位	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
198	岩渡小谷(4)	69	合口1	—	—	1･6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
199	岩渡小谷(4)	70	正立	—	—	2	前期後半	1
200	岩渡小谷(4)	71	倒立	—	—	4	前期後葉～末葉(c～d1)	1
201	岩渡小谷(4)	72	正立	斜位	—	2	前期後葉～末葉(c～d1)	1
202	岩渡小谷(4)	73	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(c～d1)	1
203	岩渡小谷(4)	74	正立	—	—	2	前期後半	1
204	岩渡小谷(4)	77	正立	—	—	5	前期後半	1
205	岩渡小谷(4)	78	正立	—	礫1点	1	前期後半	1
206	岩渡小谷(4)	79	倒立	—	—	4	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
207	岩渡小谷(4)	80	合口1	斜位	礫1点	1･2	前期後半	1
208	岩渡小谷(4)	81	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
209	岩渡小谷(4)	82	正立	—	—	6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
210	岩渡小谷(4)	84	合口1	—	小礫1点・礫(蓋石)	2･6	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	1
211	岩渡小谷(4)	85	正立	斜位	石皿片	2	前期後半	1
212	岩渡小谷(4)	86	正立	—	—	1	前期後半	1
213	岩渡小谷(4)	87	正立	—	—	6	前期後葉(円筒下層c)	1
214	大平	1	正立	—	—	6	円筒下層b	17
215	大平	2	正立	—	—	6	円筒下層b	17
216	大平	3	正立	—	—	2	前期	17
217	大面	1	正立	—	—	1	前期中葉	18
218	大面	2	正立	—	礫(蓋石)	6	前期中葉	18
219	大面	4	正立	—	—	1	前期中葉	18
220	大面	6	正立	斜位	—	2	前期中葉	18
221	大面	7	横位	—	—	4	前期中葉	18
222	石川長者森	1	正立	—	—	2	円筒下層	23
223	畑内	1	正立	—	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
224	畑内	2	正立	—	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
225	畑内	3	正立	—	—	2	円筒下層	11
226	畑内	4	倒立	—	—	2	円筒下層	11
227	畑内	5	倒立	—	—	6	前期後半(円筒下層b)	11
228	畑内	6	正立	不明	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
229	畑内	7	不明	不明	—	2	円筒下層	11
230	畑内	8	正立	不明	—	4	前期後半(円筒下層c)	11
231	畑内	9	正立	不明	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
232	畑内	10	倒立	斜位	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
233	畑内	11	倒立	不明	—	4	前期終末(円筒下層d1)	11
234	畑内	12	正立	斜位	—	5	前期終末(円筒下層d1)	11
235	畑内	13	正立	斜位	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
236	畑内	14	正立	不明	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
237	畑内	15	正立	不明	—	—	行方不明	11
238	畑内	16	正立	不明	—	—	行方不明	11
239	畑内	17	正立	不明	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
240	畑内	18	正立	不明	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
241	畑内	19	正立	斜位	—	5	前期後半(円筒下層c)	11
242	畑内	20	正立	不明	—	6	円筒下層	11
243	畑内	21	正立	不明	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
244	畑内	22	正立	不明	—	—	行方不明	11
245	畑内	23	正立	不明	—	6	前期終末(円筒下層d1)	11
246	畑内	24	正立	不明	—	3	前期終末(円筒下層d1)	11
247	畑内	25	倒立	不明	—	6	前期後半(円筒下層c)	11
248	畑内	26	倒立	不明	—	6	前期後半(円筒下層b)	11
249	畑内	27	正立	—	—	6	円筒下層b	11
250	畑内	28	正立	—	—	6	円筒下層b	11
251	畑内	29	正立	—	—	6	円筒下層b	11
252	畑内	30	正立	—	—	2	円筒下層	12
253	畑内	31	正立	—	—	6	円筒下層d1	12
254	畑内	32	正立	—	礫1点	6	円筒下層d1	12
255	畑内	33	正立	—	礫1点	6	円筒下層d1	12
256	畑内	34	正立	—	—	6	円筒下層d1	12
257	畑内	35	倒立	—	—	6	円筒下層d1	12
258	畑内	36	正立	—	—	6	円筒下層d1	12
259	畑内	37	正立	斜位	—	6	円筒下層d2	12
260	畑内	39	正立	—	—	6	円筒下層a	12
261	畑内	41	正立	—	—	1	円筒下層	12
262	畑内	43	正立	—	—	1	円筒下層	12
263	畑内	44	倒立	—	—	4	円筒下層d1	12
264	畑内	45	正立	—	—	6	円筒下層d2	12
265	畑内	46	正立	—	礫2点・礫(蓋石)	6	前期末葉(円筒下層d1)	13
266	畑内	47	正立	—	—	2	円筒下層d1	13
267	畑内	48	正立	—	—	6	円筒下層d1	12
268	畑内	49	正立	—	礫2(蓋石)	6	円筒下層d1	13
269	畑内	50	正立	—	—	1	円筒下層	12
270	畑内	51	正立	—	—	6	円筒下層d2	12
271	畑内	52	正立	—	—	6	円筒下層d1	12
272	畑内	53	正立	—	—	6	円筒下層d1	12
273	畑内	54	倒立	—	—	4	円筒下層d1	12
274	畑内	55	倒立	—	—	3	円筒下層	12
275	畑内	56	正立	—	—	1	円筒下層	12
276	畑内	57	正立	—	—	6	円筒下層d1	12
277	畑内	59	倒立	—	—	4	円筒下層a	12
278	畑内	61	正立	—	—	6	円筒下層d1	12
279	畑内	62	正立	—	礫1点	6	円筒下層d1	12
280	畑内	70	正立	斜位	—	6	円筒下層d1	13
281	畑内	71	倒立	—	—	6	前期後葉(円筒下層d1)	13
282	畑内	73	正立	—	—	2	円筒下層d2	13
283	畑内	74	正立	—	—	2	円筒下層	13
284	畑内	75	倒立	—	—	4	前期後葉(円筒下層c)	13
285	畑内	76	正立	—	—	5	前期後葉(円筒下層c)	13
286	畑内	77	横位	—	—	6	前期末葉(円筒下層d1)	13
287	畑内	86	正立	—	—	—	円筒下層a	14
288	畑内	90	正立	—	削器	6	前期中葉～後葉(円筒下層b)	14
289	中崎沢	写真No.5	正立	—	—	6	円筒下層d2	24
290	中崎沢	写真No.6	正立	—	—	6	円筒下層d2	24
291	蟹沢		正立	不明	礫(蓋石)	—	前期後葉～末葉(円筒下層d1)	19
292	石持納屋	埋設土器遺構	正立	—	礫	1	円筒下層d1	25
293	瀬野	2	正立	—	—	5	円筒下層d2	20
294	八幡堂	1	倒立	—	礫4点・骨片	2	円筒下層c	21
295	八幡堂	2	倒立	—	骨片	—	円筒下層c	21
296	八幡堂	3	倒立	—	—	5	円筒下層c(d1？)	21
297	八幡堂	4･5	倒倒入れ子	—	骨粉	6･6	円筒下層c(d1？)	21
298	稲平	3	正立	—	—	—	下層d2～上a	22
299	稲平	4	正立	斜位	—	6	円筒下層d2	22
300	稲平	5	正立	—	—	6	円筒下層d2	22
301	稲平	7	正立	—	—	6	円筒下層d2	22
302	稲平	9	正立	—	敲磨器1点	6	円筒下層d2	22
303	稲平	11	正立	—	礫2点	2	円筒下層d1	22
304	稲平	12	正立	—	礫1点	6	円筒下層d2	22
305	稲平	13	正立	—	礫1点	2	円筒下層d2	22
306	稲平	14	倒立	—	礫1点	6	円筒下層d2	22
307	稲平	15	正立	—	礫1点	2	円筒下層d2	22

餅ノ沢遺跡の土器について

野　村　信　生

1　はじめに

餅ノ沢遺跡は、鰺ヶ沢町の北東、岩木山東麓の放射河川である鳴沢川と長前川に挟まれた標高約50mの台地上に位置する。

遺跡は縄文時代前期・中期・後期・晩期、弥生時代中期末葉～後期前葉の複合遺跡であり、縄文時代前期後葉・中期末葉が主体である。遺跡からは膨大な遺物とともに、竪穴住居跡７軒・石囲炉25基・配石遺構10基・石棺墓４基・埋設土器５基・土坑39基・遺物包含層１ヶ所・捨て場２ヶ所が検出されている(注１)。遺物の大半は第１号遺物包含層、第１・２号捨て場から出土しており、第１号遺物包含層・第１号捨て場は中期末葉の大木10式に平行する土器が主体となり、第２号捨て場は前期後葉の円筒下層ｄ式土器が主体となる。また第１号遺物包含層・第１号捨て場からは多数の土偶・ミニチュア土器・土製品等が出土しており、祭祀的性格を彷彿とさせる。

これらの土器については、当該遺跡の調査報告書(県埋文 2000)において第Ⅰ群～第Ⅻ群に分類しており、第Ⅵ群の円筒下層ｄ式及び第Ⅹ群の大木10式併行の土器は、細分の可能性があるが一型式の範疇にとどめて報告した。とくに第Ⅹ群は中期末葉～後期初頭と広範囲に設定したが、これは膨大な出土資料に対しての時間的制約と自身の能力不足によるものである。報告書における認識不足による記載、及び誤記等の訂正を含め、本稿ではその「まとめ」として掲載することにする。

2　縄文時代中期末葉～後期初頭の土器編年― 略史 ―

本遺跡は中期末葉を主体とすることから、該期の土器編年について若干ふれることにし、本稿における中期末葉～後期初頭の認識について述べる。

大木10式土器については、丹羽茂が４段階への変遷を示しており(丹羽 1981)、本間宏はその分類の不明瞭さを指摘しつつ、丹羽の細分を古・新段階として分類した(本間 1985・1987)。成田滋彦は地縄文に沈線文を施す土器群を大木10式併行土器として捉えた(成田 1984)。本県における該期の土器には、地縄文に沈線文を施す一群と地縄文に沈線間を無文とした文様で構成される一群が存在し、その二系統を軸とした変遷・地域性が論じられている。鈴木克彦も大曲１式をａ～ｃ式(５～６段階)に細分し、地縄文に沈線文を施す一群をＡ種とし、磨消縄文を施す一群をＢ種としている。Ａ・Ｂ種が共存する地域は津軽・下北・上北地域が主体で、三八地域にはＢ種しかみられないことを指摘し、Ａ・Ｂ種が共存してみられる地域を大曲１式の文化圏としている(鈴木 2000)。

本稿における中期末葉～後期初頭の土器編年は、中期末葉を東北中南部の大木10式に併行する段階とし、初頭においては本間による上村式から韮窪式への変遷を軸とし(本間 1985・1987・1988)、成田の牛ヶ沢(３)式(成田 1989)を上村式の併行段階とした。前葉となる十腰内Ⅰ式の直前段階としては、成田の方形区画文系統とされる沖附(２)式から三角形区画文系統とされる弥栄平(２)式への変遷(成田 1989)をここでは同一段階として捉えた。

3　出土土器

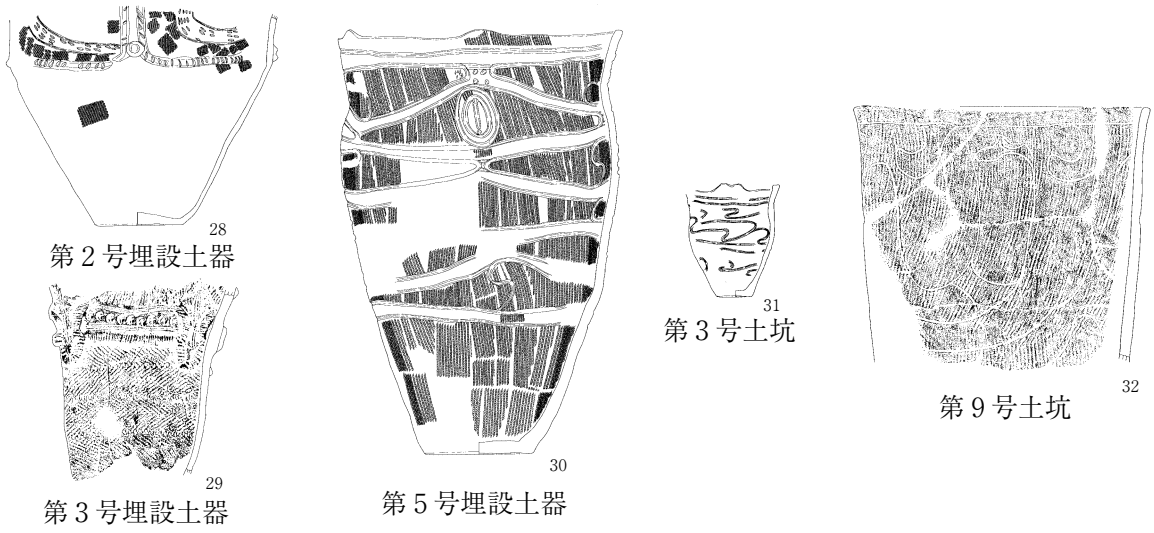
本遺跡からは多数の土器が出土しているが、良好な共伴事例は少なく、重複による層位的出土も認められなかった。また残存状態は悪く、詳細な文様構成を把握できる土器は少なかったといえる。以下に遺構内から出土した土器について述べ、さらに第１号遺物包含層、第１・２号捨て場についても主体となる時期を中心に述べることにする。

（１）遺構内出土土器（図１～２）

第１号竪穴住居跡（図１）埋設土器として、体部上半が欠損する深鉢が出土した（１）。外面に羽状縄文が施される前期後葉～中期前葉の土器であり、円筒上層ａ式的要素が強いと思われる。また覆土から円筒上層ｄ式（２）、14層（覆土下位）と覆土からは、中期後葉の榎林式土器の出土がみられる（３～６）。**第２号竪穴住居跡**（図１）２基の土器片敷き石囲炉（ＳＦ12・13）が確認された。ＳＦ12からは口縁部は欠損するが、頸部にかけて内反する深鉢が出土した（10）。文様はＲＬの地文に曲線的な沈線文を施し、沈線間は磨消しにより無文となる。また、沈線の曲部には鰭状の貼付けが施される。ＳＦ13からは体部中央で内反し、口縁部が外傾する深鉢が出土した（11）。文様はＬＲを地文とし、口縁部は無文となる。また床面からは、波頂部に円孔を有する口縁部片（12）、ＬＲを地文とし、曲線的な沈線文を施す胴部片が出土している（13）。２基の炉は残存状態が良いことから、住居の建て替えに伴い最終的には併存したと思われ、10・11は共伴性がたかい土器といえよう。これらは中期末葉の大木10式に併行する土器である。**第６号竪穴住居跡**（図１）床面から同一個体と思われる土器片が出土した（14～17）。これらは壺の頸部・胴部片で、頸部には横位沈線と縦横に鋸歯状沈線が施文され、胴部にはＬＲがみられる。これらの土器は、念仏間式あるいは天王山式に一致する特徴がみられることから、弥生時代中期末葉～後期前葉の範疇と考えられる。**第７号竪穴住居跡**（図１）土器片敷き石囲炉（ＳＦ３）から２個体の土器が出土した（18・19）。これらは胴部から頸部にかけて内反し、口縁部は外反する深鉢である。ＬＲの地文に曲線的な沈線文を施す。18は縄文と無文のコントラストにより文様を構成する。波状沈線に区画された体部下半には縄文が施され、体部上半は縄文を施したＳ字状沈線文と無文帯から構成される。19は波状沈線に区画された体部上半に、Ｓ字状沈線文が施される。これらは同一の炉から出土しており、共伴性がたかい土器といえよう。20・21は床面付近から出土し、20は地文にＲＬが施され、波状沈線で区画された体部上半にＳ字状沈線文が施される。21はＲＬのみが施される土器である。これらは大木10式に併行する土器である。**第１号埋設土器**（図１）壺と蓋として転用した深鉢の破片が出土した。壺（22）は胴部中央に最大径をもち、口縁部にかけて内反する器形である。地文にＲＬを施し、波状沈線で区画された胴部上半に、逆Ｕ字状沈線文を施す。逆Ｕ字状沈線文内と波状沈線付近には縄文が残存するが、それ以外は磨消しにより無文となる。深鉢（23～25）はＲＬの地文に曲線的な沈線を施文する。これらは大木10式に併行する土器である。**第４号埋設土器**（図１）２個体の深鉢が重なった状態で出土した（26・27）。26は口縁部が内反し、外面にはＲＬを施す。底面には網代痕がみられる。27は頸部で内反し、口縁部は外傾する。外面にはＬＲを施す。本遺跡からは、粗製土器の時期を確定するのに有効な共伴関係は認められず、詳細は不明であるが、中期末葉～後期前葉の範疇であることは間違いないであろう。**第２号埋設土器**（図２）口縁部が欠損する深鉢である（28）。ＲＬを地文とし、体部上半は刻みを施した隆帯により方形に区画される。区画内には沈線間に

図１　遺構内出土土器１

S＝1/9



28～32：S＝1/9

図２　遺構内出土土器２

刻みを充填した文様が施される。また隆帯の屈曲部にはボタン状の貼付けが施される。これは後期初頭の初期的段階とされる上村式・牛ヶ沢（３）式に相当する土器と思われる。**第３号埋設土器**（図２）中期前葉の深鉢である(29)。胴部には羽状縄文が施され、口頸部文様帯は原体を押圧した１条の隆帯で区画されており、直線的な縄文原体押圧と爪形の撚糸圧痕を施す。爪形の撚糸圧痕は江坂輝彌による円筒上層ｂ式のメルクマールであるが(江坂　1956)、他の特徴から上層ａ式的要素が強いと思われる。**第５号埋設土器**（図２）後期初頭の大型深鉢である(30)。Ｌ単軸絡条体第１類を地文とし、３帯の三角形区画文が横位に展開する。これは青森市蛍沢遺跡(蛍沢遺跡調査団　1990)から出土した三角形区画文系統とされる第１・２群の弥栄平（２）式に相当する土器である。**第３号土坑**（図２）頸部で内反し、口縁部が外反する小型鉢が出土した(31)。口縁部には頂部に押圧を施した山形突起がみられる。文様構成は２帯からなり、２条の横位沈線により区画された体部上半と下半には、波状沈線が施文される。文様構成から後期初頭～前葉の範疇と考えられ、三角形区画文系統とされる弥栄平（２）式に相当すると思われる。**第９号土坑**（図２）口縁部がやや外反する深鉢が出土した(32)。ＲＬを地文とし、２段のＪ字状沈線文を施す。これは中期末葉の大木10式に併行する土器である。

（２）第１号遺物包含層出土土器（図３）

縄文時代中期前葉～弥生時代後期前葉の土器が出土している。出土総数に比して、復元個体は少なく破片が大半をしめる。包含層の下位からは多数の遺構が検出され、本来的には土器との関連性も考えられるが、残念ながら確認することができなかった(注２)。これらの主体は中期末葉の大木10式に併行する土器群であり、ここでは大木10式土器を主体にし、その前後型式についても述べる。

中期後葉

最花・中の平３式に相当する土器群である（１～10)。出土総数は少なく、破片資料のみの出土である。鉢(深鉢)・壺がみられる。鉢(深鉢)は口縁部が外反・直上するものがみられる（３～10)。壺は最大径が胴部中央付近にあり、頸部で内反し口縁部はやや外反気味に直上する（１・２)。文様は口頸部に区画帯となる刺突・横位沈線、胴部に展開する沈線による懸垂文・刺突がみられ、区画された口頸

部は無文が主体となる。

中期末葉

大木10式に併行する土器群である（11～24）。出土土器の大半は破片であり、器形全体を把握できる個体は少ない状況といえる。深鉢が主体となり、口縁部は平口縁と波状口縁がみられ、外反・直上するものや、頸部で内反し口縁部が外反するものがみられる。これらを文様的に大別すると、地縄文に沈線文を施すもの（Ａ群）と沈線間を無文として文様を構成するもの（Ｂ群）が存在する。これらの文様構成について、Ａ・Ｂ各群ごとにみることにする。

Ａ群

・口縁部の横位沈線と胴部中央付近の波状沈線による区画帯に、横位沈線につながるＪ字状沈線文を施す（11）。

・12は破片であるが、体部上半に横位沈線とＳ字状と思われる沈線文が施される。18は口縁部に横位沈線を施文し、波状部下に刺突を施した隆帯を貼付ける。また胴部は曲線的沈線（詳細不明）と刺突で構成される。

Ｂ群

・口縁部に波状沈線が施文され、体部上半には２段で構成されるＵ字状文を施す（14）。15も同様に数段からなるＵ字状文を施す。

・体部上半に幅広の無文帯が横位に展開し、Ｓ字状文を構成する（22）。13は破片であるが、体部上半に横位沈線とＳ字状文を施す。

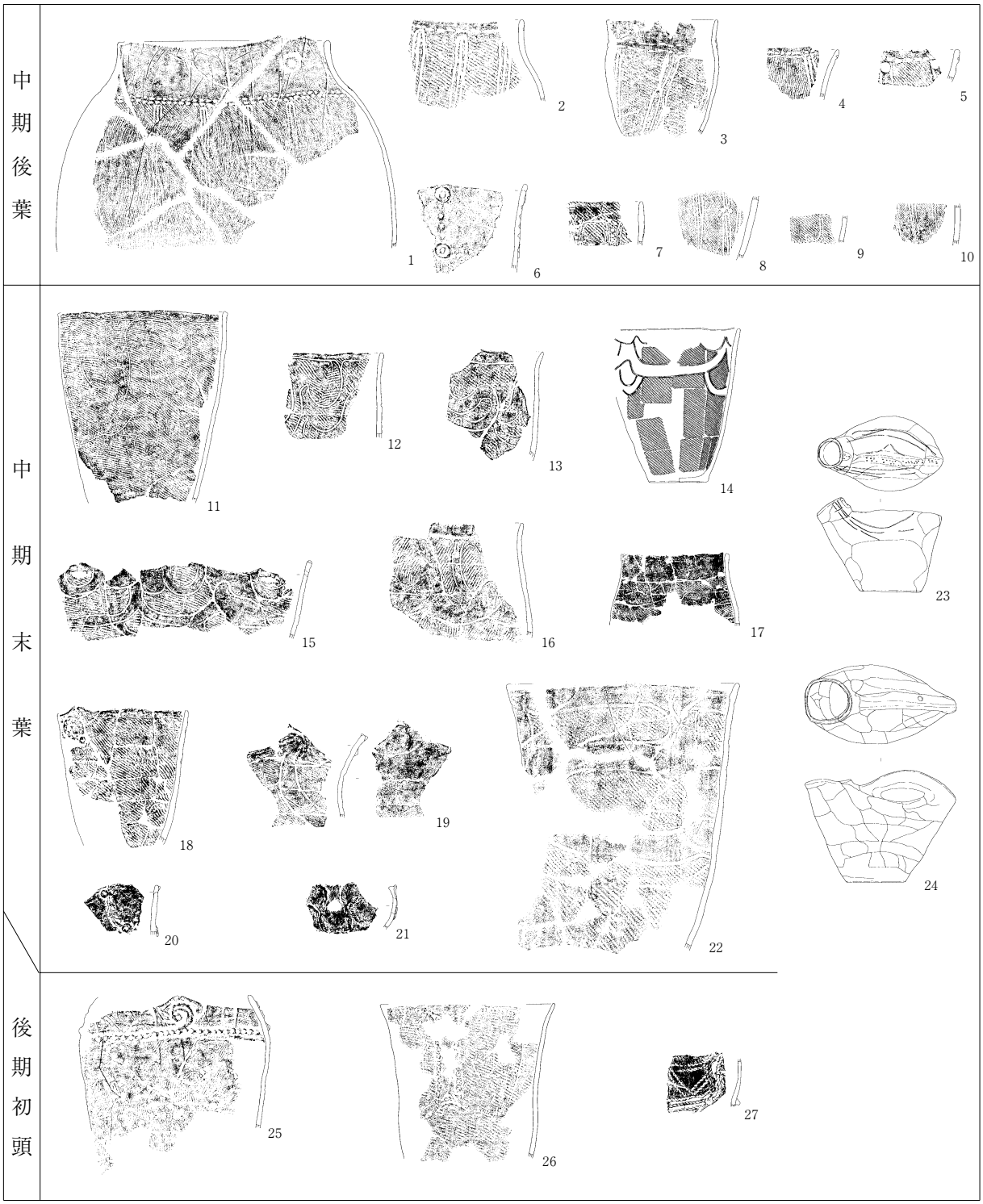
・以下は破片であるが、16は体部上半に楕円状文を施し、19は波状口縁の内外面に隆帯を貼付け、外面隆帯に刺突を施す。

上記の文様構成などがみられるが、土器は残存状態が悪く大半が破片であるため、文様構成の詳細は不明瞭である。また20・21は口縁部片であるが、刺突を施した隆帯が貼付けられ、口頸部文様帯に広がりがみられる。これは19を含めて次段階的要因であり、後出的と考えられる。

この他に、２個体の注口土器が出土している（23・24）。23は貼付け・沈線・刺突により文様が構成され、注口部には人面が描かれる。文様構成からは中期末葉～後期初頭の範疇といえるであろう。24は無文で構成され、頂部には把手が付けられる。器形は23とほぼ同様であり、また目視の限りでは胎土も類似することから、23と同一段階の範疇としてさしつかえないと思われる。これらに類似する土器として、小型ではあるが青森市三内遺跡（県教委　1978）のＪ－14号竪穴住居跡の床上５cmの地点から出土した双口土器がみられる。また蛍沢遺跡の遺構外からも類似する小型土器が出土しているが、詳細は不明である。23には赤色顔料が付着し、24は内部に赤色顔料が納められた状態で出土しており、特殊性がうかがわれる。また、石棺墓や他の遺物にも赤色顔料が付着しており、これらの土器との相関性が推測される。これらの注口土器は第１号遺物包含層の様相から、中期末葉の可能性がたかいと思われる。ただし、単体での出土であったため、その編年的位置付けに明瞭さを欠くといえるかも知れない。しかし、中期末葉～後期初頭であることは間違いないであろう。

後期初頭

後期初頭の初期的段階とされる上村式・牛ヶ沢（３）式相当の土器群である（25～27）。出土総数は少なく、器形を把握することができるのは２点のみで、口縁部が外反・内反するものがみられる。文様構成は、押圧や刺突を施した隆帯による区画を基本とする。25は押圧を施した隆帯により口頸部を区画し、口縁の波状部に区画隆帯につながる円形状の隆帯を貼付ける。胴部にはＵ字状沈線文が施され、



1：S＝1/12
2～27：S＝1/9

図３　第１号遺物包含層出土土器

沈線間にＲＬを充填する。26は地文としてＬＲを施文後、体部上半を刺突を施した隆帯により方形に区画する。25は中期末葉的な沈線文であるが、隆帯は太く押圧が前段階に比べて大きいことから、上村式・牛ヶ沢（３）式段階に相当すると思われる。また隆帯の位置は25が口頸部であり、26は体部上半に拡大されることから、26が後出的といえるかも知れない。27は胴部片で、隆帯とＬの原体押圧により文様が構成される。

（３）第１号捨て場出土土器（図４）

第１号遺物包含層の北西に続く緩斜面と平場に形成されている。捨て場の下位からは大型住居などが検出されており、これらの窪地を利用して捨て場が形成されている。捨て場からは、縄文時代中期前葉～晩期前葉の土器が出土し、中期末葉の大木10式に併行する土器群が主体となる(注３)。ここでも大木10式土器を主体にし、その前後型式について述べる。

中期後葉

榎林～最花・中の平３式に相当する土器群である。出土総数は少なく、破片のため詳細は不明である。

榎林式には深鉢の口縁部片の出土がみられる（１～４）。口縁部は波状で外反する。文様構成はＲＬＲやＲＬを地文とし、口唇部に沿って沈線が施文されるものが多く、波頂部で一端が渦巻状になる。また口縁部下には、３条を単位とする横位沈線が施文される。

最花・中の平３式には鉢（深鉢）・壺がみられる。鉢（５～９）は平口縁で外反・内反・外傾するものがある。文様は単節や複節を地文とし、頸部に区画帯となる刺突・沈線、胴部に垂下する沈線文によって構成される。口縁部は無文が主体となるが、地縄文が残るものもみられる。壺（10）は頸部で内反し口縁部は直上あるいは外反する。頸部には刺突による区画帯が形成され、残存する口頸部は無文となる。

中期末葉

大木10式土器に併行する土器群である（11～30）。深鉢・鉢・壺がみられ、深鉢が主体となる。深鉢・鉢には平口縁と波状口縁があり、外反・内反・直上・外傾するものがみられる。壺の器形を把握できるものは１点のみで、最大径は胴部中央付近にあり、胴部中央から頸部にかけて内反し、口縁部は外反する。文様を大別すると、地縄文に沈線文を施すもの（Ａ群）と沈線間を無文とし文様を構成するもの（Ｂ群）がみられるが、Ａ群が大半をしめる。これらの文様は、地縄文・沈線・磨消し・刺突・鰭状貼付け・隆帯の組合わせによって構成されており、復元個体を中心に文様構成をみることにする。

Ａ群

・口縁部の横位沈線と胴部中央付近の波状沈線により区画された体部上半に、Ｊ字状沈線文を施す（12・13）。

・胴部中央付近に波状沈線を施文し、体部上半にＪ字状文と複合する逆Ｕ字状沈線文を施文し、文様間に刺突を施す（16）。

・胴部中央付近に波状沈線を施文し、体部上半にＳ字状沈線文を施す（11）。

・口縁部の横位沈線と胴部上半の直線的な波状沈線によって区画された体部上半に、Ｕ字状沈線文を施す（20）。

・下半部は欠損するが、波状口縁下に刺突を充填したＵ字状沈線を施文し、波頂部の軸線に突起を貼付ける（22）。

Ｂ群

・胴部上半に沈線間を無文としたＵ字状文が施され、胴部中央付近には沈線により連結するＪ字状沈線文が施される。波頂

部と沈線文の末端に鰭状貼付けが施され、口縁部には鰭状貼付けにつながる刺突に区画された無文帯が形成される(26)。

・下半部は欠損するが、口縁部から垂下する方形区画文(U字状文？)を施す(24)。

・胴部上半に逆U字状沈線文を施し、頸部に交差する横位沈線を施文する。また胴部中央付近には、波状ともみられる沈線が施文されるが、摩耗のため詳細は不明である(17)。

基本的には以上の文様により構成されるが、土器の遺存状態が悪く、文様構成が不明瞭なものが多数をしめ、詳細を不明とせざるを得ない。また破片資料であるが、無文帯とした口頸部に隆帯を貼付けた一群がみられる(28～30)。これは次段階的要素であり、後出的と考えられる。

27は口縁部片であるが、波状部に隆帯と刺突により人面を形成する。

後期初頭

出土総数は少なく、破片資料が大半である。上村式・牛ヶ沢(３)式、あるいは韮窪式などに相当する土器群である(31～35)。31は口縁部片でＲＬを地文とし、断面三角形の細い沈線を施文する。32は胴部片でＬを地文とし、31と同様な沈線を施文する。33は口頸部片でＬの原体押圧により文様を構成する。31～33は沈線と縄文原体の押圧であるが、文様パターンは類似しており同一段階として捉えた。34は底部片であるが、ＲＬを地文とし縦走する隆帯を貼付ける。地文は磨消され部分的に残存するのみであり、底面には網代痕がみられる。35は区画隆帯が施された頸部下に、横位に展開する８段の爪形押圧文が施される。波状部下の隆帯には突起状の貼付けが施される。このような土器は従来から、新潟県地方の後期初頭に位置する三十稲場式土器との関連性が指摘され、八戸市丹後谷地遺跡(八戸市教委　1986)の第８号土坑・同沢堀込遺跡(県教委　1992)のＢ区・同韮窪遺跡(県埋文　1984)の遺構外などから類例が確認されており、丹後谷地遺跡においては後期初頭の土器が共伴する。

(４)第２号捨て場出土土器(図５)

第１号捨て場とはエリア・様相が異なり、前期後葉の円筒下層ｄ式を主体とし、中期前葉の円筒上層ｂ式までの土器が出土している(注４)。なお、上層ｂ式は破片のみの出土であったため、ここでは下層ｄ式→上層ａ式土器についてふれることにする。

この捨て場から出土した土器は、大半が円筒下層ｄ式である。１はｄ１式に相当し、胴部径が他の土器に比べて細く、体部下半は膨らみをおび、胴部上半から頸部にかけて内傾気味となる。口縁部は外反し、平口縁となる。口頸部文様帯は2.4cm程の幅で縄文原体が横位に平行して押圧され、胴部文様は単軸絡条体による縦走縄文と羽状縄文により簾状となる。これら以外の土器については、ｄ２式またはｄ２式的要素が強い土器である。器種は深鉢を主体とし鉢・浅鉢・台付鉢がみられ、器形的に多様化する時期といえる。深鉢の器形は、平口縁が大半で底部から口縁部にかけて緩やかに外傾するものや、頸部で内反し口縁部が外反するものが主体となり、胴部が丸みをおびるものもみられる。口頸部文様帯の幅は３～５cm前後となり、縄文原体を横位・斜位に平行して押圧するものが主体となる。また幅が広いものには、波状口縁や隆帯を貼付けるものもみられ、次段階的要素が色濃く反映される。胴部文様は多軸絡条体が多くみられ、単軸絡条体(縦走・木目状)・羽状縄文・単節縄文などが施される。

円筒上層ａ式土器は前段階に比べて少なくなるが、エリアを異にして調査区外におよぶ可能性もある。器形はやや丸みをおびた胴部から頸部にかけて内反し、口縁部は外反する。口縁部は平口縁と波

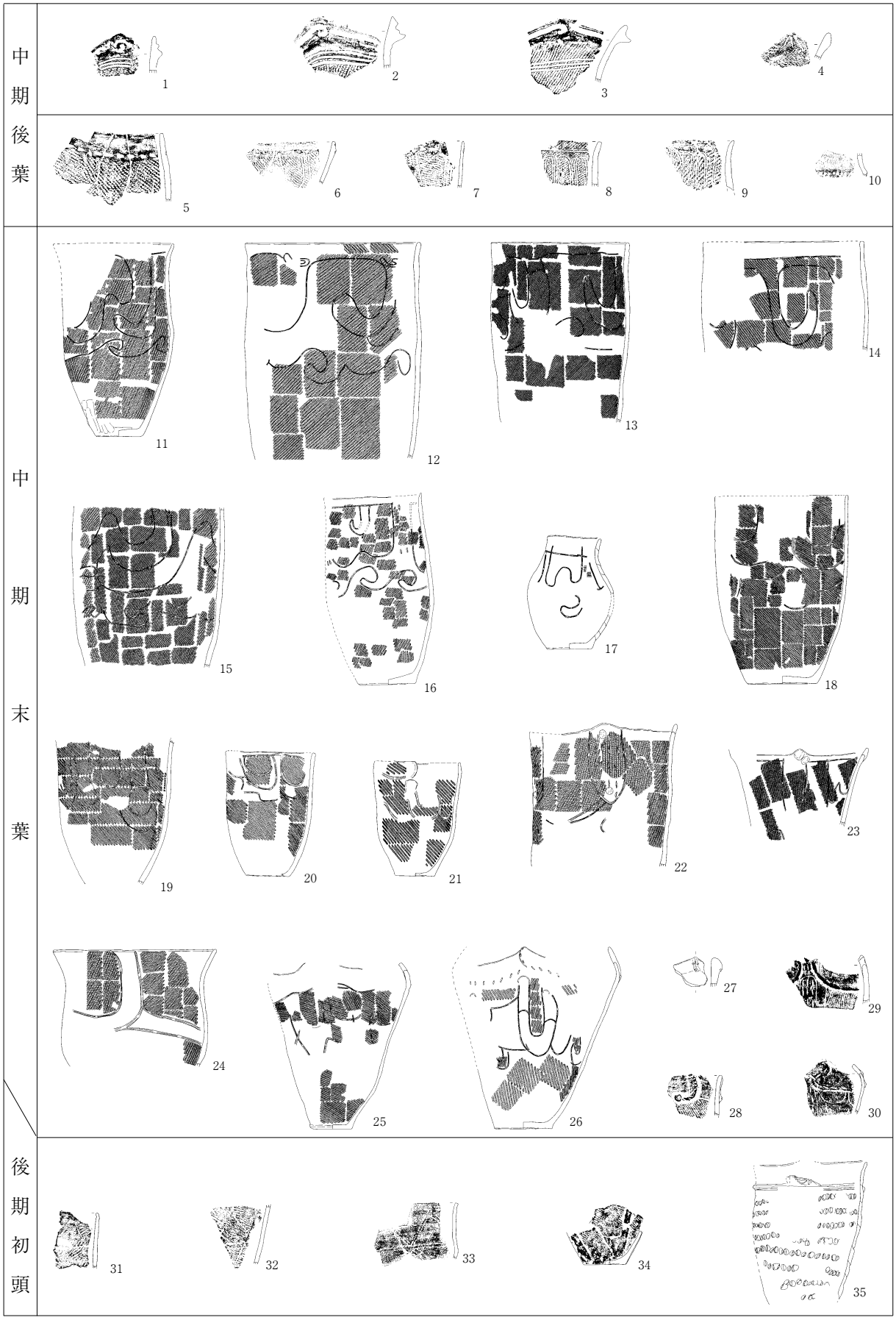
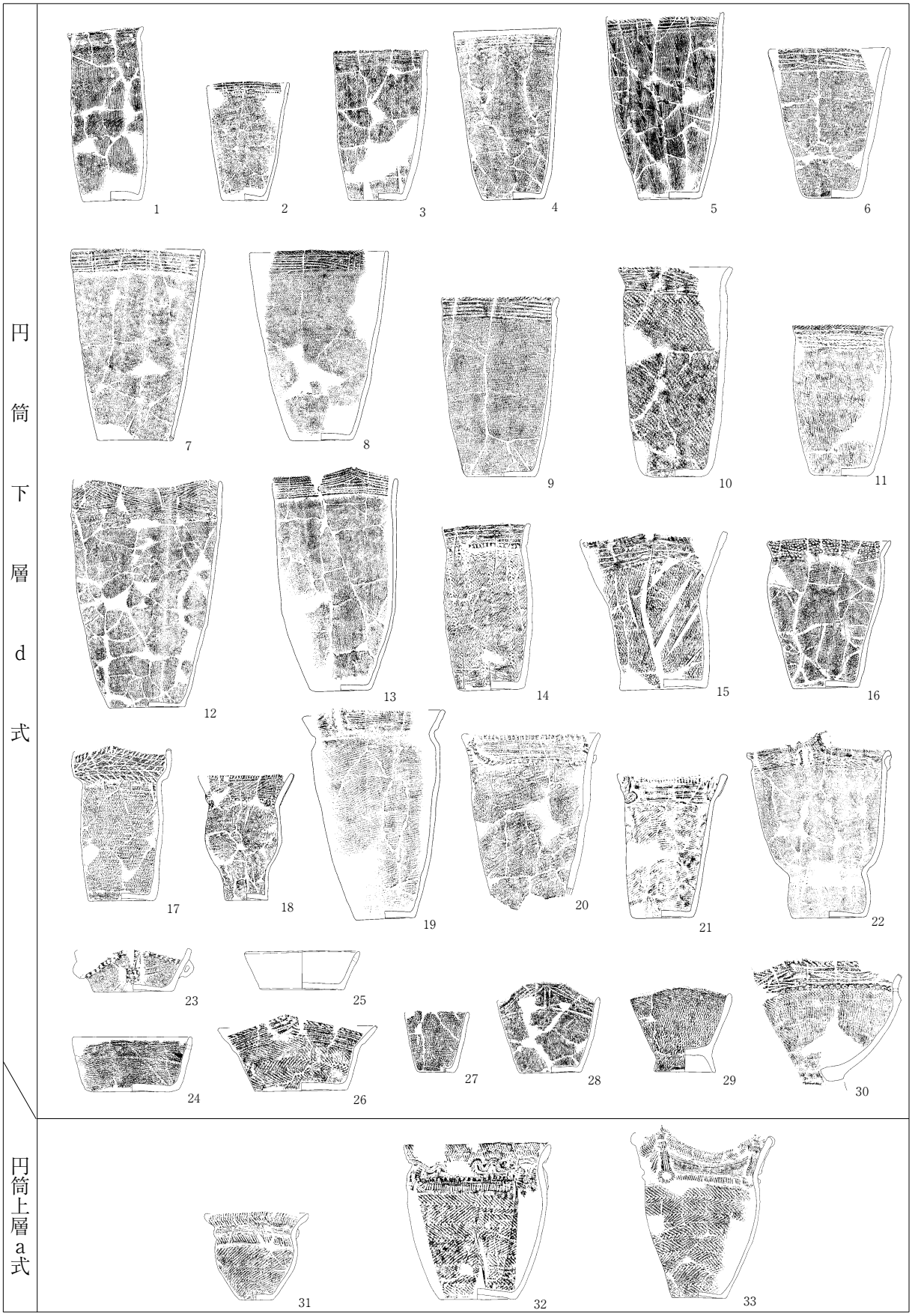


図4　第1号捨て場出土土器

S＝1/9



1・3・6・9～11・14・15・17・20・23～33：S＝1/9
2・4・5・7・8・12・13・16・18・19・21・22：S＝1/12

図５　第１号捨て場出土土器

状口縁がみられるが、装飾性にとむ波状が多くなるようである。文様構成は、頸部に施された１条の隆帯により区画された口頸部文様帯に縄文原体を押圧し、胴部には単節縄文もみられるが、横位の羽状縄文を施すものが多くなるようである。

4　まとめ

本遺跡からは数時期にわたる遺構・遺物が確認されており、縄文時代前期後葉・中期末葉に至っては大規模な集落が営まれていたことが推察される。ここでは、主体の一翼を担う中期末葉の土器を中心に考えることにする。土器の特徴を端的に表現する要因として文様構成があるが、本遺跡から出土した土器は胎土の成分に起因すると思われるが、残存状態が悪く詳細な文様構成を把握できるものは少ないといえる。この状況から器種組成の主体となる深鉢について、復元個体から文様構成をみることにする。文様構成的には、地縄文に沈線文を施すタイプ（Ａ群）と沈線間を磨消しにより無文とし文様を構成するタイプ（Ｂ群）が存在し、Ａ群が主体となる。これらは第７号竪穴住居跡の第３号石囲炉から共伴することがわかり、同時期に２つのタイプが存在したことは間違いないといえる。

Ａ群

・口縁部の横位沈線と胴部中央付近の波状沈線による区画帯に、Ｊ字状沈線文を施す（図３－11・４－12・13）。
・胴部中央付近に波状沈線を施文し、体部上半にＳ字状沈線文を施す（図１－19・20・４－11）。
・口縁部の横位沈線と胴部上半の直線的な波状沈線による区画帯に、Ｕ字状沈線文を施す（図４－20）。
・胴部中央付近に波状沈線を施文し、体部上半にＪ字状文を複合する逆Ｕ字状沈線文を施し、文様間には刺突を施す（図４－16）。

Ｂ群

・口縁部に波状沈線を施文し、体部上半には２段で構成されるＵ字状文を施す（図３－14）。
・体部上半に横位に展開する幅広のＳ字状文を施す（図３－22）。
・胴部上半にＵ字状文を施し、胴部中央付近には沈線により連結するＪ字状沈線文を施す。波頂部や沈線文の末端に鰭状貼付けが施され、口縁部には鰭状貼付けにつながる刺突に区画された無文帯を形成する（図４－26）。

これらの土器は、文様構成の相違から数段階の変遷があることが推測される。本遺跡においては、Ｕ字状沈線文（Ｕ字状文）を施す土器の胴部中央付近にみられる沈線に横位化あるいは消失するものがみられる。この傾向は後期初頭における方形区画文系への文様モチーフの変遷過程にみられる要因の一つと思われる。このことからＪ・Ｓ字状→Ｕ字状への文様変遷が考えられる。また後期初頭の段階では、口頸部文様帯の幅が広くなることから、幅広となる口頸部無文帯と隆帯の貼付けによる文様帯の変化も次段階への系譜の一つであり、後出的な要因と考えられる。本遺跡においては、Ａ・Ｂ群の土器が共伴しており、鈴木の地域差に一致するといえる（鈴木　2000）。またＡ群とした地縄文に沈線

文を施すものが主体となり、Ｂ群とした沈線間を無文帯とするものが少ない傾向にあることは、柳沢清一が論じる如く（柳沢　1980・1988）、Ａ群がＢ群の系譜上にある大木10式土器の影響を受けて成立・発展したことを物語るようでもある。

本稿においては、調査報告書において記載することができなかった土器について、事実記載を中心に「まとめ」として記載した。遺跡からはまた中期末葉～後期初頭の石棺墓が検出され、同時期と考えられる赤色顔料が納められた注口土器も出土している。石棺墓には赤色顔料の可能性がある付着物の痕跡があり、注口土器との相関性も考えられる。また、第１号捨て場からは大量の土偶やミニチュア土器が出土しており、祭祀的性格をうかがうことができる。これらについても今後深く探求し、当時の縄文社会の一端を導くことは重要であるが、それらについては稿を改めることにする。

（注１）遺跡の一部が保存されたため、未精査のものもあるが、これらは精査した遺構数である。

（注２）第１号遺物包含層の下位から検出された遺構は、保存エリアとなったため未精査である。

（注３）報告書において、図126－503は大洞Ｃ１式としたが、体部文様構成は入組文で構成されることから、大洞Ｂ２式相当とするのが妥当と考えられる。

（注４）報告書において、自身の認識不足により一部の土器を第Ｉ群として円筒下層ｃ式としたが、円筒下層ｄ式とするのが妥当と考えられる。また観察表に多軸絡条体を単軸絡条体と記載したものがあり、お詫びして訂正したい。

引用文献

青森県教育委員会　1978　『青森市三内遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集

青森県教育委員会　1992　『沢堀込遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集

青森県埋蔵文化財調査センター　1984　『韮窪遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第84集

青森県埋蔵文化財調査センター　2000　『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集

青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979　『青森市蛍沢遺跡発掘調査報告書』

八戸市教育委員会　1986　『丹後谷地遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集

江坂　輝彌　1956　「各地域の縄文式土器－東北－」『日本考古学講座３』河出書房

鈴木　克彦　2000　「東北地方北半部の中期・後期区分に関する編年学的研究（上）－大曲１式などの中期末葉の土器群－」『縄文時代』第11号 縄文時代文化研究会

成田　滋彦　1984　「東北地方北部の大木10式土器周辺」『奥南』３ 奥南考古学会

成田　滋彦　1989　「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観４』小学館

丹羽　　茂　1981　「中期の土器－大木式土器」『縄文文化の研究４縄文土器Ⅱ』雄山閣出版

本間　　宏　1985　「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第１号 よねしろ考古学研究会

本間　　宏　1987　「縄文時代後期初頭土器群の研究（１）－東北地方北部を中心に－」『よねしろ考古』第３号 よねしろ考古学研究会

本間　　宏　1988　「縄文時代後期初頭土器群の研究（２）－東北地方北部を中心に－」『よねしろ考古』第４号 よねしろ考古学研究会

柳沢　清一　1980　「大木10式土器論」『古代探叢』早稲田大学出版部

柳沢　清一　1988　「大木10式土器続考」『北奥古代文化』第19号 北奥古代文化研究会

三内丸山遺跡の終焉
― 縄文時代後期の遺物・遺構 ―

成田滋彦

1　はじめに

青森市に所在する三内丸山遺跡は、全国的に著名な遺跡となり、平成16年の11月において、三内丸山遺跡を訪れた見学者は400万人を越えた。いまや青森県の一大観光スポットになり、県内外から多くの観光客が訪れている。この人気のすごさは市民にとって誇りであり、名誉なことである。このことを、青森市民は認識しなければならないであろう。

さて、今回のテーマは、三内丸山遺跡の終焉はいつなのかという問題である。最近では、栄華をきわめた三内丸山の縄文都市が、縄文時代中期をもって崩壊するという物語的な表現は、あまり聞かれなくなり、多少はほっとしているが、それでは三内丸山遺跡の終焉はどうであったのか。今回は、このことについて、出土遺物を基に検討したいと思う。

それでは、その前に、三内丸山遺跡の開始はいつかということになるが、この遺跡に竪穴住居跡が初めて構築されたのは縄文時代前期中葉の円筒下層ａ式土器の時期であり、この段階から本格的に居住が開始されたと思われる。それ以前には、縄文時代早期中葉の白浜式、前期初頭の早稲田６類土器が断片的に南地区から出土しており（成田 1995）、遺構は検出されていないものの、縄文時代早期中葉から断続的であるが、この遺跡で人々が活動していたと考えられる。

2　縄文時代後期の編年

三内丸山遺跡の調査報告書では、縄文時代後期の土器分類は、出土量の少なさから、縄文時代後期を第Ⅳ群土器とする大別分類が主であったが、2004年に至って『三内丸山遺跡23』の調査報告書（佐々木・田中 2004）では、第Ⅳ群の土器をさらに１類と２類に細別している。その内容はつぎの通りである（**注１**）。

１類　十腰内遺跡第Ⅰ群以前に位置づけられるもの
２類　十腰内遺跡第Ⅰ群に位置づけられるもの

以上であるが、東北地方北半部における後期初頭の土器編年は、1968年の磯崎正彦氏（今井・磯崎 1968）の十腰内Ⅰ群の提示後に、細別が試みられてきた。現在は、葛西勵（葛西 1979）・本間宏（本間 1987）・児玉大成（児玉 2003）の諸氏や筆者編年（成田 1986）の４人の編年案に分かれている。

しかし、これらの論考は土器型式の認識に違いがみられ、いまだ決着をみていない。そのため今回は、十腰内Ⅰ式以前と十腰内Ⅰ式に大別して記載する。

これは、前記の『三内丸山遺跡23』の土器分類にちかいものである。なお。十腰内１式以前における細別型式については、筆者編年を用いることとする。

3　三内丸山遺跡の縄文時代後期の遺物・遺構

(1) 遺物

①　土器

十腰内Ⅰ式以前の土器群(図１－１～23)

１～７は、貼り付け文を主体としたモチーフの土器である。波状口縁の垂下部に渦巻文や縦位の粘土紐を貼り付けており、３は粘土紐の上面に撚糸圧痕、２・６は連続刺突の見られるもので、牛ヶ沢(３)式に相当する。

９・10は、波状口縁と平口縁をもち口頸部が内反する深鉢形である。口唇部から胴部下半にかけての文様構成をとり、横位方向に展開する文様は磨消縄文が主体的である。沖附(２)式に相当する。

14～23は、全体の形状がわかるものではないが、深鉢形が主である。文様は、二～三条の沈線を一単位として、縄文地文のうえに斜位に渦巻文を施している。弥栄平(２)式に相当する。

十腰内Ⅰ式の土器群（図２－１～24）

器種ごとに記載するが、深鉢形のものは、口頸部が内反し平口縁である。12・13は横位沈線と弧状文を組み合わせたものである。また、８・９は縦位と弧状の沈線文を組み合わせたものである。１・３の壺形は、肩部が張りだした形態で、口頸部と胴部下半に横位の文様区画帯を構成し、横位に展開した入り組み文を施している。５の鉢形は、底部から口唇部にかけて外反し、横位の区画帯内にカニ状文様と刺突を組み合わせた文様構成である。

本土器群をさらに細別すると、８・９は十腰内Ⅰ式の古段階に、１・５は十腰内Ⅰ式の新段階に位置づけられると思われる。

24は、文様構成の面から十腰内Ⅱ式の可能性も考えられる。

十腰内Ⅴ式の土器群(図２－25)

口頸部が長い注口形を呈する。口唇部寄り・口頸部・胴部に横位の沈線を巡らし、貼り付けが見られる。三内丸山遺跡では、出土数量が少ない型式の土器群である。

②　土偶(図２－30・31)

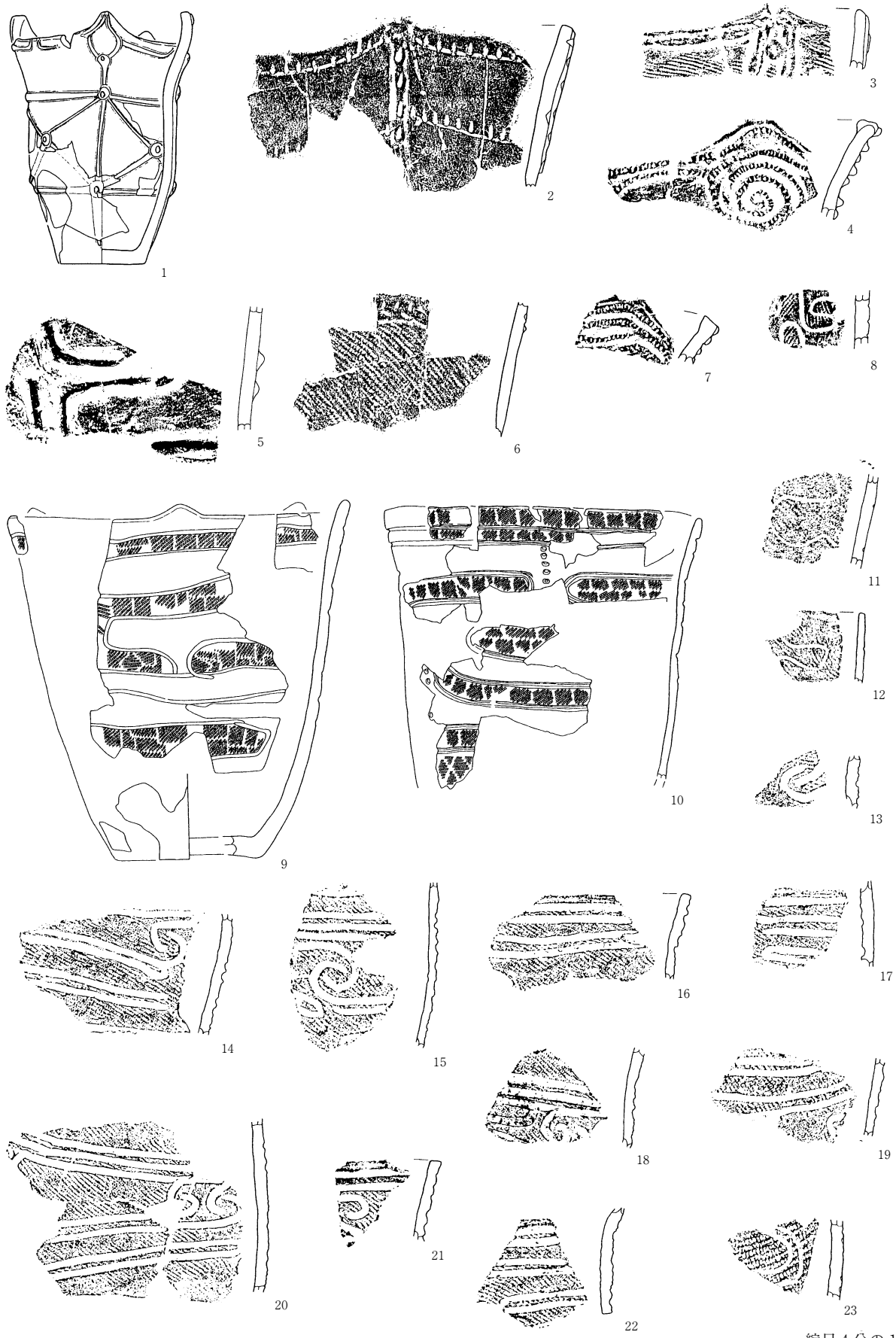
表面採集資料であり、江坂輝彌氏がかつて、縄文時代前期の土偶として紹介したものである(江坂 1966)。十字型を呈し乳房部・へそ部に貼り付けが見られものである。この土偶については、鈴木克彦氏が前期説を否定し(鈴木 1985)、小笠原雅行氏は後期説をとっている(小笠原 1999)。筆者も土偶の形態上、縄文時代後期のもので、製作技法等から判断して十腰内Ⅰ式期の所産と考えている。

(2) 遺構（図２－26～29)

土坑が１基、北地区Ｂで検出されている。試掘調査のため完掘されていないが、残存部から判断すると円形を呈するものと思われる。開口部で長軸136cm・短軸135cmを測る。堆積土から後期土器が出土しており、十腰内Ⅰ式期と考えられる(注２)。

4　まとめ

前章の３では、縄文時代後期の遺物・遺構を紹介した。ここでは、これらの遺物・遺構を総合的に考えてみたい。



縮尺４分の１

図１　十腰内Ⅰ式以前の土器群

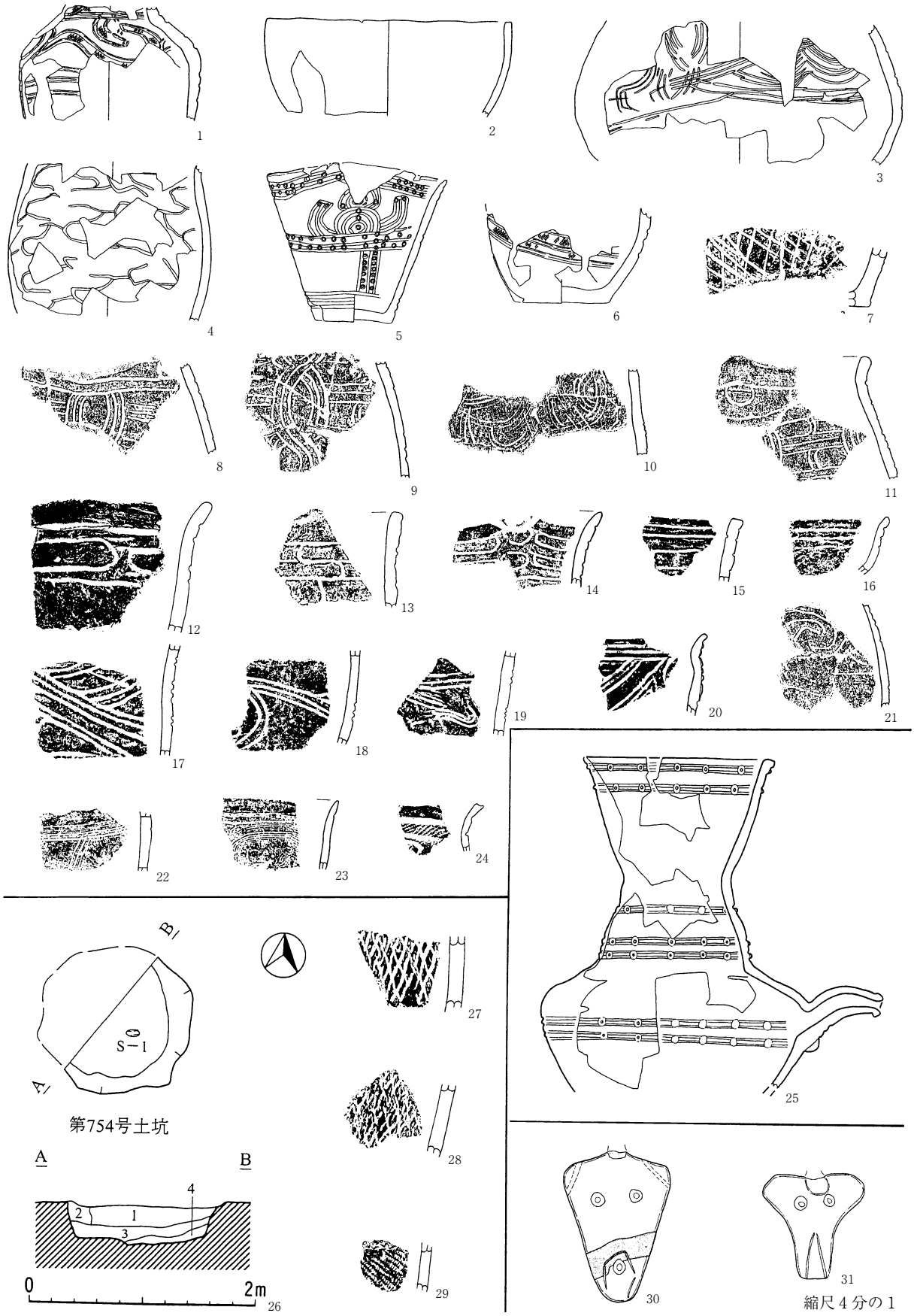


図２　十腰内Ⅰ式・Ⅴ式の土器群，土坑・土偶

まず、遺跡の空間は広大であるため、東西に流れる小河川を境に北地区と南地区とに大別し、さらに北地区の盛土範囲をＡ区、東側をＢ区、西側をＣ区に区分して述べる**（注３）**。

（1） 縄文時代中期末葉（大木10式併行期）（図３）

北地区Ａにおいては、盛土を使用しなくなる段階であるが、住居・掘立柱建物が配置され、Ｂ区では粘土採掘穴が見られる。また、南地区では、土坑墓・埋設土器が見られるが、平坦面の使用が見られない。全体的に見れば、遺構の規模・範囲は小さくなるものの、各区における遺構の施設配置には変化が見られないものである。

（2） 縄文時代後期（後期初頭～十腰内Ｉ式）（図３）

遺構は北地区Ｂの土坑１基しか検出されていないが、遺物はすべての区にわたって分布しており、前段階の中期末葉の遺物分布の状況と同じである。

なお、Ａ区の盛土は完全に使用されなくなり、盛土遺構のもつ機能は消滅したと思われる。そのため、Ａ区の祭祀センター**（注４）**としての求心力はなくなり、周辺地区の集落維持ができなくなっていた時期であったと思われる。

このように二時期を空間的な分布上から見ると、中期末葉（大木10式併行期）では、遺物の分布は集落全体に広がり、複数の集中ブロックが見られるが、後期の段階においては、遺物は全体に分布しているものの、遺構は特定の区域に限定されるようである**（注５）**。

次に、縦軸の時間的な面から土器を見ると、後期初頭の牛ヶ沢（３）式期では、粘土紐の存在は確認されるものの、それらに伴う磨消縄文が見られず、十腰内Ｉ式期の段階では深鉢形が主体で他の器種が少なくなる点が指摘できる。つまり、土器から見ると、後期の段階では一連の土器型式は確認されるものの、各型式に見られる文様要素の欠如や器種構成の欠落が確認される。

遺構は土坑のみであり、他の遺構は検出されていない。

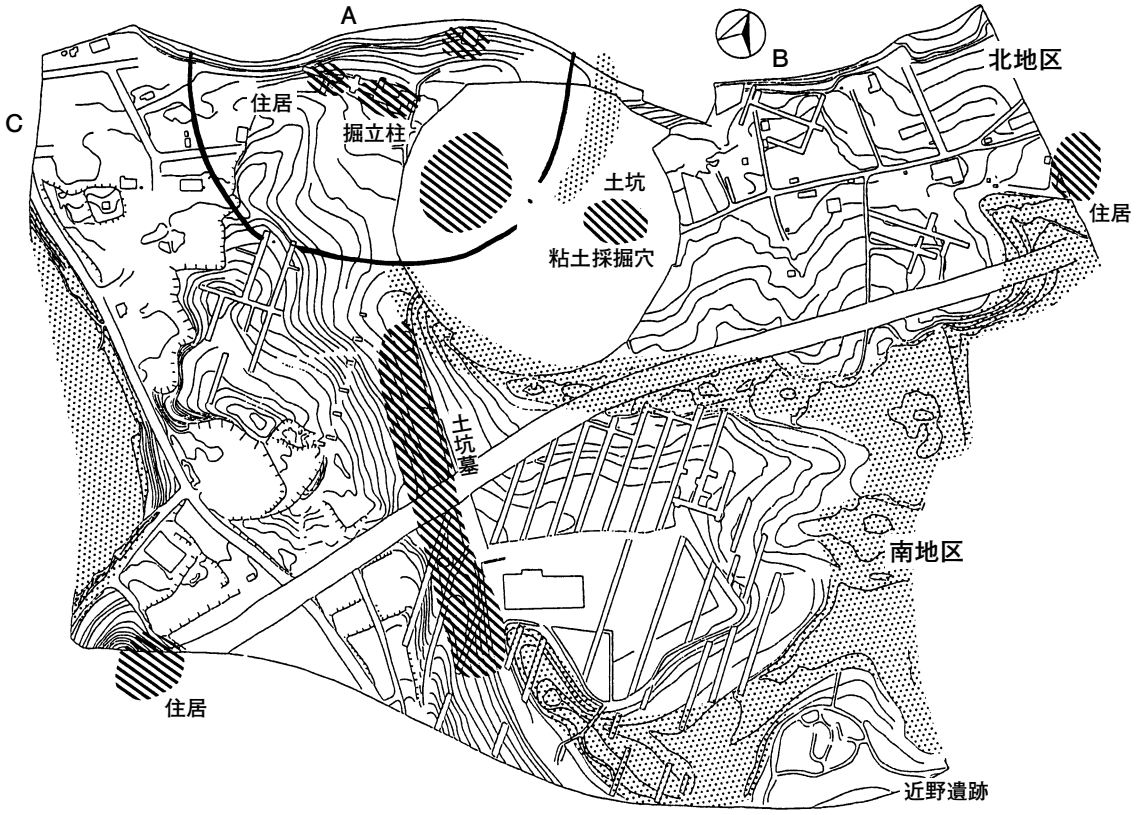
以上の遺物・遺構の面から整理してみると、三内丸山遺跡には縄文時代後期の段階は、初頭から十腰内Ｉ式土器まで継続して存在するが、その後に一時的に断絶したあと、後期末葉の十腰内Ｖ式土器の段階で再び活動が見られるようになる。

また、遺構及び土偶の存在などから、確かに集落の規模は小さいものの、集落は確実に存在していたことがうかがわれる。

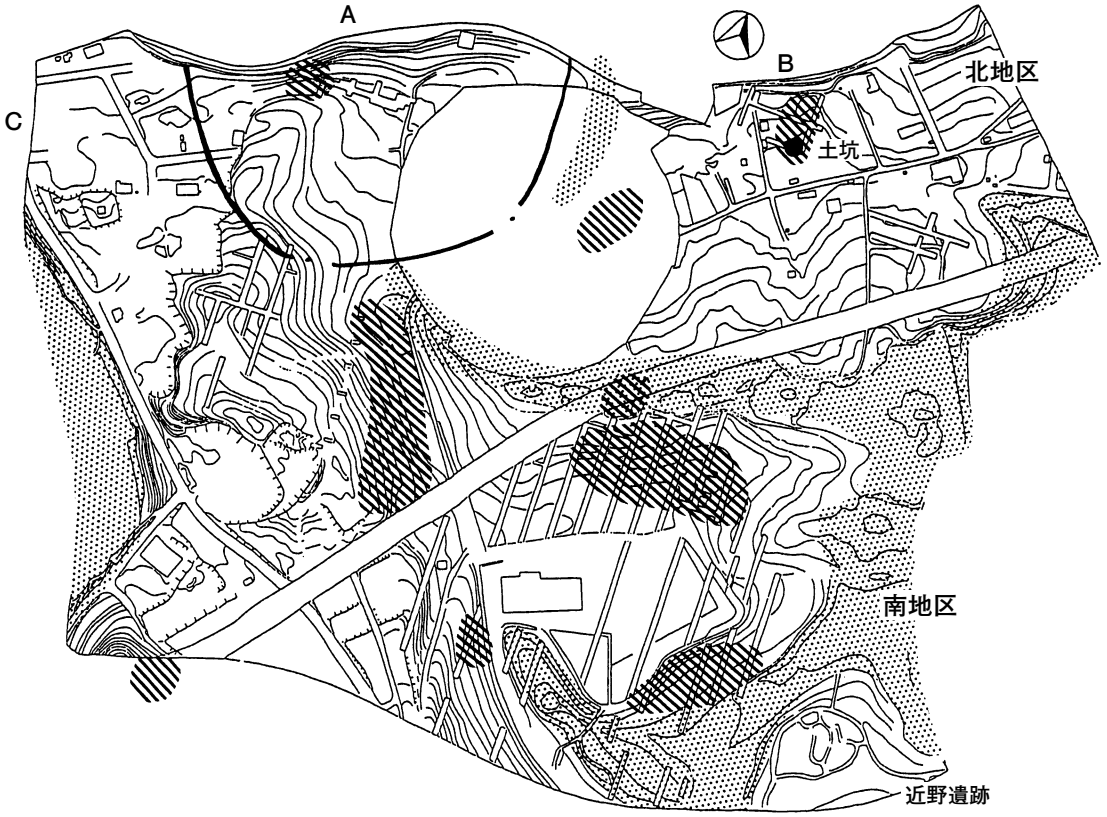
なお、三内丸山遺跡において、土器型式を保有していた集団が同一集団と仮定するならば、後期の段階では中期から継続しており、集団が断絶していたとは考えにくい。このことは中期末葉の大木10式併行期の土器分布と後期前葉の土器分布が、ほぼ合致する点が多いことも指摘できるため、別な集団とは考えにくいものである。

また、これほど大規模であった集落が、なぜ衰退したのかという点については、全国的な気候の冷涼化に伴うクリ林の崩壊に伴って、生業の基盤が崩壊したことが既に指摘されている（今村 1999）。このような自然環境の変化は、中部山岳地帯の遺跡数を例に、縄文時代中期の社会を崩壊に導いたとまでも述べられている（安田 1989）。

一方、山田昌久氏は三内丸山遺跡の終わりを「集中居住」から「分散居住」への変化であり、三内



中期末葉（大木10式併行期）



後期初頭～前葉（牛ヶ沢（３）式～十腰内Ⅰ式）

斜線のスクリーントーンは遺物・遺構
一点破線は盛土範囲

図３　縄文時代中期末葉～後期の集落変遷

丸山遺跡の消滅は、集落の衰退を意味することにはならないと考えており、三内丸山遺跡の発展を「集中居住」のほかに、それに伴った集合装置の存在「…集団をまとめる集合装置（巨大木柱）や小道具（土偶の大量出土）から見て、集団維持のしくみは働いていた…」と指摘している（山田 1997）。

なお、小道具のひとつである土偶は、三内丸山遺跡から1,600点以上**（注６）**が出土しており、その数量は他の遺跡とは比較にならないほどで、この遺跡のもつ大きな特徴と言える。また、三内丸山遺跡の巨大化を考える一つのキーポイントとして、土偶を介した三内丸山遺跡と周辺遺跡を強く結びつけるリレーションの存在が考えられる。このリレーションとは、三内丸山遺跡と周辺の三内沢部遺跡（市川 1978）、三内丸山（６）遺跡（坂本・小笠原 2002）の関係であり、周辺遺跡から出土する土偶を製作技法等から観察すると、三内丸山遺跡の土偶と非常に類似した特徴をもっている。つまり、三内丸山遺跡と周辺の遺跡は、土偶を介した集落のつながりが強く、筆者はこの関係をリレーションという用語で表現したい。

これが、この遺跡における大規模集落の形成につながっていったと思われる。この土偶リレーションの崩壊こそが、大規模集落の崩壊に伴う一つの現象ではないかと筆者は考えている。

三内丸山遺跡の衰退は、生業の基盤であるクリ林の崩壊と集落構造の変化によるものであり、それに伴って、三内丸山遺跡を中心とした土偶リレーションの崩壊を招いたものと考えられる。しかし、この集落は小規模ながらも、縄文時代後期まで継続していたと考えられる。

本稿を今回まとめるにあたり、三内丸山遺跡関連の調査報告書に記載された後期遺物を拾ってみたところ、意外にも縄文時代後期の資料が多いのに驚かされた。このことは、いかに筆者が三内丸山遺跡の調査報告書をよく読んでいなかったかということであり、おおいに反省させられたわけである。

三内丸山遺跡の調査報告書は毎年着実に刊行され、『青森県史別編　三内丸山遺跡』を含めると、いまや総ページ数は6,500ページを超えるという莫大な量になっている。今後は、この発表資料を基に、多くの研究者が、謎の多い三内丸山遺跡の解明に当たってほしいものである。

『注』

（１）この分類の名称については、十腰内遺跡第Ⅰ群という土器型式が認知されたものなのか疑問であり、何らかの説明が必要となろう。

（２）報告書では、後期初頭と記載しているが、その根拠は粗製縄文を施す土器によるものであろう。しかし、網目状撚糸文は継続期間に幅があり、北地区Ｂから十腰内Ⅰ式土器が出土していることから、十腰内Ⅰ式段階と筆者は考えている。

（３）図３は、『三内丸山遺跡Ⅵ』（岡田 1995）の図を一部修正して用いた。

（４）祭祀センターという用語は、盛土を中心として祭祀行為が行われていたのではないかということと、三内丸山遺跡の中心地であったという意味合いで用いた。

（５）北地区Ａ・Ｂ区の野球場建設予定地及び谷部において、後期土器が少ない点については、まだすべての報告書が刊行されていないため、今後の報告に待たなければならない。

（６）土偶1,600点以上という数値は、『青森県史別編　三内丸山遺跡』（小笠原2002）の記載を引用した。1,600点は最終の数値ではなく、三内丸山遺跡をすべて調査した場合は4,000点以上の土偶が出土すると筆者は予想している。その根拠は1,600点×2.5（盛土1.5＋捨て塚１の未調査部分）から算出したものである。

『引用・参考文献』

市川　金丸　　1978　『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集　青森県教育委員会
今井　冨士雄・磯崎　正彦　1968　「十腰内遺跡」『岩木山－岩木山山麓古代遺跡発掘調査報告書－』　岩木山刊行会
今村　啓爾　　1999　『縄文の実像を求めて』　吉川弘文館
江坂　輝彌　　1966　『土偶』　校倉書房

岡田　康博　1995　『三内丸山遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第205集　青森県教育委員会
小笠原　雅行　1994　『三内丸山（２）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集　青森県教育委員会
小笠原　雅行　1996　『三内丸山遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第204集　青森県教育委員会
小笠原　雅行　1998　『三内丸山遺跡ＸＩ』青森県埋蔵文化財調査報告書第251集　青森県教育委員会
小笠原　雅行　1999　「円筒土器文化圏における前期の土偶について」『土偶研究の地平』３　勉誠出版
小笠原　雅行　2002　『青森県史別編　三内丸山遺跡』青森県
葛西　勵　1979　「十腰内Ⅰ式土器群の編年的細分」『北奥古代文化』第11号　北奥古代文化研究会
児玉　大成　2003　「小牧野遺跡における縄文後期前半の土器編年」『第１回東北・北海道の十腰内Ⅰ式再検討』　海峡土器編年研究会
坂本　真弓・小笠原　雅行　2002　『三内丸山（６）遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第327集　青森県教育委員会
佐々木　雅裕・田中　珠美　2004　『三内丸山遺跡25―第23次・第26次調査報告書―』青森県埋蔵文化財調査報告書第381集　青森県教育委員会
鈴木　克彦　1985　「土偶の研究」『日高見国菊池啓治郎学兄還暦記念論集』　菊池啓治郎学兄還暦記念論集刊行会
長沼　圭一　1994　『三内丸山（２）・小三内遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集　青森市教育委員会
成田　滋彦　1986　「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観第４巻　後期・晩期・続縄文』　小学館
成田　滋彦　1995　『三内丸山（２）遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第185集　青森県教育委員会
秦　光次郎　2004　『三内丸山遺跡24』青森県埋蔵文化財調査報告書第382集　青森県教育委員会
本間　宏　1987　「縄文時代後期初頭土器群の研究（１）『よねしろ考古』第３号　よねしろ考古学研究会
安田　喜憲　1989　『文明は緑を食べる』読売選書24　読売新聞社
山田　昌久　1997　「縄紋集落の大きさとしくみ―縄紋都市説批判と東アジアの社会の一部分との三内丸山遺跡―」『縄文都市を掘る』　日本放送出版協会

青森市朝日山（2）遺跡の土坑墓について

中　嶋　友　文

1　はじめに

青森市に所在する朝日山（2）遺跡は県道青森浪岡線道路改良事業に伴い、1999～2003年に当センターによって発掘調査が実施され、平安時代の集落跡と縄文時代の墓域などが検出された。5年間の調査面積は約20,000㎡であるが、道路の改良事業のため調査区は東西に細長く、部分的に道路によって分断されているため、工事計画及び買収状況などにより断片的な発掘調査となり、調査区全体を把握できないままに部分的な報告書が刊行された。（青森県教育委員会：2001,2002,2003,2004b）そこで、報告書で触れられなかった諸点の中から、縄文時代晩期の土坑墓について若干の検討を加えてみたい。

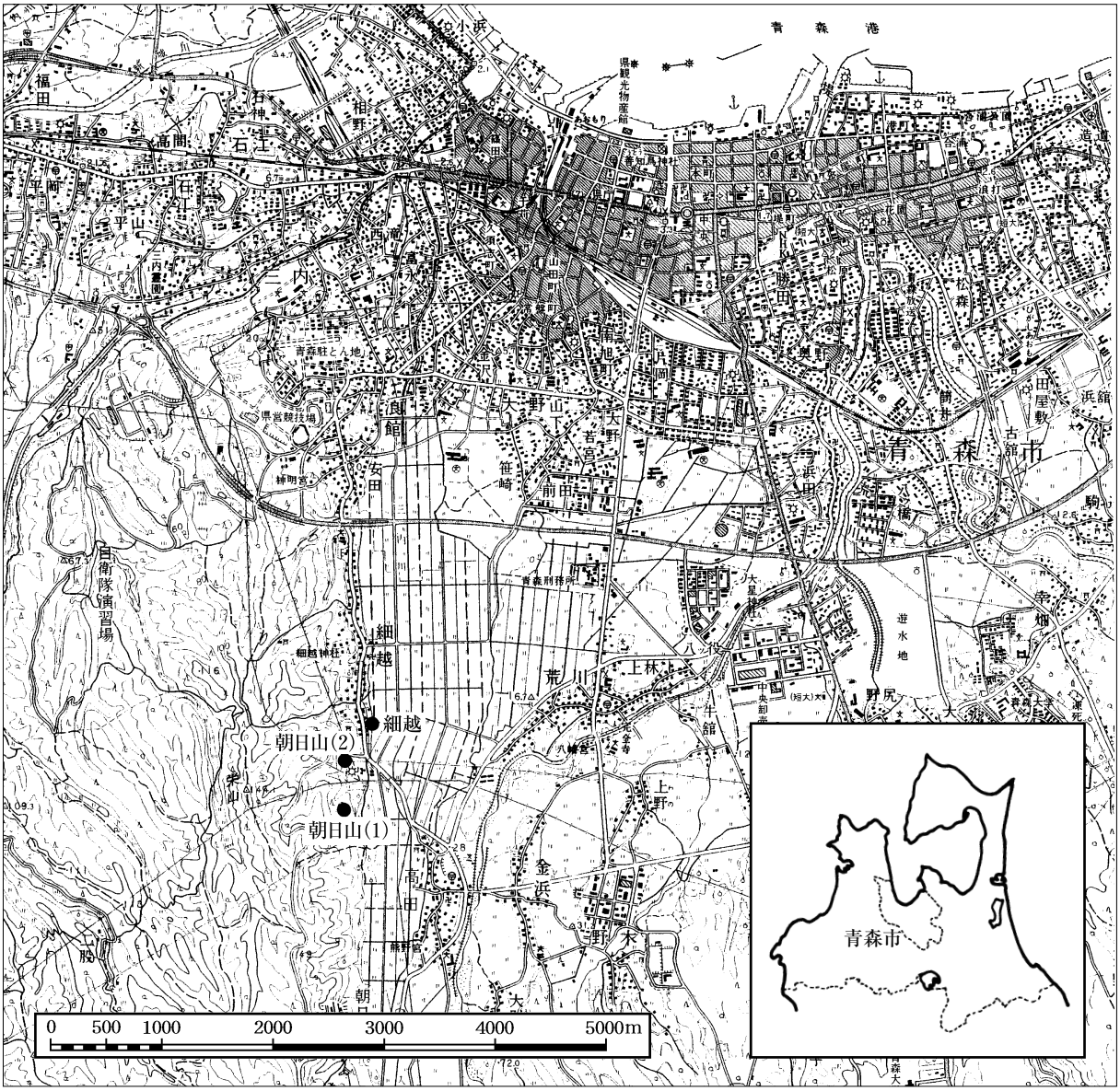


図1　遺跡位置図

2　遺跡の概要（図１）

本遺跡は、青森市南西部の中位段丘上に位置し、地形は北西から南東にかけて緩やかに傾斜し、その標高は約25～55mである。周辺には縄文時代晩期の細越遺跡などが近接する。現況は、おもに畑地や植林された杉林として利用されており、それらに伴うと思われる盛り土や削平された区域が随所にみられる。

遺跡は平安時代と縄文時代の複合遺跡で、調査区のほぼ全域に平安時代の遺構がみられる。縄文時代の遺構は、調査区南側をほぼ西から東に向かって蛇行する沢に沿った北側の緩斜面に中期後半の遺構、その東側の削平された平坦面に晩期前半の遺構がそれぞれまとまって検出されている。

５年間におよぶ調査の総面積が約20,000㎡で、検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡５軒、土坑（含土坑墓）160基、溝状土坑（落とし穴）８基のほか、平安時代の竪穴住居跡160軒（含竪穴遺構16軒）、土坑205基（含焼成遺構22基・井戸跡６基）、溝跡31条（含外周溝23条）、掘立柱建物跡７棟、畠跡などである。出土遺物は、段ボール箱で約520箱を数え、代表的な遺物としては、縄文時代晩期の籃胎漆器と奈良時代の唐式鏡『伯牙弾琴鏡』があげられる。特に『伯牙弾琴鏡』は東北地方以北では初めての出土例として注目された。

3　土坑墓について

本遺跡で検出された縄文時代晩期と思われる土坑墓の総数は75基である。本稿では、漆製品が出土した24基の土坑墓を中心として、平成４年度に発掘調査が行われ、本遺跡と沢を隔てて隣接する朝日山（１）遺跡（青森県教育委員会：1992, 1993）と比較検討をしてみる(註1)。

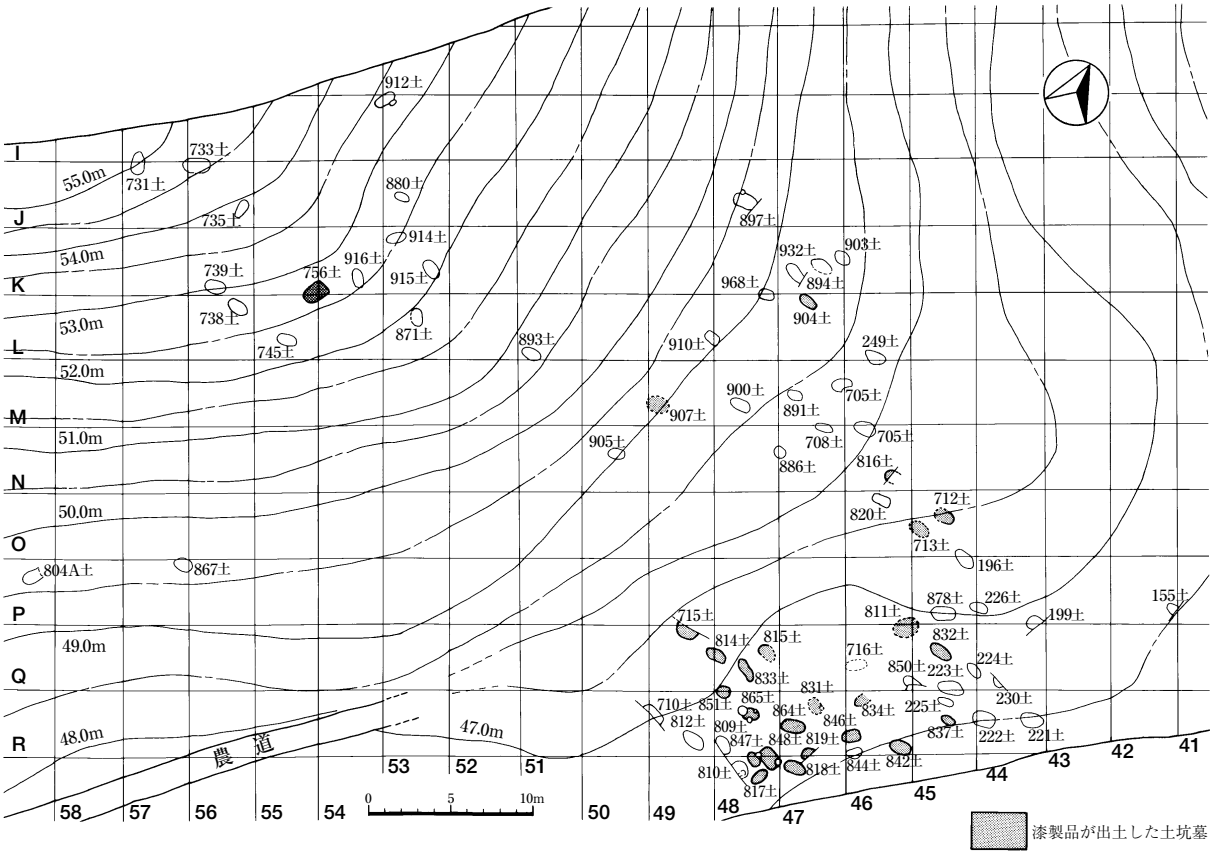


図２　土坑墓配置図

ただし、調査区南側の緩斜面に縄文時代中期末の土坑墓と思われる円形の土坑(註2)も存在するが、本稿で対象としたものは縄文晩期と推定される楕円形の土坑墓に限定したことを断っておきたい。

［分布状況］（図２）

土坑墓は、調査区中央部の平坦面から西側の緩斜面（標高約46～49m）にかけて分布し、特に中央部の平坦面に集中して検出されたが、その配置等に関しては、なんらかの規則性などを見つ出すことができなかった。しかし、漆製品が出土した土坑墓は狭い範囲にある程度のまとまりをもち、ベンガラ（赤色顔料）の散布されている土坑墓は西側の斜面に偏る傾向がみられるなど、考え方によってはいくつかのグループに分けられる可能性がある(註3)。また、重複している土坑墓が見られないことから考えて、その分布や配置については、何らかの制約があったと思われる。朝日山（１）遺跡では、丘陵東側の斜面（標高約50～70m）を中心として広範囲に分布し、その長軸方向から尾根に沿っていくつかのグループに分かれている。両遺跡ともに東側斜面につくられ、列状や環状のような特別な配置は見られない状況である。

［平面形・規模］（図３）

土坑墓の平面形はほとんどが楕円形で、それらの規模は長軸が130cm前後、短軸が75cm前後に集中する。長軸の最大が第811号土坑(註4)の約160cm、最小は第837号土坑と第851号土坑の約90cmである。短軸は最大が第811号土坑の約110cm、最小は第847号土坑の約50cmである。土坑墓の長軸と短軸の割合は２：１～３：２の中に収まり、朝日山（１）遺跡の３：１～３：２に比べるとその範囲は狭く、規格が同一の形態のものが多いという特徴がみられる。また、埋葬姿勢については、その規模から考えて屈葬が大半を占めるものと思われる。

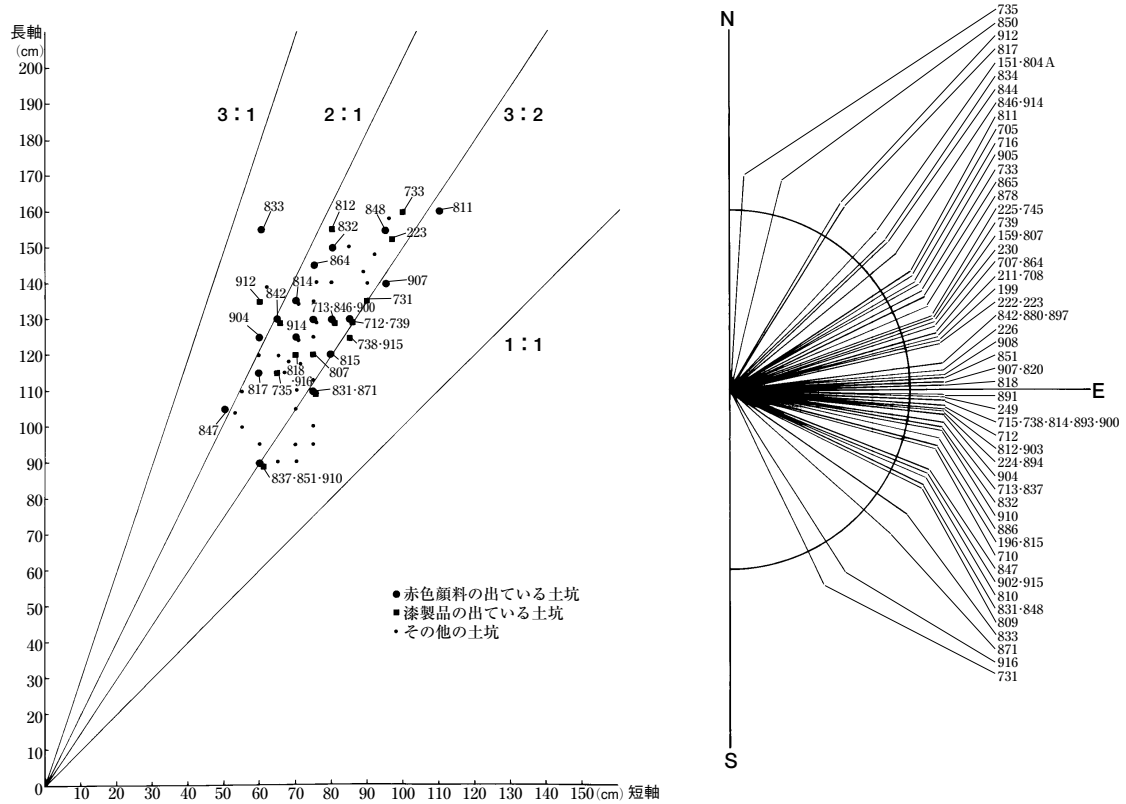


図３　土坑墓の規模と長軸方向

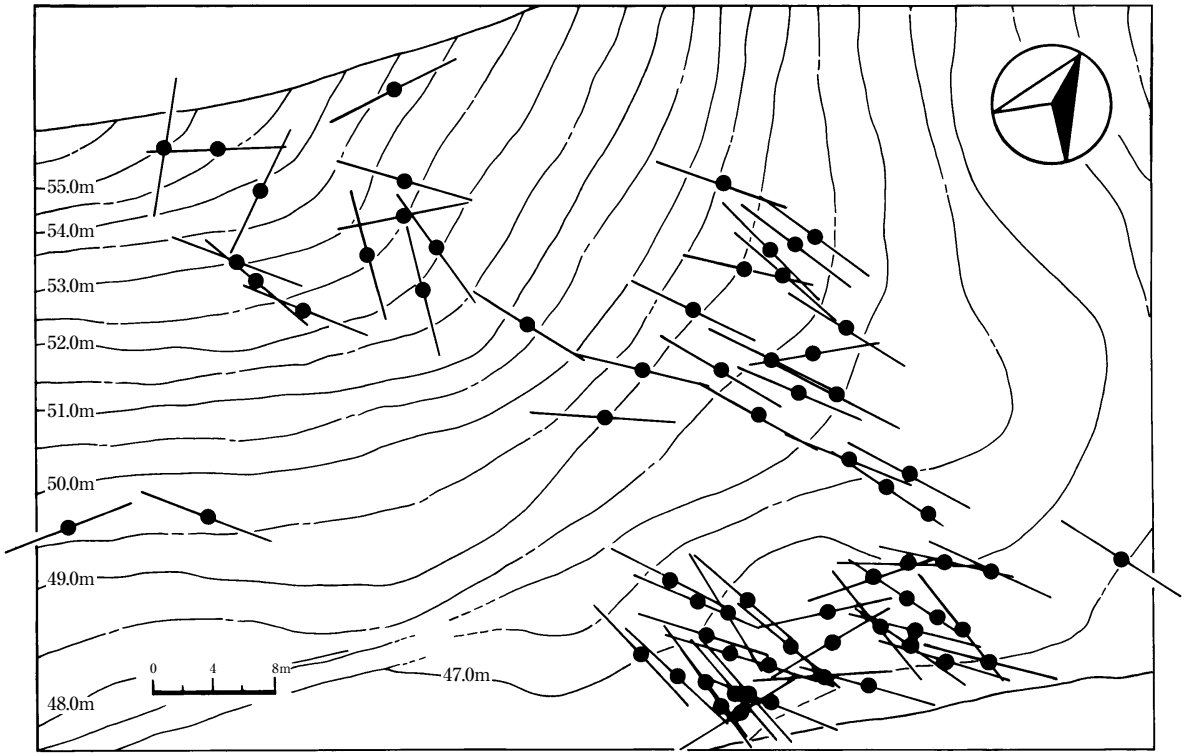


図４　土坑墓の長軸方向

［斜面の傾斜角と長軸方位］（図４）

調査区は造成や重複する遺構によって上部が削平されている土坑墓が大半を占めるため、残存部分（傾斜角６～７度）だけで判断はできないが、西から東にかけて緩やかに傾斜していたと思われる。土坑墓の長軸方向は、ほとんどがＮ－50°－Ｅ～Ｎ－120°－Ｅの範囲に収まり、その軸方向は等高線に対して平行するものより、むしろ直交するものが多い。そのことは、地形よりもその軸方向についてのなんらかの規則性が重要視された可能性が考えられる。朝日山（１）遺跡では傾斜角６～16度のやや急な斜面につくられ、その長軸方向が、いくつかのグループにまとまりをもち、それらが東西方向に集中している。この状況は、朝日山（２）遺跡と同様に地形の制約を受けずに構築されていると推定できる。

［頭位方向］

頭骸骨などの人骨が出土していないため、頭位方向が断定できる土坑墓はなかった。しかし、出土遺物の中には、籃胎漆器や耳飾り、ヒスイ製の玉類などある程度頭位方向を推定できるものがある。それぞれの出土状況から、籃胎漆器は頭位に被せられているものであり、耳飾りは耳に、首飾りやヒスイ製の玉類は首にそれぞれ着けていたとすれば、それらが出土した位置がおおよその頭部と考えられる。さらに、リング状の漆製品（耳飾り？）から顔の方向と体前面の方向が推測でき、第713号土坑は横向き（側臥）、第818号土坑では上向き（仰臥）と考えられるが、その埋葬様式に統一性を求めることはできない。また、ベンガラが検出された土坑墓は、その範囲から頭部を推定できるが、ベンガラが両端だけではなく中央部付近に散在する土坑墓も存在することから、範囲だけで頭部と断定することはできない。しかし、一般的に頭部にベンガラが散布されていることから、63％が東頭位と考えられる。朝日山（１）遺跡も同様にベンガラが検出された土坑墓の約６割が東頭位である。

［上部構造］

ほとんどの土坑墓は削平されているため上部構造について不明であるが、すべての土坑墓が同一時期に作られたとは考えられず、重複が確認できないことから埋葬後その上部に何らかの方法を用いて、位置を明示していたと思われる。朝日山（1）遺跡では上部にマウンド状の盛り土がみられるものや墓標と考えられる礫（ベンガラが付着していた石皿）が検出されている。

土　坑　墓　群（南から）

［堆積土］

漆製品が出土した土坑墓は、残存する掘り込み部分が僅かなため堆積土に関して特徴的なことは確認できなかったが、暗褐色から黒褐色の土色で炭化物や細礫を含み、その状況から人為堆積と考えられる。朝日山（1）遺跡では、上部層に砂質土や小礫が混入して堆積しているものがみられ、それらは、マウンド状の盛り土部分の残存であると考えられる。

［壁面］

堆積土と同様に残存する掘り込み部分が僅かなため壁面に関しても特徴的なことは確認できなかったが、比較的深い掘り込みを持つ第842号土坑の壁面は、ほぼ垂直につくられている。朝日山（1）遺跡では、壁面に階段状の段差がみられるものや内側に抉り込むものがみられる。

［底面］

土坑墓の底面はすべてがほぼ平坦であり、漆製品は出土していないものの底面の両端に溝をもつ土坑が1基確認されている(註5)。朝日山（1）遺跡では坑底面が平坦な土坑墓は90％、底面に溝をもつものは8基検出されている。

［出土遺物］（図5）

土坑墓から出土した遺物は、大部分が漆製品やヒスイ製の玉類で、僅かに土器や石器がみられる。検出した土坑墓数からみて、ヒスイ製の玉類の出土率は約13％、漆製品の割合は約32％となり、いずれも高い数値を示している。また、ベンガラの散布されている土坑墓からは籃胎漆器などの漆製品が出土していないが、ヒスイ製の玉類はベンガラや漆製品の有無に関係なく出土していることは興味深いことである。

漆製品のほとんどが土坑墓の底面からで、その状況から副葬品や装身具と考えられ、形状から大きく籃胎漆器、紐状漆製品、リング状（マカロニ状）漆製品の3つに分けられる。一般に籃胎漆器はカゴを母体として漆で塗り固めた漆器で、縄文晩期に多くの類例をみることができ、皿、鉢、壺などの種類がある。カゴの材料としては、タケなど材を細く削ったもので、鉢の場合、一般的には、底部が網代編み、

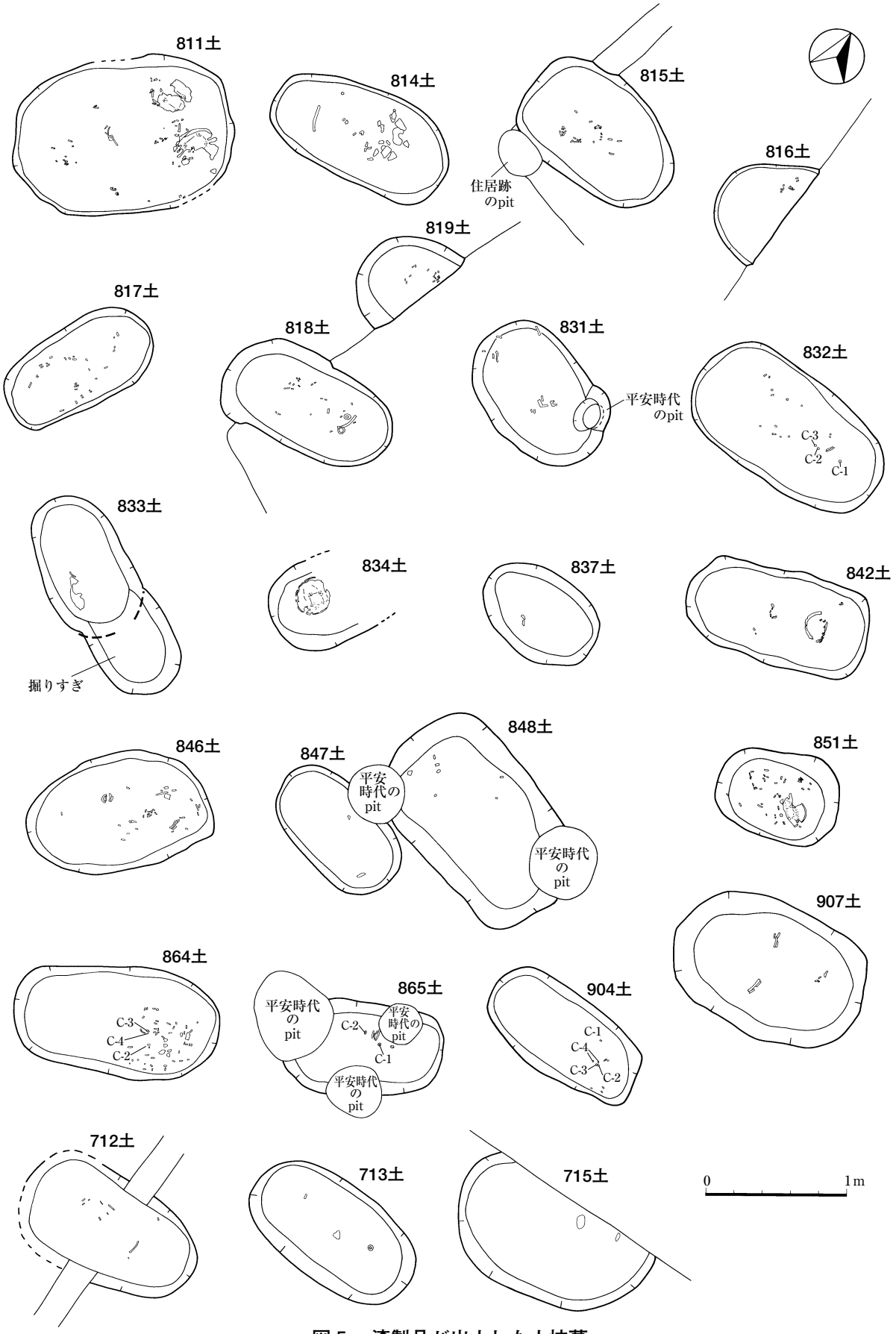


図５　漆製品が出土した土坑墓

胴部はザル編みにしており、底部の四隅が張り出している。保存処理を施した３点の籃胎漆器は、残存部分から推測して口径20～26cm、器高４～5.5cm、底径９～15cmで鉢と思われる。いずれも籃胎漆器の胎部分が残存していないためどのような材を用いてつくられたかは不明であるが、遺物を観察する限り太さが２～３mmという極めて細い材で編み込まれていることが言える(註6)。紐状漆製品は１～２mmの細い紐を２～３本束ねたもので、これがヒスイ製の玉類の孔を通っている。中には10本以上を束ねて環状につなげたものや十数本が交差しているものもみられる。多くは２～３cmの長さで散在し、その原形をとどめていない。それらの出土位置から首飾りや腰飾りの紐と推測される。調査では、衣類と思われるものは検出されなかったが、土坑墓の底面に散在する紐状漆製品が服の装飾に用いられている可能性も十分考えられる。しかし、本来漆は硬化するもので紐として結んだり、解いたりできるのかはどうかは疑問である(註7)。リング状（マカロニ状）漆製品も、その胎部は残存していないが、一部の漆膜からその形状が湾曲しているものを一括し、その出土位置から耳飾りや腕輪と考えられる。

籃胎漆器と思われる漆製品が出土している遺跡は、県内では縄文時代晩期の７遺跡(註8)にすぎず、ほとんどが沢地や泥炭層から出土で、遺構内（土坑墓）から確認できたものは朝日山（２）遺跡と浪岡町平野遺跡である。両遺跡ともに標高が約40～80mの丘陵上に位置し、漆膜が残存できる条件があったとは思われない。ただ、朝日山（２）遺跡では雨が降らない時でも土壌がやや湿った状態で、地下水が伏流していることと平安時代の竪穴住居跡の粘土質の貼床に覆われていたことが、残存していたことに結びつく可能性がある。しかし、硬化した漆膜自体は、耐久性や耐薬品性（酸やアルカリに強い）が優れていることから考えれば、基となる胎部分がすでになくなっていても、土中に残存しているのが当然なのかも知れない。いずれにしても出土した籃胎漆器を含む漆製品は、当時の埋葬方法を考える上で貴重な資料といえる(註9)。

朝日山（１）遺跡の土坑墓からは、漆製品が出土していないものの、ヒスイ製の玉類や石鏃、土製品、石製品などの副葬品や装着品が確認され、その出土率は10％程度である。

［時期］

土坑墓の時期については、第710号土坑や第715号土坑の出土土器から、晩期中葉の大洞C_1～C_2式と考えられるが、すべての土坑墓がその時期とは考えられない。同様に朝日山（１）遺跡でも、出土遺物からおおよそ大洞Ｂ・ＢＣ～C_1・C_2の時期と推定されるが、定かではない。どちらも埋葬された集団の竪穴住居跡（集落）(註10)などが確認されていないことと土坑墓からの出土遺物が少ないためで、単純に遺跡から出土した土器からみれば、両遺跡の間には若干の時期差が考えられる。

4　まとめ

朝日山（２）遺跡の土坑墓群は、丘陵の東側部分にある程度のまとまりをみせ、装着品には漆製品を多用している。残念ながらその集団の集落（竪穴住居跡）などは確認されていないため、出土した漆製品が遺跡周辺で製作されたものか搬入品なのかは不明である。だが、その漆を採取し製品を完成させるまでの技術を考慮すれば、埋葬された集団は特別技術を持っているか、あるい漆製品を手に入れることのできる集団の可能性が高く一般の集団とは考え難い。

また、装身具として種々の漆製品が出土したことから、精査の際、縦櫛が出土する可能性を前提として調査したが、調査区内の土坑墓からの検出されなかった。しかし、200mほど離れた東北新幹線工

事区域の第220号土坑墓から赤漆塗りの縦櫛が１点出土した(青森県教育委員会：2004a)。このことは、漆塗りの縦櫛自体が遺跡内に存在しないのではなく、調査区内の土坑墓に副葬あるいは装着されなかったか、あるいは埋葬された時期や集団が違ったためなのかも知れない(註11)。

埋葬姿勢については、土坑墓の形態からほとんどが屈葬と推定され、その幅の狭さからかなり強い屈曲の姿勢と考えられる。出土した漆製品から仰臥や側臥があることが想定でき、頭位方向は大半が東頭位で斜面に対することこだわりを持っていないようである。以上のことから、埋葬された集団が、居住区と埋葬区を設定し、埋葬を計画的に行い、管理していたと思われる。

本遺跡と朝日山（１）遺跡は、直線距離にして約300mほど離れているが、土坑墓の形態などから明確な違いを見つけることができなかった。唯一、副葬や装着される遺物に差異がみられ、それが時期(時間)的な差、あるいは、集団における葬制の違いと思われる(註12)。

また、今回、合葬墓が検出されたが、埋葬された人物がどのような関係なのかは不明であり、漆製品を装身具として多用していることを含めて今後の研究テーマとしたい。

最後に本稿をまとめるにあたり、恵庭市教育委員会の上屋真一氏・佐藤幾子氏、(財)北海道埋蔵文化財センターの小林正人氏、平安学園の本吉恵理子氏、当センターの福田友之氏・三浦圭介氏には種々ご教示いただき、この場を借りて感謝申し上げたい。

註１　場所によっては土坑墓自体が、重複する平安時代の遺構によって完全に削平されてしまった可能性も考えられるが、あくまで検出した土坑墓を対象とする。

註２　人骨などが出土せず埋葬された痕跡を認めることができなかったため、土坑墓とは断定することは難しいが、その遺物などの出土状況から土坑墓の可能性が考えられる土坑。

註３　調査区の南側に隣接する畠を耕作している人の話では、漆製品と思われる赤い破片が確認されており、漆製品が出土する土坑墓の範囲は南側に広がる可能性が考えられる。

註４　第811号土坑は、籃胎漆器２点のほか、ヒスイ製の玉類や紐状の漆製品が出土し、その状況から２体同時に埋葬された合葬墓と考えられ、他の土坑に比べ規模的が大きい。八戸市八幡遺跡の第13号土坑墓も長軸170cm、短軸135cmと大きく、成人男女が屈葬状態で合葬されている。

註５　調査では、第736号土坑墓が底面に溝が確認され、木枠と考えられるコの字状の炭化材を放射性炭素年代測定した結果、およそ2900～3000年前と報告された。また、土坑墓と形態や軸方向などが晩期のものと違うことから考えて、縄文晩期以前の土坑墓とし、現時点では晩期の土坑墓からは除外した。

註６　八戸市是川遺跡で出土した籃胎漆器の胎部分の樹種はトチノキとノリウツギである(八戸市教育委員会：2002)。

註７　紐状漆製品を、六ヶ所村上尾駮（１）遺跡Ｃ地区では、帯状赤色顔料としてハチマキ(ヘアーバンド)と呼称しているが、本遺跡ではその出土位置からハチマキとは考えられず首飾りや腰紐としている。

註８　八戸市是川中居遺跡、木造町(現つがる市)亀ヶ岡遺跡、板柳町土井Ｉ号遺跡、尾上町八幡崎遺跡、浪岡町平野遺跡、平賀町石郷遺跡、青森市朝日山（２）遺跡の７遺跡である。(平成15年11月現在)

註９　比較的残存状態の良かった籃胎漆品３点、首飾り(紐状漆製品)１点、耳飾り(リング状漆製品)１点を保存処理したが、やはり出土直後の色合いとは違ってしまった。それは、漆に混入する朱やベンガラの量などによって微妙に違うことや何層にも塗り重ねしているなど、出土した漆製品が一様な色合ではなかったためで、出土した時に共通した色調の認識が必要である。例えば『日本の伝統色 第７版』(大日本インキ化学)などを用いて記録しておくことも一つの方法といえる。

註10　朝日山（２）遺跡で、検出された縄文時代の縦穴住居跡の５軒は、いずれも中期後半と考えられる。

註11　土坑墓間の距離が約200mの離れていることから、同一の墓域とは考えがたい。六ヶ所村上尾駮（１）遺跡Ｃ地区でも紐状漆製品が出土した土坑墓群と縦櫛が出土している土坑墓群とは約30m離れており、その形態などから同一のグループとは考えられない。

註12　縄文時代晩期の浪岡町源常平遺跡(大洞Ｂ・Ａ式?)、六ヶ所村上尾駮（１）遺跡Ｃ地区(大洞C_1～C_2式)、北海道木古内町札刈遺跡(大洞C_2式)でも、土坑墓の形態などにあまり差異が認められないが、副葬や装着された遺物の違いが時期差や地域差、あるいは集団における葬制の差と考えられ、僅か300mほどの離れた区域でも考えられないことではないと思われる。

《引用・参考文献》

青森県教育委員会　1978『源常平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第39集
青森県教育委員会　1979『細越遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第49集
青森県教育委員会　1987『上尾駮（１）遺跡Ｃ地区発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第113集
青森県教育委員会　1992『朝日山遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第152集
青森県教育委員会　1993『朝日山遺跡Ⅲ（第１分冊）』青森県埋蔵文化財調査報告書第156集
青森県教育委員会　2001『朝日山（２）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第298集
青森県教育委員会　2002『朝日山（２）遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第325集
青森県教育委員会　2003『朝日山（２）遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第350集
青森県教育委員会　2004a『朝日山（２）遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第368集
青森県教育委員会　2004b『朝日山（２）遺跡Ⅸ』青森県埋蔵文化財調査報告書第369集
青森県立郷土館　1984『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告第17集・考古－６
青森県立郷土館　1993『漆の美－日本の漆文化と青森県－開館20周年記念特別展図録』
板柳町教育委員会　1993『土井Ⅰ号遺跡』
岡村　道雄　1990「埋葬状態からみた縄文人のアクセサリー」『月刊文化財』11月号　第一法規出版
葛西　勵　1983「縄文時代中期、後期、晩期（葬制の変遷）」『青森県の考古学』青森大学出版局
工藤　正　1979『青森県尾上町八幡崎・李平遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』尾上町教育委員会
瀬川　拓郎　1983「縄文後期～続縄文期墓制論ノート」『北海道考古学』第19輯
浪岡町教育委員会　2002「平野遺跡発掘調査報告書」『平成13年度浪岡町文化財紀要』Ⅱ
成田　滋彦　1979「亀ヶ岡文化圏の葬制の諸問題（１）」『考古風土記』第４号
成田　滋彦　1980「亀ヶ岡文化圏の葬制の諸問題（２）」『考古風土記』第５号
八戸市教育委員会　1988『八幡遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第26集
八戸市教育委員会　2002『是川中居遺跡１』八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集
藤本　強　1995「墓制成立の背景」『縄文文化の研究９　縄文人の精神文化』雄山閣出版
南北海道考古学情報交換会　1999『北日本における縄文時代の墓制　資料集』
保坂　三郎　1972『是川遺跡』中央公論美術出版
北海道開拓記念館　1973『札刈遺跡』
山岸　良二　1991『原始・古代日本の墓制』同成社
山田　康弘　2001a「縄文人の埋葬姿勢（上）」『古代文化』第53巻第11号
山田　康弘　2001b「縄文人の埋葬姿勢（下）」『古代文化』第53巻第12号

土坑墓一覧表

土坑番号	位　置	形　態	規　模（cm）			長軸方位	備　考
			長軸	短軸	深さ		
SK－151	P－38・39	楕円形	140	76	19	N－43°－E	
SK－155	O－40	不明	－	59	10	－	
SK－159	P－35	楕円形	139	62	42	N－72°－E	
SK－196	O－44	楕円形	143	89	41	N－105°－E	
SK－199	P－42・43	楕円形	113	75	28	N－77°－E	
SK－211	Q－43	楕円形	148	92	46	N－76°－E	
SK－222	Q－43	楕円形	158	96	56	N－78°－E	
SK－223	Q－44	楕円形	152	97	69	N－78°－E	ベンガラ（西）
SK－224	P－43・44	楕円形	117	71	32	N－96°－E	
SK－225	Q－44	楕円形	104	53	26	N－70°－E	
SK－226	O－43・44	楕円形	118	68	27	N－85°－E	
SK－230	Q－43	楕円形	115	67	25	N－73°－E	
SK－249	K・L－45	楕円形	140	80	40	N－92°－E	
SK－705	L－45・46	楕円形	125	75	45	N－58°－E	ヒスイ1
SK－707	M－45	楕円形	140	90	35	N－75°－E	
SK－708	M－46	楕円形	110	55	10	N－76°－E	
SK－710	Q－48	楕円形？	150	－	40	N－106°－E	浅鉢1（大洞C2）
SK－712	N－44	楕円形？	130	85	30	N－94°－E	漆製品（紐状）
SK－713	N－44	楕円形	130	75	25	N－99°－E	漆製品（リング状：耳飾り）
SK－715	P－48	楕円形？	145	－	10	N－93°－E	漆製品（紐状）、壺2・鉢2（大洞C2）

土坑番号	位　　置	形　態	規　　模（cm）			長軸方位	備　　考
			長軸	短軸	深さ		
SK－716	P－45	楕円形	120	65	10	N－60°－E	
SK－731	H・I－56	楕円形	135	90	45	N－154°－E	ベンガラ（南東）
SK－733	H・I－55	楕円形	160	100	55	N－63°－E	ベンガラ（東）、底面両端に溝
SK－735	I－55	楕円形	115	65	15	N－4°－E	ベンガラ（全体）
SK－738	K－55	楕円形	125	85	30	N－93°－E	ベンガラ（東と西）
SK－739	J－55	楕円形	130	85	35	N－71°－E	ベンガラ（東）
SK－745	K－54	楕円形	135	70	40	N－70°－E	
SK－804A	O－58	楕円形	－	80	20	N－43°－E	
SK－807	O－56	楕円形	120	75	55	N－72°－E	ベンガラ（西）
SK－809	Q－47	楕円形	120	－	15	N－117°－E	
SK－810	R－47	楕円形	104	－	15	N－114°－E	
SK－811	P－44・45	楕円形	160	110	45	N－57°－E	漆製品（籃胎漆器2）、ヒスイ2
SK－812	Q－47	楕円形	155	80	20	N－95°－E	ベンガラ（東）
SK－814	P－47・48	楕円形	135	70	25	N－93°－E	漆製品（籃胎漆器）、ヒスイ2、石英赤鉄鉱7
SK－815	P－47	楕円形	120	80	30	N－105°－E	漆製品（リング状他）
SK－816	M－45	不明	－	－	20	－	漆製品（紐状）
SK－817	R－47	楕円形	115	60	15	N－32°－E	漆製品（紐状）
SK－818	R－46	楕円形	125	70	40	N－89°－E	漆製品（リング状：耳飾り）
SK－819	O・R－46	不明	－	－	25	－	漆製品（紐状）
SK－820	N－45	楕円形	120	60	25	N－88°－E	
SK－831	Q－46	楕円形	110	75	20	N－116°－E	漆製品（リング状他）
SK－832	P－44	楕円形	150	80	40	N－100°－E	漆製品（リング状他）、ヒスイ3
SK－833	P－47	楕円形	(155)	60	15	N－125°－E	漆製品（籃胎漆器）南東部掘りすぎ？
SK－834	Q－45	不明	－	－	25	N－46°－E	漆製品（籃胎漆器）
SK－837	Q－44	楕円形	90	60	25	N－99°－E	漆製品（紐状）
SK－842	Q－45	楕円形	130	65	50	N－83°－E	漆製品（紐状：首飾り）
SK－844	Q・R－45	楕円形	90	70	15	N－47°－E	
SK－846	Q－45	楕円形	130	80	25	N－51°－E	漆製品（籃胎漆器・リング状他）
SK－847	Q・R－47	楕円形	105	50	20	N－112°－E	漆製品（紐状）
SK－848	Q・R－47	隅丸長方形	155	95	15	N－116°－E	漆製品（紐状）
SK－850	P－44・45	不明	－	65	30	N－14°－E	
SK－851	P・Q－47	楕円形	90	60	25	N－87°－E	漆製品（籃胎漆器）、ヒスイ2
SK－864	Q－46	楕円形	145	75	25	N－75°－E	漆製品（籃胎漆器）、ヒスイ4、石鏃1
SK－865	Q－47	不明	－	65	15	N－65°－E	漆製品（紐状）、ヒスイ3
SK－871	K－52	楕円形	110	75	25	N－132°－E	ベンガラ（北）、緑色凝灰岩平玉52
SK－878	O－44	楕円形	140	90	30	N－67°－E	礫1
SK－880	I－52	楕円形	100	55	30	N－83°－E	ベンガラ（東）、小石3
SK－886	M－46・47	楕円形	90	65	25	N－103°－E	
SK－891	L－46	楕円形	105	70	30	N－91°－E	ヒスイ3
SK－893	K・L－50	楕円形	125	70	45	N－93°－E	
SK－894	J－46	楕円形	135	75	25	N－96°－E	
SK－897	I－47	楕円形	150	85	40	N－83°－E	
SK－900	L－47	楕円形	130	80	30	N－93°－E	ベンガラ（東）
SK－902	J－46	楕円形	130	75	15	N－113°－E	
SK－903	J－45・46	楕円形	95	75	15	N－95°－E	
SK－904	K－46	楕円形	125	60	15	N－97°－E	漆製品（紐状）、ヒスイ4
SK－905	M－49	楕円形	110	70	35	N－61°－E	
SK－907	L－48・49	楕円形	140	95	40	N－88°－E	漆製品（紐状）
SK－908	J・K－47	楕円形	95	60	15	N－86°－E	
SK－910	K－47・48	隅丸長方形	90	60	20	N－101°－E	ベンガラ（東）、ヒスイ6
SK－912	H－52・53	楕円形	135	60	15	N－31°－E	ベンガラ（北）
SK－914	J－52	楕円形	130	65	25	N－51°－E	ベンガラ（中央）
SK－915	J－52	楕円形	125	85	50	N－113°－E	ベンガラ（東）
SK－916	J－53	楕円形	120	70	45	N－148°－E	ベンガラ（南）

宇鉄遺跡の石銛装着

― 津軽海峡南岸の恵山文化期の例 ―

福　田　友　之

1．はじめに

昭和62（1987）年に青森県立郷土館が実施した宇鉄遺跡第４次調査(注１)の際、石銛（石製銛先）が６点出土した。このなかに、銛頭に装着された痕跡を残すアスファルト状物質が付着したものがあった。類例は、北海道島南部の恵山文化期の遺物に見られ、実際に、石銛が鹿角製銛頭に装着されたままの状態で出土した例もあることから、その具体的な装着法は既に知られている。しかし、津軽海峡を越えた本州島北端にある宇鉄例については、形態・大きさ等の類似から、装着法はほぼ同様であろうと想定はなされるものの、この時代の銛頭が出土していない本県域では、具体的な検討はとくになされてこなかった状況がある。そこで小稿では、調査に関わった者の一人として、その具体的な装着法について検討してみたい。

2．宇鉄遺跡と石銛

（1）宇鉄遺跡（図１・写真１）

宇鉄遺跡は、津軽半島先端の竜飛岬から６kmほど東南の海岸段丘にある。東側は三厩湾に面した急崖、西側は元宇鉄川という小河川によって画されており、標高は約20～30m。遺跡からは海峡の対岸に松前半島を間近に望むことができる。地籍は青森県東津軽郡三厩村宇鉄字下平他。

この遺跡には縄文晩期・後期、弥生期の各遺物出土地点があり、昭和50～52・62年に県立郷土館が行なった弥生地点の調査において、中期前半の宇鉄Ⅱ式期を主とする土壙墓・カメ棺墓群が発見された(注１・２)。出土した土器・石器類は、北海道島南部を中心として盛行した続縄文前半期の恵山文化と

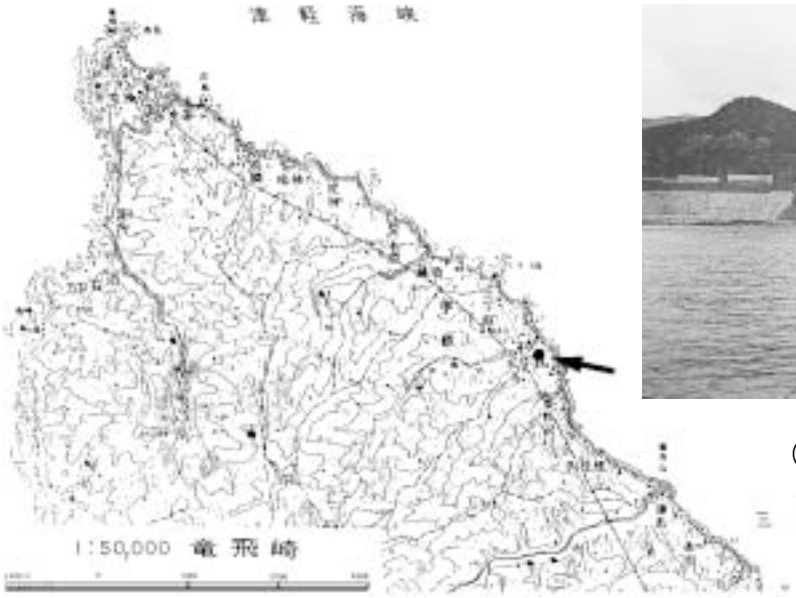


写真１　宇鉄遺跡
（1987.10.24（土）．叶丸から）

図１　宇鉄遺跡の位置（本図は国土地理院発行の５万分の１地形図を複製したものである。）

の関わりを強く窺わせるものであったが、一方では、土壙墓から糸魚川産と見られる硬玉製丸玉１点と佐渡猿八産の碧玉製管玉350余点(注３)が出土するなど、新潟県域南部・佐渡・富山県域北部との関わりを窺わせるものもあり、おおいに注目された。

(2) 石銛の分類(図２・３・５)

出土した石銛は、昭和62年出土の６点と昭和50～52年出土の４点の計10点である(注１・２)。

昭和62年出土の６点は第２号土壙墓から出土した。土壙墓は楕円形で、確認面における長さは110cm、幅は82cm、深さは34cmであった。このなかに２個の大型土器(カメ棺)が口縁を斜め下にして納められており、石銛は１以外はすべて土器の外から出土した(図２・３)。耕作によりカメ棺下半部が破損されていたため、石銛が埋納された状態をとどめているかどうか不明であるが、カメ棺外に納められていたものと見られる。また、この土壙墓からは、ほかに珪質頁岩製のナイフ・玉髄製の靴形石器各１点(図５)と珪質頁岩製の同一母岩から剥ぎ取ったと見られる剥片８点、凝灰岩製の小円礫１点と碧玉製管玉２点も出土したが、同様にカメ棺外にあった可能性が非常にたかい。

さて、これら石銛６点にはアスファルト状物質が付着したものや付着していないもののほかに、糸巻状の痕跡が明瞭に残されたものがあり、その痕跡によって、つぎの５つに分類される(図３)。

A(1)・・・・ａ・ｂ両面茎部に茶褐色のアスファルト状物質が認められるもので、ｂ面に主要剥離面が残されている。唯一、カメ棺(第２号土器)内から出土した(図２のＳ－９)。

B(2)・・・・ｂ面茎部のみにアスファルト状物質が認められるものであ

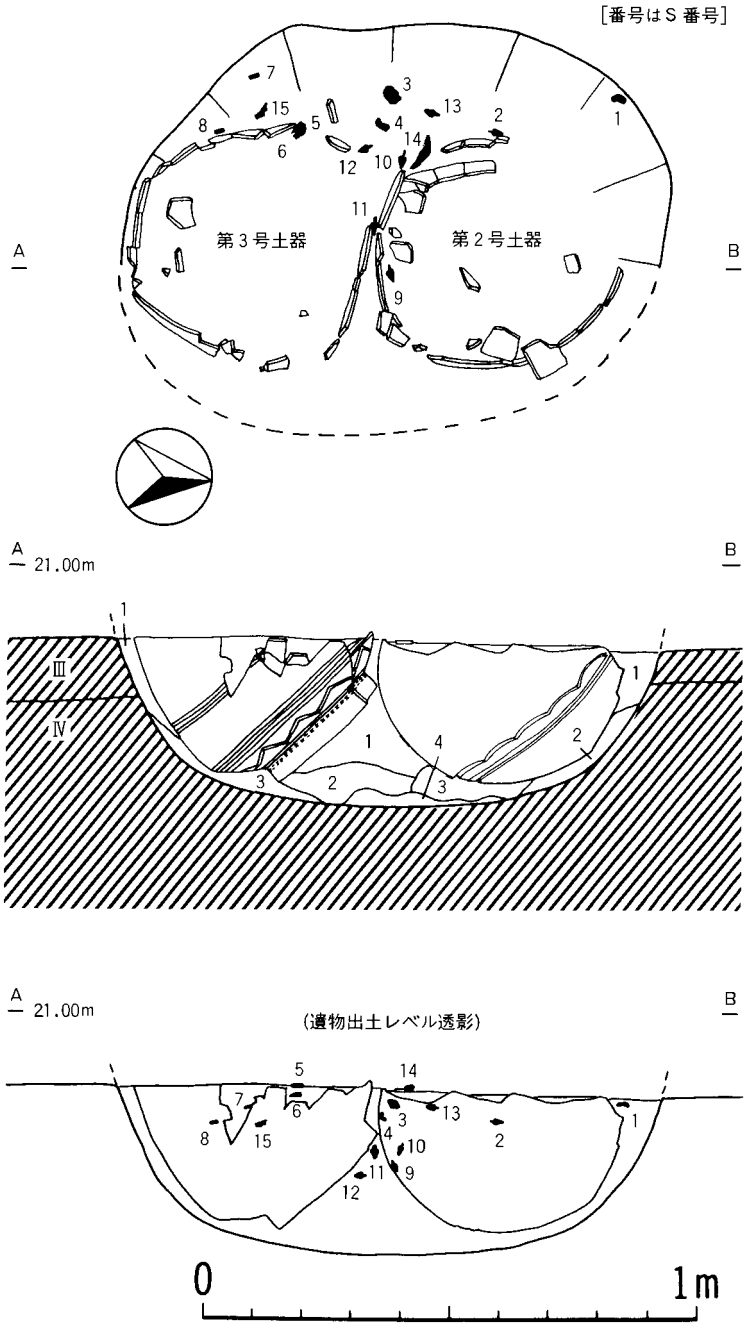


図２　宇鉄遺跡の第２号土壙墓と石器の出土位置

る（図２のＳ－２）。

Ｃ（３）・・・・ａ面中央部に黒いアスファルト状物質が厚く付着しているものである。ただし、その下端は、銛頭先端部の形状を示すように弧状にカーブしている。ｂ面には主要剥離面が残され、側面は湾曲している。また、ｂ面にはアスファルト状物質の付着痕はまったく認められない（図２のＳ－10）。

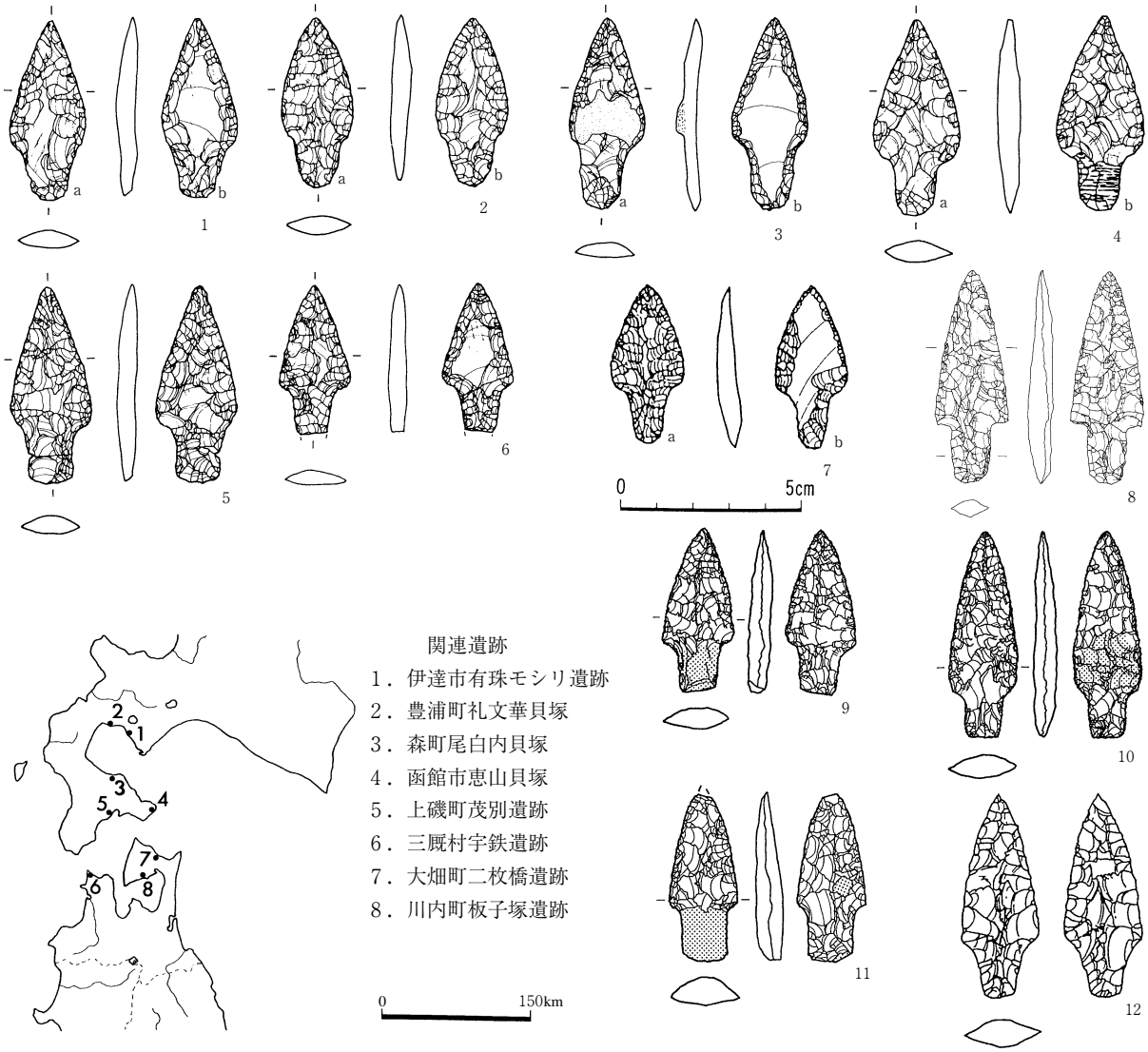


図３　宇鉄遺跡の石銛と関連資料及び関連遺跡

Ｄ（４）・・・・ｂ面茎部に糸を密に巻き、茶褐色のアスファルト状物質で固めた際の痕跡が認められるものである。また、ａ面にはアスファルト状物質の付着痕はまったく認められない（図２のＳ－12）。

Ｅ（５･６）・・・アスファルト状物質の付着が両面に認められないもの（図２のＳ－13・11）で、昭和50～52年出土の４点も同様であることから、計６点に認められないことになる。

これらの石材は、５が近隣の出来島産の黒曜石、他の９点は津軽半島産と見られる頁岩である。

3．北海道島南部の石銛の装着例（図３・４）

まず、アスファルト状物質が付着した石銛は、津軽海峡に面した上磯町茂別遺跡(注４)や噴火湾に面した森町尾白内貝塚(注５)等に類例があり、茂別例（９）は、茎部片面に付着が認められる点で宇鉄Ｂと同様であり、さらに茎部片面上方に付着した例（10）・尾白内（12）の厚く付着した例は、宇鉄Ｃと同様である。また、茂別（11）の茎部片面に糸巻痕、片面中央部にアスファルト状物質の付着が認められる例は、宇鉄Ｄと類似している。

つぎに、石銛の装着法を具体的に示す例は、函館市恵山貝塚（市立函館博物館の能登川コレクション(注６・７)、豊浦町礼文華貝塚の土壙墓(注８～10)、伊達市有珠10遺跡の土壙墓（遺跡名はこの後、有珠モシリ遺跡に変更された）(注11･12)から出土している。恵山には鹿角製銛頭が２点あり(注７)、１点は先端に玉髄製の石銛が装着されたままの状態で出土している（13）。下端中央に銛柄（中柄）用の茎孔をもつもので、木村英明氏(注６)の言う茎孔式（ソケット式）に当たる。銛頭全面に浅く彫り込まれた幾何学文様と「く」の字形にカーブした正面観を持ち、銛索（縄）が付けられる孔（索孔）がある。また、片側縁に大きな鋭い鐖（カエリ）を持ち、銛頭先端には、石銛を装着するために片面を削ぎ落とし、茎部を納めるための浅い溝を作り、反対側に糸を巻きつけるための浅い糸かけ部を作りだしている。また、他の１点（14）は先端部破片で、アスファルト状物質が付着している。これらはいわゆる「燕尾形離頭銛頭」で、大島直行氏が茎孔式単尾銛頭Ｅタイプ（恵山タイプ）と呼称したもの(注11)である。また、礼文華の土壙墓には頁岩製石銛が装着された状態で出土した銛頭が４点あり（15・16）(注10)。銛頭には彫刻があるものとないものがある。中柄を挿入した茎孔はすべて尾部中央にある。索孔は３点が体部下半の正面、１点が体部下半の側面にある。体部の鐖と同様に尾部も両側に突出しており、大島氏が茎孔式双尾銛頭Ｅタイプ（恵山タイプ）と呼称した(注11)ものである。また、有珠モシリでは、頁岩製石銛が装着された状態で出土した鹿角製銛頭８点のうち、５点が写真と図で紹介された(注11・12)。茎孔式単尾銛頭Ｅタイプ３点（装着例２点は写真８・26）(注12)（17・18は同タイプの非装着例）(注11)、茎孔式双尾銛頭Ｅタイプ５点（うち図示装着例は３点。20・21）(注12)・（22）(注11)である。また、このほかにここではじめて出土したもので、銛頭先端に切り込みが入れられ石鏃を差し込むタイプ（19）(注11)も紹介され、茎孔式単尾銛頭Ｕタイプ（有珠10タイプ）と呼称されているが、これには石鏃が装着した状態で出土した例は見られない。

4．宇鉄の石銛の装着復原（図３～５）

これらの北海道島南部例を参考にして宇鉄の石銛の装着復原を行なってみると、まず、茎部両面にアスファルト状物質が付着した宇鉄Ａについては、茎孔式単尾銛頭Ｕタイプ等の挟み込み接着の可能性が高いが、片面接着の可能性もないわけではない。また、片面にアスファルト状物質が付着したものでは、茎部上方にアスファルト状物質が厚く付着した宇鉄Ｃや尾白内例は、恵山・礼文華例の茎孔式単尾銛頭Ｅタイプないしは有珠モシリ例の茎孔式双尾銛頭Ｅタイプに片面接着法で装着されたと見られる。宇鉄Ｃはａ面の接着であろう。また、片面に糸巻痕とアスファルト状物質痕がある宇鉄Ｄ・茂別例は、装着の際に糸を巻きアスファルト状物質で固めたと見られるもので、宇鉄Ｃと同様に片面接着法で装着されたものであろう。ただ、宇鉄Ｄは茎部が短めであることから、茎孔式単尾銛頭Ｅタイプに装着されたもので、ａ面を銛頭に接着させたものであろう。また、片面にアスファルト状物質

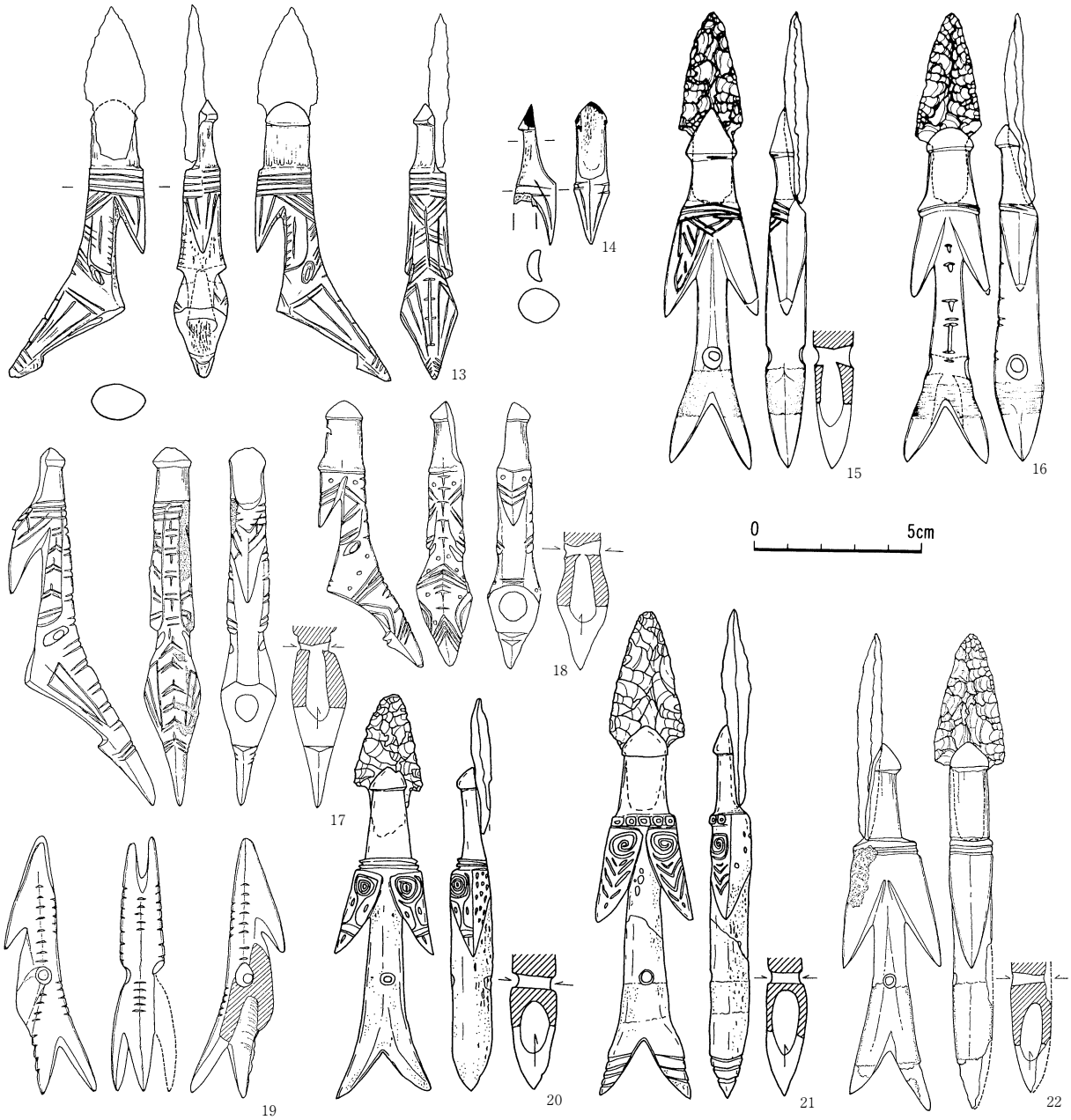


図4　北海道島南部の銛頭と石銛装着例

が付着した宇鉄Ｂについても、茎部が短めであることから、茎孔式単尾銛頭Ｅタイプの片面接着法による装着例であろう。なお、これらが土壙墓に埋納される際に、装着したままで行なわれたかどうか不明である。

また、宇鉄例の大半を占めるアスファルト状物質の付着痕が認められない石銛（宇鉄Ｅ）は、恵山・有珠モシリ等の北海道島南部の恵山文化でも一般的なものであり、共通している。しかし、これが銛頭に片面接着法で装着されたものか、先端に石鏃を挟み込む茎孔式単尾銛頭（Ｕタイプ）に装着されたものか、あるいは他の材質の柄の装着等に用いられたものか明確ではないが、可能性としては有珠モシリ例等により、銛頭に片面接着法で装着されたものが多いと見られる。おそらく、宇鉄Ｄ・茂別例のように糸を密に巻いて（アスファルト固着を行なわないで）銛頭に固定したのであろう。恵山文化期

の北海道島南部におけるアスファルト使用頻度の少なさは、おそらくこの地域における石鏃等の着柄が、縄文期以来、アスファルトを余り使用しないで行なってきた技術の延長上にあるのであろう。

以上のように、アスファルト状物質の有無・付着状況によって、宇鉄の石銛例には銛頭への挟み込み接着と片面接着、あるいはその他まだ不明の装着法が想定されるが、多くは銛頭への片面接着で装着されたと考えられる。また、石銛形態との関連で言えば、すべてとは言えないが、宇鉄例は茎部が短めで、恵山の茎孔式単尾銛頭Ｅタイプ例(13)と大きさ・形態・鐖(カエリ)の部分が類似しており、しかもこの恵山資料には、茎孔式双尾銛頭Ｅタイプに石銛装着例がないことからも、茎孔式単尾銛頭Ｅタイプに装着された可能性がたかい。

さて、本州島北端における石銛の類例は非常に少なく、本県域の大畑町二枚橋遺跡(図３－７)(注13)、川内町板子塚遺跡(図３－８)(注14)等から頁岩製のもの数例が知られているにすぎない。前者は弥生前期(二枚橋式期)のもの、後者は弥生中期～後半とされる第４号土壙墓から出土したものであるが、アスファルト状物質の付着痕はともに見られない(宇鉄Ｅ)。二枚橋例はｂ面に主要剥離面が残されており、形態から言えば宇鉄・恵山例に類似していることから、茎孔式単尾銛頭Ｅタイプに片面接着で装着された可能性がたかい。また、板子塚例は大型で長方形気味の長めの茎部をもつもので、礼文華・有珠モシリの茎孔式双尾銛頭Ｅタイプの装着例に、大きさ・形態が類似している。有珠モシリでは茎孔式単尾銛頭Ｅタイプも出土しているが、礼文華・有珠モシリに個体数が多い茎孔式双尾銛頭Ｅタイプに片面接着で装着された可能性がよりたかい。

有珠モシリの茎孔式単尾銛頭Ｕタイプ(19)に見られる、銛先鏃(形態は不明)を先端の切込みに挟んで固定する技法は、縄文後・晩期や続縄文期の銛頭、さらに周辺地域の近世アイヌのキテなどに見られ、これを東北地方の影響を受けたものとする大島氏の見解(注11)には同感であるが、茎孔式単尾・双尾銛頭Ｅタイプに見られる片面接着という石銛装着法は、北海道島南部以外の縄文～古代等で明確な例は、今のところ宇鉄例のみで、まさに噴火湾沿岸から津軽海峡域にかけて独自に見られる装着法と考えられる。この技法が用いられた理由は、石銛という大型石鏃の装着による重量増から軽量化を図る方法(注15)であり、さらには銛頭の破損軽減や石銛交換の容易性でもあったと見られる。

５．宇鉄の石銛の捕獲対象

つぎに、この石銛を装着した銛頭の対象が何であったのかという問題がある。一般的には海獣とされる場合が多いが、札幌大学の木村英明氏は、銛頭の発達は大型魚類か海獣猟に支えられたと考えられるが、すべてをそうとは言えないとし、銛頭の大小も考慮する必要性を述べた(注６)。また、北海道島函館市の戸井貝塚(縄文後期初頭)の自然遺物を調査した国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏は、小面積から出土した多数のオットセイ個体に関連して、縄文期の角製銛先を装着した銛は北海道島においては、おもにアシカ科(トド・アシカ・オットセイ)の捕獲に用いられた(注16)と考えている。

さて、宇鉄例についてこの問題を考えるには、この時期の本県海峡域の銛頭と自然遺物の関係を考える必要があるが、弥生期の貝塚は下北半島に２ヶ所知られているのみで、しかも角製銛頭が未発見であるため、相関関係をとらえることはできない。そこで、本県域の縄文・弥生の貝塚から出土する大型獣類・魚類を想定してみると、アシカ科類・鯨類・大型魚類等があげられる。しかし、このなかの鯨類については、海峡に多い寄り鯨の利用と考えられる(注17)ことから除外し、可能性として残る候

補は、アシカ科類か大型魚類となる。しかし、大型魚類については、すべてを否定することはできないものの、水中の動きの速さなどを考えると、回転離頭銛による捕獲は困難であり、効率も悪い。結論的には、アシカ科類がもっとも可能性がたかいと見られる。本県域におけるアシカ科類は、縄文～近世の22遺跡から出土している(注17･18)が、西本氏が角製銛頭によるオットセイ猟を想定した戸井のようなオットセイ大量出土例は、本県域では見られないため、その他のアシカ科(トド・アシカ)猟がより可能性がたかい。オットセイよりも接岸性がたかく、比較的捕獲しやすいためである。とくに、毎年冬季から春季にかけて北海道島南部沿岸まで南下してくるトドは、この海峡域に残された椴(トド)法華、トド岬(松前大島)、鮭(トド)島(尻屋崎沖)、海馬(トド)島(深浦町風合瀬沖)の地名からも推定されるように、恵山文化期の海峡域住民にとっては格好の獲物であったはずである。この時代、宇鉄一帯でも、石銛装着の離頭銛によるアシカ科類猟が行なわれていたと見られる。そしてその解体・調理には、対岸と同様に、土壙墓に石銛とともに埋納されていた玉髄製靴形石器(図５－23。図２のＳ－１)や尖端の曲がった珪質頁岩製ナイフ(図５－24。図２のＳ－14)(注１)等が用いられたのであろう。

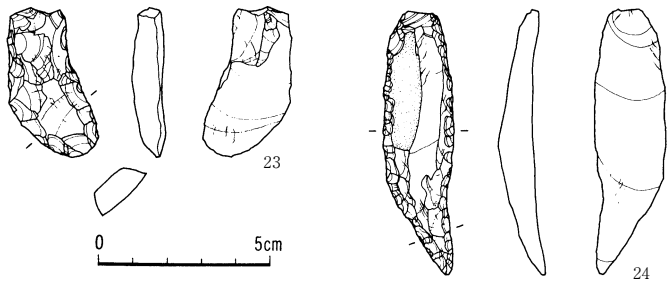


図５　宇鉄遺跡の靴形石器と石製ナイフ

６．おわりに

石銛が銛頭などの先端に装着される漁猟用の銛先であり、北海道島南部の恵山文化期に一般的な石器であることは、宇鉄遺跡の調査以前から承知していたが、本州島で出土状況を含めて見たのはこの遺跡調査が最初であった。しかし、宇鉄では連日、海峡の向こうに北海道島を眺めて調査していたため、この出土自体についてはとくに違和感は持たなかった。また、アスファルト状物質の付着という点についても、弥生期ということで多少の珍しさはあったものの、縄文晩期の石鏃等への付着例が多い津軽では、当然至極という思いで、報告書作成時(注１)には特段の注意を払うことはなかった。しかしその後、津軽海峡の文化交流を具体的に示すアスファルトへの関心の高まり(注19・20)から、報告書作成時に整理した宇鉄例について、あらためて当時の資料記録・メモ等を見直し、アスファルト状物質の付着痕によって、銛頭への装着復原を試みた次第である。その結果、北海道島南部例のなかでもとくに、距離的にも近い対岸の上磯町茂別例等との類似性が確認され、あらためて海峡をめぐる津軽・渡島両半島の文化的関連を強く印象づけさせられることとなった。

弥生・続縄文期においても津軽海峡をめぐる人々の交流は引き続き行われている(注21)が、この主体者は、海峡を漁猟などで主な生業の場としていた人々であり、民俗学・歴史学で言う「海民」(注22)的な人たちではなかったかと以前から想定していたが、石銛が海峡の対岸同士で、形態・柄の装着法はもちろん、墓の副葬品としても共通していたことが再確認されたことは、その想定が的はずれではないことを確信させてくれた。

小稿を終えるにあたり、恵山貝塚資料の実見でお世話になった函館市教育委員会の長谷部一弘氏、有珠モシリ資料についてご教示いただいた伊達市教育委員会の大島直行氏に対して、厚く感謝申し上

げる次第である。

『注』

（1）青森県立郷土館　1989　『三厩村宇鉄遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）― 弥生甕棺墓の第４次調査―』青森県立郷土館調査報告第25集考古－８。なお、本書13Ｐの石鋸は石銛の誤りである。
（2）青森県立郷土館　1979　『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第６集　考古－３
（3）藁科哲男・福田友之　1997　「青森県宇鉄・砂沢・垂柳遺跡出土の碧玉製管玉・玉材の産地分析」『青森県立郷土館調査研究年報』第21号
（4）(財)北海道埋蔵文化財センター　1998　『上磯町　茂別遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第121集
（5）森町教育委員会　1993　『尾白内２－続縄文遺跡の調査報告』
（6）木村英明　1982　「骨角器」『縄文文化の研究』第６巻　雄山閣出版
（7）佐藤智雄・五十嵐貴久　1996　「能登川コレクションの骨角器について」『市立函館博物館研究紀要』第６号
（8）峰山　巌・山口　敏　1969　「第１編　先史時代」『豊浦町史』
（9）渡辺　誠　1973　『縄文時代の漁業』考古学選書７　雄山閣出版
（10）大島直行　1988　「北海道続縄文の漁労具―恵山式銛頭について―」『月刊考古学ジャーナル』№295
（11）大島直行　1988　「続縄文時代恵山式銛頭の系譜」『季刊考古学』第25号
（12）伊達市教育委員会　2004　『図録 有珠モシリ遺跡』
（13）須藤　隆　1970　「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』第56巻第２号
（14）青森県埋蔵文化財調査センター　1995　『板子塚遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
（15）伊達市教育委員会文化財課の大島直行氏のご教示による。
（16）西本豊弘　1993　「海獣狩猟から見た津軽海峡の文化交流」『古代文化』第45巻第４号
（17）福田友之　1998　「本州北辺における鯨類出土遺跡―津軽海峡南岸域における先史鯨類利用―」『青森県史研究』第２号
（18）西本豊弘　1999　「貝塚出土の動物遺存体」『東通村史―遺跡発掘調査報告書編―』　東通村
（19）福田友之　1999　「北の道・南の道―津軽海峡をめぐる交流―」『海を渡った縄文人』　小学館
（20）福田友之　2000　「本州北辺地域における先史アスファルト利用」『研究紀要』第５号 青森県埋蔵文化財調査センター
（21）福田友之　2002　「津軽海峡交流と弥生石偶」『北海道考古学』第38輯
（22）網野善彦　1999　「海民」『日本民俗大辞典上』　吉川弘文館、このほか大林太良　1992　「日本の海洋文化とは何か」『海と列島文化第10巻 海から見た日本文化』　小学館など

青森県鉄関連遺構一覧表

― 中弘・南黒・西北五編 ―

設　楽　政　健

1　はじめに

筆者は、以前「青森県の製鉄遺跡」（設楽2002）の中で、青森県内の製鉄遺跡を取り上げて炉の形状・立地・規模等について表としてまとめたことがある。その際に取り上げた遺跡は、製錬炉・鍛冶炉が検出された遺跡を対象としており、出土した鉄製品や砥石などの鉄生産に関する諸要素については記述していなかったため、新たにそれらを付け加える必要性を痛感していた。

そこで、本稿では以前取り上げた鉄関連炉が検出された遺跡を含め、鉄関連遺物が出土した遺跡を新たにまとめることにしたい。

当初は、県内全体の製鉄遺跡をまとめる予定であったが、紙幅の関係上、今回は弘前市・黒石市・五所川原市・西津軽郡・中津軽郡・南津軽郡・北津軽郡の製鉄遺跡を取り上げる。

一覧表の様式については、製鉄遺跡研究会代表の穴沢義功氏より提供していただいたものに項目をいくつか加えて使用している。また、本表には平成16年度に市町村合併により、町村名が変更したものもあるが、旧町村名のままで表示している。

2　表中の各項目について

表中の各項目について、多くの項目はそれに該当する遺構・遺物があれば○、なければ空欄である。以下、説明が必要な部分について随時、記述する。

・製錬炉　製錬炉が検出された遺跡は●印、その隣の数字は製錬炉の検出数を記した。

・鍛冶炉　鍛冶炉が検出された遺跡は●印、その隣の数字は鍛冶炉の検出数を記した。

・住居　　竪穴式住居跡や中世のカマドのある竪穴遺構も住居とした。住居が検出されていれば○

・工房　　鍛冶炉、小割場等のある住居跡・竪穴遺構を工房とした。

・炭窯　　３種類設定しているが、県内の炭窯の多くは、平面方形ないし円形で地面を掘り込んだ平地式がほとんどである。

・羽口　　県内の羽口をみると、羽口の規模に多少の大小はあるが、例えば杢沢遺跡はやや口径の大きいものが製鉄用で小さいものが鍛冶用であり、野木遺跡は大きいものが鍛冶用で小さいものは製鉄用であるように必ずしも鉄生産の工程の違いを表していないため、県内の遺跡で出土した羽口を一括して大小に分別することはあまり意味がないと考えられた。したがって、全国的には、関東・北陸などの製錬炉でよくみられる内径が10cm前後のものが大口径で、東北などでみられる内径３cm前後のものは小口径と認識されていることから、羽口はすべて『小』とした。

（引用文献）

設楽　政健　2002　「青森県の製鉄遺跡」『青森県考古学第13号―青森県考古学会30周年記念論集』青森県考古学会

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構											遺物																文献等	備考
				製錬炉		鍛冶炉	溶解炉	住居	工房	炭窯			排滓場	城館	炉壁	鉄滓			鉄塊系遺物	鉄製品	羽口			金床石	砥石	粒状滓	鍛造剥片	坩堝	鋳型	分析	発掘歴		
				箱	竪					炭窯(地)	炭窯(平)	炭窯(伏)				製錬	鍛冶	不明			羽口(大)	羽口(小)	不明										
1	若山遺跡	西津軽郡鰺ヶ沢町湯舟町字若山	平安時代		●3？											○															○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	金槌が出土しといわれている
2	浮橋貝塚	西津軽郡鰺ケ沢町小屋敷町字浮橋	縄文時代・平安時代			●3		○	○									○		○			○								○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	
3	外馬屋遺跡	西津軽郡鰺ケ沢町北浮田町字外馬屋	平安時代					○															○								○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	
4	外馬屋前田(1)遺跡	西津軽郡鰺ケ沢町北浮田町字外馬屋前	縄文時代・平安時代・近世					○	○		○						○			○				○？	○					○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書242集『外馬屋前田(1)遺跡ー県営津軽中部地区広域農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告ー』青森県教育委員会 1998	
5	杢沢遺跡	西津軽郡鰺ケ沢町湯舟字若山・七尾	縄文時代・平安時代、近世		●34	●3		○	○		○		○		○	○	○		○	○	○	○		○			○			○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書第130集『杢沢遺跡』1989	
6	大曲遺跡	西津軽郡鰺ヶ沢町建石町字大曲	縄文時代・平安時代			●？		○	○									○						○？							○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	
7	鉄沢遺跡	西津軽郡鰺ヶ沢町松代町	江戸中期？		●？													○													○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	砂鉄
8	大平野遺跡	西津軽郡鰺ヶ沢町建石町字大平野	平安時代		●10										○？	○					○	○									○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	
9	大館森山遺跡	西津軽郡鰺ケ沢町建石町	縄文時代・平安時代		●4			○					○		○？	○							○								○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	
10	豊富遺跡	西津軽郡車力村豊富字屏風山	平安時代														○					○									○	車力村文化財調査報告書第5集『豊富遺跡発掘調査報告書ー青森県西海岸地域における平安時代集落の調査　車力村教育委員会 1998	
11	常盤野遺跡	中津軽郡岩木町常盤野字湯段苑	平安時代					○										○					○		○						○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	
12	岩木山神社元宮	中津軽郡岩木町百沢字寺沢	縄文時代・平安時代																	○			○								○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	
13	巌木山神社元宮遺跡	弘前市十腰内字猿沢	縄文時代・平安時代															○							○						○	『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1968	
14	土人長根遺跡																															『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 1969	
15	石神遺跡	西津軽郡森田村床舞字石神・藤山、大館字八重菊	縄文時代・平安時代・中世・近世		●？	●2											○	○					○		○						○	「青森縣森田村付近の遺跡調査略報」『古代』5号　早稲田大学考古学会　1952・『石神遺跡』1～3　森田村教育委員会　1997～1999	
16	八重菊(1)遺跡	西津軽郡森田村山田字山崎	縄文時代・平安時代・近現代		●2	●2		○	○		○		○		○	○	○			○	○	○		○	○		○？			○	○	森田村緊急発掘調査報告書第7集『八重菊(1)遺跡』森田村教育委員会　2001・森田村緊急発掘報告書第8集『八重菊(1)遺跡Ⅱ』森田村教育委員会　2002・森田村緊急発掘調査報告書第9集『八重菊(1)遺跡Ⅲ・鶴喰(6)遺跡・鶴喰(9)遺跡』2003　森田村教育委員会・「青森縣森田村付近の遺跡調査略報」『古代』5号 早稲田大学考古学会 1952	
17	鶴喰(6)遺跡	西津軽郡森田村床舞字鶴喰	縄文時代・平安時代								○																					森田村緊急発掘調査報告書第9集『八重菊(1)遺跡Ⅲ・鶴喰(6)遺跡・鶴喰(9)遺跡』2003　森田村教育委員会	
18	鶴喰(9)遺跡	中津軽郡森田村床舞字鶴喰	縄文時代・平安時代								○																					森田村緊急発掘調査報告書第9集『八重菊(1)遺跡Ⅲ・鶴喰(6)遺跡・鶴喰(9)遺跡』2003　森田村教育委員会	
19	月見野(2)遺跡	中津軽郡森田村森田字月見野	平安時代														○？															「森田村の遺跡(2)ー製鉄遺跡の紹介ー」森田村郷土文化誌『いしがみ』第6号　1994	
20	大館遺跡	西津軽郡森田村大館字千歳	縄文時代・平安時代															○													○	「森田村の遺跡(2)ー製鉄遺跡の紹介ー」森田村郷土文化誌『いしがみ』第6号　いしがみ刊行会　1995・森田村緊急発掘調査報告書第5集『大館遺跡』森田村教育委員会　1999	

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構											遺物																	文献等	備考
				製錬炉		鍛冶炉	溶解炉	住居	工房	炭窯			排滓場	城館	炉壁	鉄滓			鉄塊系遺物	鉄製品	羽口			金床石	砥石	粒状滓	鍛造剥片	坩堝	鋳型	分析	発掘歴		
				箱	竪					炭窯(地)	炭窯(平)	炭窯(伏)				製錬	鍛冶	不明			羽口(大)	羽口(小)	不明										
21	山田遺跡	西津軽郡森田村山田字神崎	縄文時代・平安時代														○?															「森田村の遺跡(2)ー製鉄遺跡の紹介ー」森田村郷土文化誌『いしがみ』第6号 いしがみ刊行会1996	
22	花林遺跡	西津軽郡車力村車力字花林	縄文時代・平安時代・近世・近代			●?		○			○						○			○		○									○	車力村文化財調査報告書第6集『花林遺跡』ー庭園造成による発掘調査報告ー 車力村教育委員会 2002	
23	今須(3)遺跡	西津軽郡鰺ヶ沢町本町	縄文時代・平安時代・近世					○			○							○		○		○			○						○	鰺ヶ沢町文化財シリーズ 第14集『今須(3)遺跡』ー県営中山間地域総合整備事業にかかわる発掘調査報告ー 1999 鰺ヶ沢教育委員会	銅製品（煙管）
24	種里城跡	西津軽郡鰺ケ沢町種里町字大柳	平安時代・中世					○						○						○		○									○	鰺ケ沢町文化財シリーズ第12集『種里城址Ⅲ』（第四次・五次発掘調査中間報告） 鰺ケ沢町教育委員会 1995	坩堝出土
25	吾妻沢(2)遺跡	西津軽郡深浦町深浦字吾妻沢	平安時代					○								○				○		○			○						○	深浦町埋蔵文化財調査報告書 第4集『吾妻沢(2)遺跡発掘調査報告書』ー深浦変電所関連鉄塔新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー 深浦町教育委員会 1997	焼土状遺構5基
26	大久保(2)・(3)遺跡	弘前市大久保字西田	平安時代・中世・近世															○													○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書』1 弘前市教育委員会 1997	
27	小栗山館遺跡	弘前市小栗山字沢部	縄文時代・弥生時代・平安時代・近世			●?		○							○	○	○			○	○	○		○?						○	○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書』1 弘前市教育委員会 1997『小栗山館遺跡発掘調査報告書市道小栗山大溜池連絡道路建設に伴う発掘調査報告書』1999『弘前市内遺跡発掘調査報告書3』弘前市教育委員会 2000	
28	福村城跡	弘前市福村字新館添	平安時代・中世・近世											○						○											○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書』2 弘前市教育委員会 1998 『弥生平遺跡・東岩木山(2)・(3)・(5)遺跡・山田遺跡・福村城跡』 弘前市教育委員会 1997	
29	早稲田Ｄ地区	弘前市福村字早稲田	平安時代																	○											○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書』2 弘前市教育委員会 1998	
30	沢部(1)遺跡	弘前市小栗山字沢部	縄文時代・弥生時代・平安時代													○	○			○	○	○									○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書』2 弘前市教育委員会 1998	須恵器転用硯
31	福村Ａ地区	弘前市福村字福富・林元	平安時代																	○			○								○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書』3 弘前市教育委員会 1999	
32	福村Ｂ地区	弘前市福村字林元	平安時代															○		○											○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書』3 弘前市教育委員会 1999	
33	福富遺跡	弘前市福村字福富	平安時代															○		○											○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書』3 弘前市教育委員会 1999	
34	早稲田遺跡	弘前市福村字早稲田・新館添	平安時代					○										○		○			○		○						○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書』3 弘前市教育委員会 1999	サイコロ・炭化米・豆
35	独狐遺跡	弘前市独狐字独狐森	縄文時代・平安時代・中世															○		○			○								○	『独狐遺跡発掘調査報告書』Ⅰ弘前市教育委員会 1996 『独狐遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 弘前市教育委員会 1998	草創期爪形文・耳皿
36	山田遺跡	中津軽郡岩木町常盤野字山田																○													○	『弥生平遺跡・東岩木山(2)・(3)・(5)遺跡・山田遺跡・福村城跡』 弘前市教育委員会 1997	
37	大久保Ｃ地区	弘前市大久保字西田	縄文時代・平安															○													○	『大久保C地区発掘調査報告書』弘前市教育委員会 1997	
38	石川城跡	弘前市石川字平山	縄文時代・平安時代・中世・近世																	○											○	『石川城跡内館発掘調査報告書』弘前市教育委員会 1997	
39	史跡津軽氏城跡長勝寺構	弘前市西茂森	縄文時代・平安時代・近世																	○			○								○	『史跡津軽氏城（弘前城跡）長勝寺構 長勝寺発掘調査報告書 住宅及び位牌堂改築に伴う遺跡発掘調査』弘前市教育委員会 2003	

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構											遺物																	文献等	備考
				製錬炉		鍛冶炉	溶解炉	住居	工房	炭窯			排滓場	城館	炉壁	鉄滓			鉄塊系遺物	鉄製品	羽口			金床石	砥石	粒状滓	鍛造剥片	坩堝	鋳型	分析	発掘歴		
				箱	竪					炭窯(地)	炭窯(平)	炭窯(伏)				製錬	鍛冶	不明			羽口(大)	羽口(小)	不明										
40	高杉館遺跡	弘前市高杉字尾上山	縄文時代・古代・中世													○															○	『高杉館遺跡・長谷野遺跡調査報告書』2002 弘前市教育委員会	
41	長谷野遺跡	弘前市高杉字尾上山	古代・中世・近世		●3			○							○	○			○	○					○					○	○	『高杉館遺跡・長谷野遺跡調査報告書』2002 弘前市教育委員会 『独狐蒔苗地区発掘調査概報 市道独狐蒔苗線道路改築事業に伴う堤田遺跡・蒔苗鳥羽遺跡・独狐遺跡発掘調査』弘前市教育委員会 2004	酸化鉄が付着した台石
42	堤田遺跡	弘前市蒔苗字鳥羽	縄文時代・古代・近世					○												○											○	『独狐蒔苗地区発掘調査概報 市道独狐蒔苗線道路改築事業に伴う堤田遺跡・蒔苗鳥羽遺跡・独狐遺跡発掘調査』弘前市教育委員会 2004	
43	蒔苗鳥羽遺跡	弘前市蒔苗字鳥羽	縄文時代・古代・近世																	○											○	『独狐蒔苗地区発掘調査概報 市道独狐蒔苗線道路改築事業に伴う堤田遺跡・蒔苗鳥羽遺跡・独狐遺跡発掘調査』弘前市教育委員会 2004	
44	独狐遺跡	弘前市蒔苗字鳥羽	縄文時代・古代・中世・近世					○										○?		○					○						○	『独狐蒔苗地区発掘調査概報 市道独狐蒔苗線道路改築事業に伴う堤田遺跡・蒔苗鳥羽遺跡・独狐遺跡発掘調査』弘前市教育委員会 2004・青森県埋蔵文化財調査報告書第99集 独狐遺跡』青森県教育委員会 1985	出土鉄滓は再結合滓状
45	久米川遺跡	西津軽群稲垣村沼崎字幾米川	平安時代・近世					○										○					○		○						○	『青森県埋蔵文化財調査報告書第163集 稲垣村久米川遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会 1994	キセル・古銭
46	大野平遺跡	西津軽郡岩崎村正道尻字大野平	縄文時代・平安時代					○												○											○	『大野平遺跡発掘調査報告』岩崎村教育委員会 1982	
47	実吉遺跡	五所川原市羽野木沢字実吉	縄文時代・平安時代・中世・江戸					○												○					○						○	『青森県埋蔵文化財調査報告書 第207集 実吉遺跡 ー国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告ー』1997 青森県教育委員会	
48	宇田野(2)遺跡	弘前市小友字宇田野	縄文時代・弥生時代・平安時代					○												○											○	『青森県埋蔵文化財調査報告書 第217集 宇田野(2)遺跡 宇田野3)遺跡 草薙3)遺跡』ー県営津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告ー 1997 青森県教育委員会	
49	隈無(1)遺跡	五所川原市羽野木沢字隈無	縄文時代・続縄文時代・平安時代・近世																	○					○						○	『青森県埋蔵文化財調査報告書 第237集 隈無(1)遺跡 隈無(2)遺跡 隈無(6)遺跡』ー国道101号浪岡五所川原道路整備事業に伴う遺跡発掘調査報告ー 1998 青森県教育委員会	銅製品有り
50	隈無(3)遺跡	五所川原市羽野木沢字隈無	縄文時代・平安時代・近世					○										○		○					○						○	『青森県埋蔵文化財調査報告書 第237集 隈無(1)遺跡 隈無(2)遺跡 隈無(6)遺跡』ー国道101号浪岡五所川原道路整備事業に伴う遺跡発掘調査報告ー 1998 青森県教育委員会	銅製品有り
51	隈無(6)遺跡	五所川原市持子沢字隠川	縄文時代・平安時代・近世																												○	『青森県埋蔵文化財調査報告書 第237集 隈無(1)遺跡 隈無(2)遺跡 隈無(6)遺跡』ー国道101号浪岡五所川原道路整備事業に伴う遺跡発掘調査報告ー 1998 青森県教育委員会	銅製品有り
52	茶毘館遺跡	弘前市中別所字葛野	縄文時代・平安時代・中世・近世					○						○						○	○	○			○			○		○	○	『青森県埋蔵文化財調査報告書 第110集 茶毘館遺跡』青森県教育委員会 1987	銅製の容器・板碑
53	隠川(4)遺跡	五所川原市持子沢字隠川	縄文時代・弥生時代・平安時代・近世・近代					○										○		○					○						○	『青森県埋蔵文化財調査報告書 第244集 隠川(4)遺跡 隠川(2)遺跡Ⅰ』ー国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告ー 1998 青森県教育委員会	須恵器窯壁
54	隠川(12)遺跡	五所川原市持子沢字隠川	縄文時代・弥生時代・平安時代・近世・近代					○										○		○					○						○	『青森県埋蔵文化財調査報告書 第244集 隠川(4)遺跡 隠川（１２）遺跡Ⅰ』ー国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告ー 1998 青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書第250集『隠川(1)遺跡Ⅰ隠川(2)遺跡Ⅱ－国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告ー』1999 青森県教育委員会	須恵器窯壁・碁石状土製品
55	山野越遺跡	弘前市鬼沢字山ノ越	縄文時代・平安時代					○										○		○			○								○	『青森県埋蔵文化財調査報告書 第285集 山ノ越遺跡ー特別養護老人ホーム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書 2000 青森県教育委員会	

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構											遺物																	文献等	備考
				製錬炉		鍛冶炉	溶解炉	住居	工房	炭窯			排滓場	城館	炉壁	鉄滓			鉄塊系遺物	鉄製品	羽口			金床石	砥石	粒状滓	鍛造剥片	坩堝	鋳型	分析	発掘歴		
				箱	竪					炭窯(地)	炭窯(平)	炭窯(伏)				製錬	鍛冶	不明			羽口(大)	羽口(小)	不明										
56	境関館遺跡	弘前市境関字富岳	弥生時代・平安時代・中世															○		○		○			○			○			○	『青森県埋蔵文化財調査報告書第102集　境関館遺跡ー中小河川平川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1986 青森県教育委員会	鉄鋌状鉄製品・銅滓・銅製品・板碑　住居としたものは掘立柱建物跡と竪穴遺構
57	史跡津軽氏城跡(弘前城跡)	弘前市下白銀町1	近世																	○					○				○		○	『史跡津軽氏城跡（弘前城跡）弘前城北の郭発掘調査報告書　北の郭整整備事業に伴う発掘調査』2002 弘前市教育委員会	
58	狐野製鉄遺跡	五所川原市飯詰字狐野	平安時代		●2								○		○	○							○							○	○	『五所川原市狐野製鉄遺跡ー第一次発掘調査概報ー』1979 五所川原市教育委員会・『五所川原市狐野製鉄遺跡ー第二次発掘調査概報』1980 五所川原市教育委員会	
59	原子溜池(1)遺跡	五所川原市原子字山元	縄文時代・平安時代			○		○															○								○	『青森県埋蔵文化財調査報告書第13集　今別町浜名遺跡・中宇田遺跡・西田遺跡・五郎兵衛山遺跡・五所川原市原子溜池遺跡群発掘調査報告書』1974 青森県教育委員会	
60	石上神社遺跡	西津軽郡木造町蓮川字玉田	縄文時代・弥生時代・平安時代													○		○		○			○		○						○	『青森県教育委員会埋蔵文化財報告書第35集　石上神社遺跡発掘調査報告書　県営圃場整備事業予定地内埋蔵文化財調査　1976 青森県教育委員会	
61	観音林遺跡	五所川原市松ノ木字花笠	縄文時代・平安時代・中世					○												○					○						○	『五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第１３集観音林遺跡（第８次発掘調査報告書）1990 五所川原市教育委員会	
62	三ッ館遺跡	西津軽郡木造町三ッ館	平安																				○								○	『津軽・前田野目窯跡』坂詰秀一編　ニュー・サイエンス社	
63	隠川(2)遺跡	五所川原市持子沢字隠川	旧石器時代・縄文時代・平安時代					○										○					○								○	『五所川原市埋蔵文化財調査報告書第22集　隠川(2)外遺跡発掘調査報告書ー県営前田野目農免農道整備事業に伴う発掘調査報告書』2000 五所川原市教育委員会	
64	藤崎城跡	南津軽郡藤崎町藤崎字館岡	縄文時代・平安時代・中世・近世																	○					○						○	『藤崎町埋蔵文化財調査報告書第２集　藤崎城跡発掘調査報告書　ー藤崎町都市計画街路事業（３・１・11号村元中村井線道路改良工事）に係る埋蔵文化財調査報告書ー』1998『藤崎町埋蔵文化財調査報告書第３集　藤崎城跡発掘調査報告書　ー本町地区コミュニティー消防センター新築工事に係る埋蔵文化財調査報告書ー』1998藤崎町教育委員会	
65	大沢内溜池遺跡	北津軽郡中里町大沢内字海原	平安時代					○									○														○	『青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第20集　中里町大沢内溜池遺跡発掘調査報告書ー中里バイパス関係埋蔵文化財調査ー』1974 青森県教育委員会	土錘
66	富山遺跡	南津軽郡平賀町新屋字富山	縄文時代・平安時代					○												○					○						○	青森県埋蔵文化財調査報告書第21集『富山遺跡・永泉寺跡発掘調査報告書ー東北縦貫自動車道・県営は場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査ー』1975 青森県教育委員会	鉄鍋？
67	神明町遺跡	北津軽郡金木町金木字芦野	縄文時代・弥生時代・平安時代					○												○					○						○	青森県埋蔵文化財調査報告書第58集『金木町　神明町遺跡ー国営小田川農業水利事業	
68	真鶴遺跡	西津軽郡森田村床舞字真鶴	縄文時代・平安時代・近世														○								○							森田村緊急発掘調査報告書第10集『真鶴遺跡・豊原(1)遺跡 2004 森田村教育委員会	
69	豊原(1)遺跡	西津軽郡森田村床舞字豊原	縄文時代・平安時代		●1？										○	○						○										森田村緊急発掘調査報告書第10集『真鶴遺跡・豊原(1)遺跡 2004 森田村教育委員会	
70	上相野遺跡	西津軽郡森田村上相野字明石	平安時代・江戸時代														○			○		○			○						○	森田村緊急発掘調査報告書第11集『上相野遺跡』2004森田村教育委員会 2004	
71	鳥海山遺跡	南津軽郡平賀町沖館字比山館	平安時代			●1		○	○		○？		○							○			○	○	○		○？				○	青森県埋蔵文化財調査報告書第32集『鳥海山遺跡発掘調査報告書（東北縦貫自動車道青森県内埋蔵文化財発掘調査Ⅲ』青森県教育委員会 1977	

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構											遺物																	文献等	備考
				製錬炉		鍛冶炉	溶解炉	住居	工房	炭窯			排滓場	城館	炉壁	鉄滓			鉄塊系遺物	鉄製品	羽口			金床石	砥石	粒状滓	鍛造剥片	坩堝	鋳型	分析	発掘歴		
				箱	竪					炭窯(地)	炭窯(平)	炭窯(伏)				製錬	鍛冶	不明			羽口(大)	羽口(小)	不明										
72	羽黒平(1)遺跡	南津軽郡浪岡町五本松字平野	縄文時代・弥生時代・平安時代・中世		●2	●2		○							○	○	○			○		○			○					○	○	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第2集『羽黒平（Ⅰ）遺跡　五本松地区樹園地農道整備事業に係わる緊急発掘調査』浪岡町教育委員会　1981　青森県埋蔵文化財調査報告書第44集『羽黒平遺跡　東北縦貫自動車道路建設予定地内埋蔵文化発掘調査報告書』青森県教育委員会　1978　青森県埋蔵文化財調査報告書第194集『羽黒平(1)遺跡ー主要地方道青森・浪岡線建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー 1996 青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書第170集『松山・羽黒平(1)遺跡』1995 青森県教育委員会	
73	水木館遺跡	南津軽郡常盤村水木字古館	縄文時代・平安時代・中世・近世・近代					○										○		○			○		○						○	青森県埋蔵文化財調査報告書第173集『水木館遺跡』1995青森県教育委員会	
74	牡丹平南遺跡	黒石市牡丹平字牡丹平南	平安時代					○								○	○			○		○			○						○	青森県埋蔵文化財調査報告書第26集『黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡発掘調査報告書（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査Ⅱ）青森県教育委員会 1976	
75	浅瀬石遺跡	黒石市浅瀬石字山辺	平安時代					○												○		○			○						○		
76	松元遺跡	南津軽郡浪岡町本郷字松元	縄文時代・統縄文時代・平安時代			●3		○									○	○		○			○		○		○?				○	青森県埋蔵文化財調査報告書第46集『松元遺跡発掘調査報告書ー東北縦貫自動車道建設に係る埋蔵文化財発掘調査』1979 青森県教育委員会	
77	松山遺跡	南津軽郡浪岡町五本松字平野	縄文時代・平安時代・中世					○												○		○									○	青森県埋蔵文化財調査報告書第170集『松山・羽黒平(1)遺跡』1995 青森県教育委員会	
78	山元(3)遺跡	南津軽郡浪岡町杉沢字山元	縄文時代・平安時代			●1？		○										○	○?	○			○		○					○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書第159集『山元(3)遺跡』1994 青森県教育委員会	
79	五輪堂遺跡	南津軽郡平賀町岩館字長田	平安時代・中世																	○											○	平賀町埋蔵文化財報告書第11集『五輪堂遺跡』1982 青森県教育委員会	
80	野尻(2)遺跡	南津軽郡浪岡町高屋敷字野尻	縄文時代・平安時代・近世・近代					○										○		○		○			○					○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書第172集『野尻(2)遺跡』1995 青森県教育委員会	
81	板留(2)遺跡	黒石市板留字長坂下	縄文時代・平安時代・中世・近世					○												○		○			○						○	青森県埋蔵文化財調査報告書第59集『板留(2)遺跡発掘調査報告書』1980 青森県教育委員	
82	杉の沢遺跡	南津軽郡浪岡町吉内字杉の沢、北中野字桃里	縄文時代・弥生時代・統縄文時代・平安時代					○										○		○			○		○						○	青森県埋蔵文化財調査報告書第45集『浪岡町杉の沢遺跡発掘調査報告書』1980 青森県教育委員会	
83	豊岡(2)遺跡	黒石市豊岡字長坂	縄文時代・平安時代			●4？		○										○				○									○	黒石市埋蔵文化財調査報告第13集『豊岡(2)遺跡』1995 黒石市教育委員会	
84	山元(2)遺跡	南津軽郡浪岡町杉沢字山元	縄文時代・平安時代・近世・近代			●2		○	○		○				○				○?	○		○		○	○		○			○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書第171集『山元(2)遺跡』1995 青森県教育委員会	
85	高屋敷館遺跡	南津軽郡浪岡町高屋敷字野尻	平安時代			●2？		○	○					○	○		○			○		○		○	○		○			○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書第243集『高屋敷館遺跡』1998 青森県教育委員会 富山大学考古学研究報告第7冊	自在鈎状の銅製品、銅椀、鉄鍋、錫杖状鉄製品、鉄鍋
86	唐川城跡	北津軽郡市浦村相内	平安時代・中世		●1			○						○	○	○				○		○			○					○	○	『津軽唐川城跡ー古代環壕集落の調査』2002 富山大学人文学部考古学研究室	
87	山本遺跡	南津軽郡浪岡町徳才子字山本	縄文時代・平安時代		●2			○							○	○				○		○			○					○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書第105集『山本遺跡』1987 青森県教育委員会	
88	大平遺跡	南津軽郡大鰐町長峰字杉浦平	縄文時代・平安時代			●？		○										○		○			○		○						○	青森県埋蔵文化財調査報告書第52集『大平遺跡発掘調査報告書東北縦貫自動車道建設予定地内埋蔵文化財発掘調査』1980 青森県教育委員会	炭化米
89	大面遺跡	南津軽郡碇ケ関村古懸字大面	縄文時代・弥生時代・平安時代					○												○											○	青森県埋蔵文化財調査報告書第55集『大面遺跡』1980 青森県教育委員会	

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構										遺物																	文献等	備考
				製錬炉		鍛冶炉	溶解炉	住居	工房	炭窯			排滓場	城館	炉壁	鉄滓			鉄塊系遺物	鉄製品	羽口			金床石	砥石	粒状滓	鍛造剥片	坩堝	鋳型	分析	発掘歴		
				箱	竪					炭窯(地)	炭窯(平)	炭窯(伏)				製錬	鍛冶	不明			羽口(大)	羽口(小)	不明										
90	砂沢平遺跡	南津軽郡大鰐町長峰字砂沢平	縄文時代・平安時代					○										○		○		○			○							○	青森県埋蔵文化財調査報告書第53集『砂沢平遺跡ー東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1980　青森県教育委員会	
91	永野遺跡	南津軽郡碇ケ関村碇ケ関字永野	縄文時代・平安時代					○												○					○							○	青森県埋蔵文化財調査報告書第56集『永野遺跡発掘調査報告書』1980　青森県教育委員会	
92	古館遺跡	南津軽郡碇ケ関村古懸字沢田館岸	縄文時代・弥生時代・平安時代		●?	●?		○						○			○			○		○			○							○	青森県埋蔵文化財調査報告書第54集『碇ケ関村古館遺跡』1980　青森県教育委員会	銅製品有り、転用硯、錫杖状鉄製品、金槌
93	中里城跡	北津軽郡中里町中里字亀山	平安時代・中世											○			○								○							○	中里町文化財調査報告第3集『中里城跡Ⅱ・平山西』1991　中里町教育委員会	
94	平山西遺跡	北津軽郡中里町中里字平山	平安時代														○															○	中里町文化財調査報告第3集『中里城跡Ⅱ・平山西』1991　中里町教育委員会	
95	李平下安原遺跡	南津軽郡尾上町李平字下安原	縄文時代・平安時代・中世・近世					○								○	○			○		○			○					○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書第111集『李平下安原遺跡』1988　青森県教育委員会	
96	源常平遺跡	南津軽郡浪岡町北中野字上沢田	縄文時代・平安時代・中世・近世・近代					○						○						○												○	青森県埋蔵文化財調査報告書第39集『源常平遺跡発掘調査報告書』ー東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査』1978　青森県教育委員会	
97	大浦城跡遺跡	中津軽郡岩木町五代字早稲田	中世					○												○												○	『大浦城跡遺跡』ー津軽中学校校庭整備計画に伴う試掘調査報告書ー1996　青森県教育委員会	
98	大光寺新城跡遺跡	南津軽郡平賀町大光寺字三村井	弥生時代・奈良時代・平安時代・中世			●21		○						○				○		○			○		○			○				○	平賀町埋蔵文化財報告書第19集『大光寺新城跡遺跡発掘調査報告書』1990　平賀町教育委員会　平賀町埋蔵文化財報告書第26集『大光寺新城跡ー第10次調査ー』2000　平賀町教育委員会　平賀町埋蔵文化財報告書第27集『大光寺新城跡遺跡ー7・9・11次発掘調査ー』2000　平賀町教育委員会　平賀町埋蔵文化財報告書第29集『大光寺新城跡遺跡ー第12次発掘調査』2001　平賀町教育委員会	鉄鋌状鉄製品
99	五輪野遺跡	南津軽郡尾上町猿賀字明堂	縄文時代・弥生時代・平安時代・中世・近世					○										○		○			○							○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書第219集『垂柳遺跡・五輪野遺跡ー南津軽広域農道改良事業に伴う遺跡調査報告ー』1997　青森県教育委員会	金槌・鐃・柄香炉・銅製品
100	十三湊遺跡	北津軽郡市浦村十三字琴湖岳	中世・近世			●3			○		○				○			○		○		○			○		○	○				○	青森県埋蔵文化財調査報告書第200集『十三湊遺跡ー青森県第1次発掘調査概報ー』1996　青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第248集『十三湊遺跡Ⅲ』1998　青森県教育委員会　市浦村埋蔵文化財調査報告書第13集『十三湊遺跡～1999・2000年度第90・120次調査概報ほか～』2001　市浦村教育委員会　市浦村埋蔵文化財調査報告書第15集『十三湊遺跡ー平成13年度第145次発掘調査報告書ー』2003　青森県市浦村教育委員会	銅滓
101	新館城遺跡	南津軽郡平賀町新館字藤巻・後野	平安時代・近世																	○					○							○	平賀町埋蔵文化財報告書第32集『新館城遺跡発掘調査報告書』2003　平賀町教育委員会	
102	隠川(11)遺跡	五所川原市持子沢字隠川	縄文時代・弥生時代・平安時代・近世																	○												○	青森県埋蔵文化財調査報告書第295集『隠川(11)遺跡Ⅱ』2001　青森県教育委員会	
103	泉田遺跡	弘前市鬼沢字二千刈ほか	縄文時代・平安時代・中世・近世・近代															○		○		○			○							○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書8』2004　弘前市教育委員会	
104	野際遺跡	弘前市下湯口字村元	縄文時代・平安時代・近世																			○										○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書8』2004　弘前市教育委員会	
105	若葉遺跡	弘前市若葉2丁目	縄文時代・平安時代・近世																			○										○	『弘前市内遺跡発掘調査報告書8』2004　弘前市教育委員会	
106	中野(2)遺跡	弘前市下湯口字村元	縄文時代・平安時代・近世・近代・					○												○												○	『十腰内(1)遺跡　中野(2)遺跡発掘調査報告書ー弘前市道改良工事に伴う発掘調査』2004　弘前市教育委員会	

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構										遺物																		文献等	備考
				製錬炉		鍛冶炉	溶解炉	住居	工房	炭窯			排滓場	城館	炉壁	鉄滓			鉄塊系遺物	鉄製品	羽口			金床石	砥石	粒状滓	鍛造剥片	坩堝	鋳型	分析	発掘歴		
				箱	竪					炭窯(地)	炭窯(平)	炭窯(伏)				製錬	鍛冶	不明			羽口(大)	羽口(小)	不明										
107	浪岡城跡	南津軽郡浪岡町浪岡字五所	縄文時代・平安時代・中世・近世・近代					○						○				○		○		○			○			○	○		○	「浪岡城」1978 浪岡町教育委員会「浪岡城跡Ⅱ」1979 浪岡町教育委員会「浪岡城跡Ⅲ」1980 浪岡町教育委員会「浪岡城跡Ⅳ」1981浪岡町教育委員会「浪岡城跡Ⅴ」1984 浪岡町教育委員会「浪岡城跡Ⅶ」1985 浪岡町教育委員会「浪岡城跡Ⅷ」1986浪岡町教育委員会「浪岡城跡Ⅸ」1988「浪岡城跡Ⅹ」1989 浪岡町教育委員会	銅製品製作のための坩堝・刀装具の鋳型・鉄鋌状鉄製品
108	八幡崎(2)遺跡	南津軽郡尾上町八幡崎字宮本	縄文時代・平安時代					○												○		○									○	「八幡崎(2)遺跡発掘調査報告書」1984 尾上町教育委員会	
109	甲里見(2)遺跡	黒石市高館字甲里見	縄文時代・弥生時代・平安時代・中世・近世					○												○		○			○						○	黒石市埋蔵文化財調査報告第8集『甲里見(2)遺跡』1989黒石市教育委員会	
110	野尻(1)遺跡	南津軽郡浪岡町高屋敷字野尻	縄文時代・弥生時代・平安時代					○										○		○		○			○					○	○	青森県埋蔵文化財調査報告書第259集『野尻(1)遺跡Ⅱ－国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－」1999 青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書第277集『野尻(1)遺跡Ⅲ－国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－」2000 青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書 第320集『野尻(1)遺跡Ⅳ－国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－」2002 青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書『野尻(1)遺跡Ⅴ－国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－」2003 青森県教育委員会	

（平成16年12月作成）

執筆者一覧

さかもとまゆみ
坂本　真弓　　青森県埋蔵文化財調査センター
調査第１グループ文化財保護主事

のむらのぶお
野村　信生　　青森県埋蔵文化財調査センター
調査第１グループ文化財保護主事

なりたしげひこ
成田　滋彦　　青森県埋蔵文化財調査センター
調査第２グループ総括主幹

なかじまともふみ
中嶋　友文　　青森県埋蔵文化財調査センター
調査第１グループ文化財保護主幹

ふくだともゆき
福田　友之　　青森県埋蔵文化財調査センター
次長（調査第１グループリーダー事務取扱）

しだらせいけん
設楽　政健　　青森市教育委員会文化財課文化財主事

研　究　紀　要　　第　10　号

発行年月日　2005年３月７日
編集・発行　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038－0042　青森市新城字天田内152－15
電　話　017－788－5701
ＦＡＸ　017－788－5702
印　　刷　(有)三恵プリント
〒038－0004　青森市富田４丁目28－24
電　話　017－782－1234
ＦＡＸ　017－782－1239

BULLETIN

OF
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER

No.10

CONTENTS

Pottery- laid- under- the- ground in the Early Jomon Period in Aomori Prefecture District. — Mayumi *SAKAMOTO*

The Pottery Excavated from Mochinosawa Site. — Nobuo *NOMURA*

The Terminal Stage of Sannai-Maruyama Site.
: The Main Focus on the Relics and the Structural Remains in the Late Jomon Period. — Shigehiko *NARITA*

The Pit Burials at Asahiyama (2) Site in Aomori City District. — Tomofumi *NAKAJIMA*

The way of Attaching a Harpoon Head at Utetsu Site.
: The Examples from the Esan Cultural Phase in the Southern Coast of the Tsugaru Strait. — Tomoyuki *FUKUDA*

The Table of the Structural Remains Related to Iron Relics in Aomori Prefecture District. — Seiken *SHIDARA*

March 2005

AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER